

# 帰属的用法再考

浅利みなと

# 目次

|   |    |
|---|----|
| はじめに.....                                   | 2  |
| 1 確定記述の2つの用法とそれにまつわる論争.....                 | 3  |
| 1.1 DONNELLAN (1966) による帰属的用法と指示的用法の区別..... | 3  |
| 1.3 帰属的用法と指示的用法の区別の受容史.....                 | 7  |
| 1.3.1 語用論的解釈.....                           | 8  |
| 1.3.2 意味論的解釈.....                           | 15 |
| 1.4 暗黙の前提.....                              | 22 |
| 2 帰属的用法再考.....                              | 26 |
| 2.1 帰属的用法におけるニアミス.....                      | 26 |
| 2.2 ドネランの言語観—発話の合理的設計と解釈.....               | 30 |
| 2.3 帰属的用法を伴う発話の合理的設計と解釈.....                | 44 |
| 3 従来 of ドネラン解釈との比較.....                     | 53 |
| 3.1 証拠事例.....                               | 53 |
| 3.2 証拠事例の批判的検討—「スミスの殺害者」は指示的か？.....         | 59 |
| 3.2.1 念頭におくことと誰であるかを知ること.....               | 60 |
| 3.2.2 出来事に依拠した帰属的用法.....                    | 68 |
| おわりに.....                                   | 74 |
| 参考文献.....                                   | 75 |

## はじめに

本稿の目的は、ドネランが 1966 年の論文「指示と確定記述」において提示した確定記述の 2 つの用法、帰属的用法と指示的用法のうち、帰属的用法を再考することにある。ドネランがこの区別を提示してから、哲学者たちの関心は指示的用法に集中してきたと言って差し支えないだろう。指示的用法が意味論と語用論どちらの現象なのかに関して膨大な議論を費やされ、この論争は今もなお決着をみていない。また一方で、指示的用法をドネランがなした以上に拡張して解釈することで、本来は帰属的用法として分類されていた事例も指示的用法の一例として組み入れようとする議論も近年盛んになっている。このような議論の場で、ある暗黙の前提が共有されている。それは、確定記述の帰属的用法はラッセルの記述の理論で分析される用法である、というものである。しかし、この前提は正しくない。ドネランのテキストを詳細に読み解き、帰属的用法という現象を正しく把握することで、このことは明らかになるだろう。指示的用法と同様に、帰属的用法もまた、発話の状況や話者の意図および目的等々が複雑に絡み合った用法であり、哲学的探求の価値があることを立証するために、本稿は紡がれたものである。

本稿は次のような構成となる。1 章では、確定記述の帰属的用法と指示的用法がどのようにして哲学者に受容されていったのかを概観する。そこから、帰属的用法はラッセルの記述の理論と両立する、という哲学者たちの暗黙の前提を取り出す。2 章では、まず、この前提が誤ったものであることを指摘し、発話の合理的設計と解釈という観点からドネランの解釈を試みる。この解釈をもとに帰属的用法に詳細な分析を与える。3 章では、荒磯やカプラン、アルモグらの指示的用法を拡張して解釈する近年の試みを批判的に検討し、いわゆる証拠事例はあくまで帰属的用法の一例として考えられると論じる。

## 確定記述の 2 つの用法とそれに関わる論争

本章の目的は、ドネランが提示した確定記述の帰属的用法 (attributive use) と指示的用法 (referential use) に関わる論争を概観し、この論争で共有されていると思われる 1 つの暗黙の前提を取り出すことにある。ドネランは 1966 年の論文「指示と確定記述 (Reference and Definite Descriptions)」において、確定記述には上記の 2 つの用法があると論じた。彼によれば、それまでにあったラッセルとストローソンの確定記述の理論のいずれもこの 2 つの用法を明確に捉えきれておらず、この 2 つの用法の存在はどちらの理論をも反駁するものであるという。ドネランのこの論文に対する哲学者たちの反応は主に 2 つに分けることができる。私は以下でそれぞれを「語用論的解釈」と「意味論的解釈」と呼ぶ。語用論的解釈を採用する哲学者たちの反応は次のようなものである。ドネランの指摘している現象は語用論に属する事柄であり、確定記述の意味そのものに関わる事柄ではない。したがって、確定記述の意味論を与えているラッセルの記述の理論の反駁には何らなっていない。対照的に、意味論的解釈を採用する哲学者たちは次のように主張してきた。確定記述が帰属的に用いられているときと指示的に用いられている場合とでは、その発話の真理条件ないし命題内容は異なる。その点で、この区別は意味論的重要性をもつものである、と。ドネランのものと論文が出版されて 50 年以上経過した現在でも、語用論的解釈と意味論的解釈のどちらが正しいのかに関して論争が続いている。本稿では、どちらの解釈が正しいのかに関して、できる限り中立でありたいと考えている。むしろ、最初に述べたように、私の目的はどちらの解釈にも共有されている前提を取り出すことにある。

本章は次のような構成となる。まず、1.1 節で、Donnellan (1966) で提示された確定記述の帰属的用法と指示的用法それぞれの特徴、およびラッセルとストローソンに対する彼の批判をみる。1.2 節では、帰属的用法と指示的用法の区別が哲学者たちにどのように受容されてきたかを概観する。まず、1.2.1 節で語用論的解釈を採用する代表的論者としてグライスとクリプキの議論を取り上げ、彼らがどのようにしてドネランの主張からラッセルを擁護しているかをみる。1.2.2 節では、語用論的解釈に回答するかたちで提出された意味論的解釈を紹介する。この立場を標榜する代表的な論者として、デヴィット、ウェットスティーン、ライマーらが挙げられる。最後に 1.3 節で、これまでの議論を踏まえ、この論争において多くの言語哲学者に共有されていると思われる暗黙の前提を 1 つ取り出す。それは、確定記述の帰属的用法はラッセルの記述の理論と両立する、というものである。

### 1.1 Donnellan (1966) による帰属的用法と指示的用法の区別

以下では、1966 年の論文「指示と確定記述」において、ドネランが確定記述の帰属的用法と指示的用法をどのように特徴づけているのかを、後の議論で関わる範囲で紹介する。ドネランは「スミスの殺害者は正気ではない (Smith's murderer is insane)」という主張文を用いて、確定記述の帰属的用法と指示的用法の例を挙げることから初めている。帰属的用法の例として、ドネランが最初に挙げるのは次のような例である。

我々が無残に殺害されたスミスに目にすると思定しよう。殺害の残忍な手口とスミスが世界で最も愛すべき人物であったという事実から、我々は「スミスの殺害者は正気ではない (Smith's murderer is insane)」と叫ぶかもしれない。話を単純化するために、ごくごく日常的な意味で我々は誰がスミスを殺したのかを知らないと仮定しよう（これはこの事例にとって最終的には本質的ではない）。これを、確定記述の帰属的用法と私は呼ぼう。（Donnellan, 1966, p. 285, 邦訳 97-98 頁）<sup>1</sup>

ドネランは、確定記述の帰属的用法を、何であれあるいは誰であれその記述に適合するものについて語るための用法と特徴づけている。上の例で言えば、話者は、それが誰であれスミスの殺害者は正気ではないという主張をしているのである。

ドネランは、同じ「スミスの殺害者は正気ではない (Smith's murderer is insane)」という文を例に、指示的用法を以下のように素描している。

例えば、ジョーンズがスミスの殺人容疑で告訴され裁判にかけられていると思定しよう。裁判でジョーンズの奇妙な振る舞いが話題になったとしよう。我々は「スミスの殺害者は正気ではない (Smith's murderer is insane)」と述べることで、彼の振る舞いの印象を要約するかもしれない。もし、その記述を用いて誰を指示しているのかと誰かに尋ねられたら、ここでの答えは「ジョーンズ」である。これを、確定記述の指示的用法と私は呼ぼう。（Donnellan, 1966, p. 286, 邦訳 98 頁）

確定記述の指示的用法とは、話者が話題にあげようとしている対象を聞き手に選び出させ、その対象について何事かを語るための用法であるとされる。上の例で言えば、「スミスの殺害者」という確定記述を用いることで、話者は聞き手にジョーンズを選び出させ、まさに彼が正気ではないということを述べている。

ドネランは、この 2 つの用法が真に異なる用法であるということを示すために、記述に適合する対象が存在しない場合、すなわち確定記述がもつとされる前提ないし含意（presupposition or implication）<sup>2</sup>が偽である場合を考察するよう我々を導く。確定記述が帰属的に用いられているか指

<sup>1</sup> Donnellan (1966) の邦訳は『言語哲学重要論文集』（松阪陽一編, 春秋社, 2013）に所収の荒磯敏文氏の訳を参考にしているが、好みに合わせて訳語は適宜変えている。

<sup>2</sup> ドネランのこの「前提ないし含意」という言い回しは、Donnellan (1966) に先立つラッセルとストローソンの確定記述の理論の両方への言及を考へてのことだと思われる。以下の議論に関わる範囲で、ラッセルとストローソンによる確定記述の分析について簡単に補足する。ラッセルは 1905 年の論文「表示について (On Denoting)」で、いわゆる記述の理論を展開した。これによると、“The F is G” というかたちの文は、 $\exists x (Fx \wedge \forall y (Fy \rightarrow y = x) \wedge Gx)$  という論理形式で表される命題へと還元される。大まかに言って、これは以下の 3 つの連言と等しい。

- (i) F であるものが存在する。
- (ii) F であるものはただか 1 つしか存在しない。
- (iii) F であるものはそれが何であれ G である。

ラッセルのこの分析の特徴として、次の 2 つが挙げられる。第一に、確定記述は指示表現としての地位をもたないという点。第二に、“The F is G” という文の発話は F である対象の一意存在を論理的含意にもつという点である。したがって、ラッセルに従えば、F である対象が存在しないか 2 つ以上存在する場合、“The F is G” という発話は偽となる。

示的に用いられているかで、その帰結は大きく異なるという。上のスミスの殺害者の例で、例えば、スミスは誰かに殺害されたのではなく自殺していたのだとしよう。帰属的用法の場合、スミスの殺害者がただ 1 人存在するという前提ないし含意は偽であり、誰も「スミスの殺害者」という記述によっては同定されえない。よって、話者は真であることを述べることに成功しないだろうとドネランは述べる。しかし、指示的用法の場合、事情は異なる。ドネランは、上の状況であれば、たとえジョーンズがスミスの殺害者ではなかったのだとしても、彼は適切に同定され、その奇妙な振る舞いについて語ることができる」と主張する。したがって、指示的用法の場合、記述に適合する対象が存在しなかったとしても、帰属的用法と同様の帰結が生じるわけではない。

ドネランによれば、指示的用法の場合、確定記述それ自体は話者が念頭においている (have in mind) 対象を聞き手に選び出させるための単なる手段にすぎないという<sup>3</sup>。その本質的な役割は、まさに自分が話題にしたいと思っている対象に聞き手の注意を向けさせることであり、同じ役割を果たせるのであれば、別の確定記述や名前を使っても差し支えない。これに対して、帰属的用法の場合、話者はまさに何であれその記述に適合する対象について語ろうとしているのであり、その点で当該の記述は本質的に現れている。確定記述を帰属的に用いている話者にとって、その確定記述によって帰属される性質、上の例で言えば、「スミスの殺害者」という性質が何よりも重要なのである。

この 2 つの用法の区別は主張文だけでなく、疑問文や命令文でも同様に成り立つ。特にドネランは、たとえ記述に適合する対象が存在しなくても、指示的用法の場合は質問や命令に成功するという観点から 2 つの用法の違いを説明している。彼は次のような諸事例を挙げている。あるパーティーでマティーニグラスをもった面白い見た目をした人物がいるという状況を想定しよう。ここで、「マティーニを飲んでいる人は誰ですか? (Who is the man drinking a martini?) 」という質問をするとする。たとえその人が飲んでいるのが水だったとしても、この話者はその人物を指示し、十分に答えられる質問をしているといえるだろう。また、「机の上の本をとってくれ (Bring me the book on the desk) 」という命令文において、「机の上の本」という確定記述が指示的に用いられているとしよう。このとき、机の上ではなく机のそばに本がおいてあってとしても、その本を話者のもとへ持っていくことは、その本が意図されていた本であれば命令に従ったとみなされるだろう。帰属的用法の場合、同様の可能性、すなわち、記述に適合する対象が存在しない場合に質問に答えたり命令に従ったりできる可能性はない。こうした考察は、帰属的用法と指示的用法の区別が主張文だけでなく、質問文や命令文で用いられている確定記述に関しても当てはまることを示している。

ラッセルとストローソンに対する批判へと話を進めよう。ドネランは、どちらの確定記述の理論も 2 つの用法を正しく捉えられていないと批判する。まず、論文の冒頭で両者に共通する誤りを次のように指摘している。

ストローソンとラッセルは、私が思うに、確定記述がどのように機能するかという問いについて、ここである共通の想定をしている。すなわち、我々は確定記述がある文中でどのように機能するかについて、それが用いられる特定の状況とは独立に問うことができるというも

---

Strawson (1950) は、ラッセルを批判して次のような主張を展開した。まず、ストローソンは確定記述が指示表現であることを明確に打ち出している。そして、“The F is G” という発話において F である対象の一意存在は、発話の論理的含意なのではなく前提 (presupposition) であるとされる。この分析によると、F である対象が存在しないか 2 つ以上存在する場合、この発話は偽なのではなく真理値をもたないものとして扱われる。

<sup>3</sup> Donnellan (1966), p. 285.

のである。(Donnellan, 1966, p. 283, 邦訳 93-94 頁)

ラッセルは、“The F is G”という文は文脈にかかわらず  $\exists x (Fx \wedge \forall y (Fy \rightarrow y = x) \wedge Gy)$  という論理形式へと還元可能だと考えていた。ストローソンは、ある確定記述が一意指示使用 (uniquely referring use) をもつ場合とそうでない場合があることは確かに認識していたものの<sup>4</sup>、ある文に含まれる確定記述が指示のために用いられているか否かは、文の種類に依存すると考えていたと思われる。したがって、“The F is G”という形式の文が与えられれば、その文中の確定記述 “The F” がどのように機能するかについては状況と独立に決定できるという想定自体は、2 人に共有されている。しかし、スミスの被害者の例からも明らかなように、確定記述がどのような文に現れているかと、その確定記述が帰属的と指示的のどちらで用いられるかは独立の事柄である。なぜなら、同じ文であっても我々はそこに含まれている確定記述を帰属的にも指示的にも用いることができるからである。

さらに、VI節においてドネランは、ラッセルとストローソンの理論それぞれに対して批判を重ねている。ラッセルに対する批判は、彼が指示的用法を認識していないという点に集約される。注 1 でみたように、ラッセルの分析に従えば、“The F is G”という文は、F であるものがただ 1 つ存在することを論理的に含意する。したがって、記述に適合する対象が存在しない場合、この文の発話は偽になる。この分析は確定記述の指示的用法に対しては明らかに当てはまらなないとドネランは批判する<sup>5</sup>。なぜなら、指示的用法においては、記述に適合する対象が存在しなくても、話者はある対象を指示し、その対象について真なことを述べるからである。

続いて、ストローソンに対する批判は以下である。ストローソンは、ラッセルとは違い、確かに確定記述の指示的な機能を認識してはいた。しかし、確定記述の指示的な機能を説明するにあたり、帰属的用法と指示的用法ストローソンはラッセルを批判して、F であるものがただ 1 つ存在することは、“The F is G”という文の使用の論理的含意なのではなく、その前提<sup>6</sup>であると主張した。彼によれば、もし F であるものが存在しなければ、この言明が真なのか偽なのかという問いは端的に生じない。この場合、話者は指示に失敗しており、真であることも偽であることも述べてはならない。ストローソンの誤りは、この確定記述がもつ前提に関する主張にある。ドネランが言うように、“The F”という確定記述が指示に用いられている際に、F である対象が存在しなかったとしても、話者は指示に十分成功しうるし<sup>7</sup>、指示対象について真な言明を述べることができる。したがって、確定記述が指示に用いられている際、その記述に当てはまる対象が存在しなければ、話者は指示に失敗し、当該の言明は真でも偽でもないというストローソンの主張は誤りである。むしろ、この主張は当ては

<sup>4</sup> ストローソンは、「クジラは哺乳類である (The whole is mammal)」と「クジラが船にぶつかった (The whole stuck the ship)」という 2 つの文を例にあげ、それぞれで「クジラ (the whole)」という確定記述が異なる用いられ方をしていると述べている。前者では特定のクジラに指示していないのに対して、後者の場合、特定のクジラについて指示しているのは明らかである。このように、ストローソンは確定記述が指示以外の機能をもつことを認識していたものの、ドネランが指摘するような、同一の文に現れている確定記述が異なった仕方で用いられる可能性は認識していなかったと思われる。

<sup>5</sup> Donnellan (1966), p. 292, 邦訳 109 頁

<sup>6</sup> 「前提 (presupposition)」という用語は後になって広まったもので、Strawson (1950) は特別で奇妙な意味での「含意 (imply)」という用語を使っている。

<sup>7</sup> 本稿の 3 章でも言及するが、ドネランは指示に失敗する事例として、話者が幻覚か何かを見ていて「これが私の指示したものだ」と話者本人が言えるようなものが存在しない状況を挙げている。しかし、これはストローソンが想定していたよりもかなり極端な状況である。

まるとしても帰属的用法にのみ当てはまることであるだろうとドネランは言う。2 人への批判は次の一節に要約されている。

ラッセルの理論もストローソンの理論も、確定記述の使用について正しい説明を提示していないと私は結論づける。ラッセルの理論は、指示的用法を完全に無視しているし、ストローソンの理論は、指示的用法と帰属的用法の区別をすることに失敗し、それぞれについて正しいことを（誤ったいくつかのことと一緒にして）まぜこぜにしている。（Donnellan, 1966, p. 297, 邦訳 114 頁）

以上、Donnellan (1966) の議論の骨子を敷衍してきた。この論文は現代まで続く大きな論争を引き起こしたが、この論文がそれほどまでに刺激的であったのは、次の 3 つに依るところが大きいと考えられる。1 つ目は、Kaplan (1978) の言葉を借りれば、確定記述の帰属的用法と指示的用法という区別が、「言語使用に対する精確な洞察を明快に反映している<sup>8</sup>」こと。2 つ目は、指示という概念をある対象を念頭におくという話者の認知的状態に基礎づけたこと。3 つ目は、指示的用法において、話者の用いている記述に適合する対象が存在しない場合に、話者は自らの念頭においている対象の指示に成功し<sup>9</sup>、その対象について真なことを述べうると主張し、ラッセルとストローソンに対する批判を展開したことであるだろう。とりわけ、指示的用法において字義的に述べられていることが誤っていても話者は真なことを述べうるという主張は、論理学の言語を規範と考えてきた哲学者たちに過激なものに映ただろう。ましてや、そうした主張とともに、論理学を用いた自然言語分析の始祖ともいえるラッセルの記述の理論への異議申し立てをおこなうことは、当然ながら多くの否定的な反応を引き起こした。一方で、確定記述の帰属的用法と指示的用法という区別やそれぞれの用法として挙げられている例が非常に明快であり、この区別そのものが現に存在することを否定する論者はいなかったと思われる。次節では、Donnellan (1966) の主張が言語哲学史上どのように受容されてきたかをみていく。

### 1.3 帰属的用法と指示的用法の区別の受容史

本節の目的は、帰属的用法と指示的用法の区別についての語用論的解釈と意味論的解釈がどのような立場なのかを明らかにすることである。まず、1.3.1 節では語用論的解釈を採用する哲学者として、グライスとクリプキの議論を主に取り扱う。語用論的解釈の中心的なテーゼは、ドネランがラッセルの反駁と考えていた指示的用法は語用論的な現象にすぎないというものである。とりわけクリプキの語用論的解釈は、彼に反対する立場として登場した意味論的解釈を理解する上でも重要である。1.3.2 節では意味論的解釈を採用する代表的な哲学者として、デヴィット、ウェットスティーン、ライマーらの議論を取り扱う。意味論的解釈は確定記述が帰属的用法と指示的用法のあいだで、意味論的に多義的であるという立場を擁護する。各論者の見解はそれぞれ微妙に異なっているが、

<sup>8</sup> Kaplan (1978), p. 222.

<sup>9</sup> Donnellan (1966) でも引用されているように、記述に適合する対象が存在しなくとも話者は指示に成功しうるという主張自体は、Linsky (1963) にすでにみられる。ただし、リンスキーは記述に当てはまる対象が存在しない場合、当該の言明は真でも偽でもない述べている。

この 3 人はいずれも語用論的解釈に反対し、指示的用法を直示詞（*demonstratives*）ないし指標詞（*indexicals*）といった他の指示表現と類似した意味論的機能をもつものとして分析するという点で一致する。本稿では 2 つの立場のどちらかを直接批判したり擁護したりすることはしない。両方の立場にとって公平なかたちで、指示的用法と帰属的用法の区別にまつわる論争を敷衍することで、何が焦点となってきたのかを明らかにする。

あらかじめ断っておくと、以下で扱う各論者は、発話や語が表す意味をどのような概念で説明するのかに関して一致していない。例えば、クリプキは「命題」という用語は用いずに「真理条件」という用語を使うことを好み、語の意味を発話された文の真理条件に貢献する内容として特徴づけている。これに対して、ウェットスティーンやライマーは、発話が表す命題を発話が表現する意味の担い手と考え、命題の構成要素への貢献内容を語の意味とみなしている。また、デヴィットは「真理条件」や「命題」という用語には訴えず、語がある意味をもつかどうかは、それを意味するためにその語が用いられる慣習（*convention*）が存在するかどうかに依存するという立場をとっていると思われる。私見では、自然言語の意味論を説明する道具立ての違いは、この論争における各論者の立場の違いに少なからず反映されており、各論者の評価をより一層困難にしている。以下では、意味論がどのような道具立てによって説明されるべきかという問題には直接入り込むことはせず、各論者の主張を忠実に取り出すことに専念する。

### 1.3.1 語用論的解釈

Donnellan (1966) の主張は哲学者たちに必ずしも好意的には受け入れられてこなかった。なかでも、指示的用法において、話者の用いている記述が意図された対象に適合しなくても、話者は真なこと主張するというドネランの主張にはどこか違和感を感じるのも無理はないと思われる。例えば、ある人が法廷で奇妙な振る舞いをしているジョーンズを指示することを意図して「スミスの殺害者は正気ではない」と述べ、後にジョーンズがスミスの殺害者ではないとわかったとしよう。仮にそのときのジョーンズの振る舞いが正気ではなかったとしても、その人は何か誤ったことを述べていたという直観を我々はもつのではないだろうか。すなわち、字義的には誤っていることを発話しているのではないかと感じるのではないだろうか。

間接的にはあるが、Grice (1969) は、この観点からドネランの主張を批判した最初の論文であると思われる。グライスは、記述句が使われる仕方に少なくとも 2 つの区別がありうることに言及し、それぞれを「非同定的使用（*non identificatory way*）」と「同定的使用（*identificatory way*）」と呼ぶ。以下の（1）は前者に、（2）が後者にそれぞれ対応している<sup>10</sup>。

- （1）ある人たちが、仕事上の知人がなくなったことから生じる事態に関して議論している。  
この人たちは、その知人の私生活に関して、執事も含めたお手伝いさんと一緒に（彼らが思うには）豪華な生活をしていたことを除いては何も知らない。彼らのうちの 1 人が、「そうだね、ジョーンズの執事さんは新しい職を探すだろうね（Well, Jones' butler will be seeking a

<sup>10</sup> 以下の 2 つの例が、帰属的用法と指示的用法をなぞらえたものであることは、彼の特徴づけの仕方や、「この後に続くことから見てとれるかもしれないが、私はドネランがこの区別の存在から導き出している結論に対して完全に賛成しているわけではない（Grice, 1969, p. 145, f.n. 2.）」という脚注から明らかである。

new position)」と言う。

(2) 以前に、別のグループがちょうどジョーンズの家でパーティーに参加したことがあった。そのとき帽子とコートを、黒いスーツとウィングカラーに身をまとった正装の人物に預けていた。彼は立ち耳で、ジョーンズが親しみを込めて「君 (Old Boy)」と呼びかけていたのを彼らは聞いていた。またあるとき、彼は中年の女性とかぼちゃの栽培について議論をしていた。このグループのうちの 1 人が「ジョーンズの執事さんは帽子とコートをごちゃごちゃにしていた (Jones' butler got the huts and coats mixed up)」と言う。 (Grice, 1969, p. 141.)

(1) が帰属的用法に、(2) が指示的用法に対応していることは、グライスの次のような特徴づけからも明らかである。彼によると、(1) は記述句「ジョーンズの執事 (Jones' butler)」の直後に、「彼が誰であれ (whoever he be)」と挟むことが許される使用法である。一方で、(2) はある特定の人物がジョーンズの執事として、「記述されて (described)」いたり、「指示されて (referred to)」いたり、あるいは「呼ばれて (called)」いたりする事例である。ここで、その指示されている人物は執事ではなく、庭師であったとしよう。この場合、ジョーンズには執事がないということ、そして、その立ち耳の人はジョーンズの植木師だということを知っている人であれば、話者がその人物を誤って記述していると主張できる。この誤記述を指摘できる可能性は (1) にはない。

グライスが Donnellan (1966) の主張に賛同していないということは、彼が誤記述の事例について述べていることから見てとれる。

もし、タイプ (2) の場合で、話者が実際には適用をもたない記述句（例えば「ジョーンズの執事さん」）を用いていたのだとしたら、話者が言ったこと (what the speaker has said) は、厳密に言って、偽であるだろう。タイプ (2) の言明の真理条件は、タイプ (1) と同様に、確定記述句のラッセル的な説明によって与えられるものとして考えられる（これには、例えば「この部屋の机 (the table in the room)」を意味するために「机 (the table)」という句を使う場合を網羅するために、表現されていない限定を適切に与えることを含む）。しかし、このような場合に話者が言ったことは偽であるだろうが、話者が意味したこと (what he meant)（例えば、[実際にはジョーンズの庭師である] 特定の人物が帽子とコートをごちゃごちゃにしていたということ）は真であるだろう。 (Grice, 1969, p. 142.)<sup>11</sup>

グライスが指示的用法の存在を根拠としたドネランの主張に懐疑的なのは明らかであるだろう。ドネランによれば、指示的用法の場合、たとえ話者が用いている記述に適合する対象が存在しなくても、話者は意図した対象について真なことを述べるのであった。そして、このことはラッセルの記述の理論の反駁になるとされる。ドネランであれば、(2) の事例においても、話者はジョーンズの庭師について真なことを述べていると主張するだろう。しかし、グライスは、「話者が言ったこと」と「話者が意味したこと」の区別を敷くことでこの主張を退ける。(2) で話者は「ジョーンズ

<sup>11</sup> グライスの用語について予め整理しておく。本稿では「話者が言ったこと/言われたこと (what the speaker said/what is said)」という用語を発話の字義的な意味論的内容（真理条件的内容）を指すために用いる。「話者が意味したこと/意味されたこと (what the speaker meant/what is meant)」という用語は、何であれ発話を介してその真理条件の内容を超えて話し手から聞き手に伝達される語用論的内容を指すために用いる。もちろん、これがグライス解釈の問題として正しいかどうかという問題はあるが、本稿では、このような用語法を採用する。このことは本稿の議論には影響を与えない。

の執事」という記述でジョーンズの庭師を指示しているにせよ、話者はいかなる意味でも「庭師」とは言っていない。グライスによれば、ラッセルの記述の理論は話者が言ったことにのみ関わる理論である。したがって、(2) で話者が言ったことは偽である。誤記述で対象を指示しその対象について真なことを語りうるという現象は、話者の意味したことの次元で語られるべきなのであり、ラッセルの記述の理論にはなんの影響も与えない。

こうした〔(1) と (2) の〕手段の違いが、ある記述句が様々な状況においてもつかもされない意味 (*meaning or sense*) における違いを表していると提案しているのではない。むしろ、記述句は関連のある体系的意味の二重性はなんらもたないということを提案しているのである。記述句の意味は、ラッセル的な説明によって与えられる。(Grice, 1969, pp. 142-143. [ ] は筆者の挿入)

(1) と (2) の違いはあくまで確定記述の使い方の違いであることをグライスは強調する。それに対して、ラッセルの記述の理論は記述句の意味を与える理論なのであり、そうである以上、(1) と (2) にみられる使い方の多義性は、ラッセルの記述の理論に対する反駁とはならないのである。

クリプキは、1977 年の論文「話し手の指示と意味論的指示 (*Speaker's Reference and Semantic Reference*)」において、グライスと同じ方向性でドネランの議論をより徹底的に吟味している<sup>12</sup>。彼は次の問いを立てることから始めている。

ドネランが正しいのか、あるいはラッセル (ないしストローソン) が正しいのかということが私の第一の関心ではない。むしろ、私の関心は以下である。ドネランの論文の考察は、ラッセル (ないしストローソン) の理論を反駁するのか？話を限定するために、ストローソンは脇において、ドネラン対ラッセルに焦点を当てることにする。(Kripke, 1977, p. 255.)

ここで述べられているように、以下で紹介するクリプキの議論は、(グライスとは違い) ラッセルの記述の理論の正しさを擁護するものではないことに注意されたい。彼の目的は、ドネランの議論がラッセルに対する反駁として成功を収めているかどうかを検証すること、および方法論的観点から確定記述の分析としてドネランとラッセルのどちらに従うのがより良いかを論ずることにある。

クリプキは、指示的用法の誤記述の事例<sup>13</sup>との類比として、以下の事例を考察することから始めている。

2 人の人が距離のあるところからスミスを見ていて、彼をジョーンズだと勘違いしている。  
この 2 人が短い会話を交わす。「ジョーンズは何をしているの?」「ジョーンズは落ち葉を

<sup>12</sup> クリプキは 1973 年のジョン・ロック講義の第 5 回を、この論文のもとになっている議論に割いている。この講義全 6 回の内容は、最低限の加筆修正が加えられ 2013 年に『指示と存在 (*Reference and Existence*)』というタイトルで出版された。Kripke (1977) とこの本の第 V 章は基本的に同じ内容であるが、後者はより議論が丁寧で、彼の見解の骨子を理解しやすい印象を受ける。そこで、以下では、Kripke (2013) での議論も踏まえながら、クリプキのドネランに対する批判を再構成することに努める。

<sup>13</sup> 本稿では、「帰属的用法/指示的用法の誤記述の事例」という用語を、“The F is G”という発話の“The F”という記述に、この文の真理条件と照らして何らかの誤りが含まれてはいるものの、話者が真なことを述べていると考えられる事例のことを指すために用いる。帰属的用法の誤記述の事例については、2 章以降で論じる。

掃いているね」2人の共通言語において、「ジョーンズ」はジョーンズの名前である。スミスのことを名指す (name) ことは決してない。しかし、ある意味で、この状況では、この会話の参加者である2人は明らかにスミスを示しているし、後者の人物は、(ジョーンズが落ち葉を掃いていたかどうかに関わらず) スミスが落ち葉を掃いていた場合かつその場合にのみ、この人が指示した人物について真であることを述べている。(Kripke, 1977, p. 263.)<sup>14</sup>

ドネランの指示的用法の例の多くは、話者が誤記述で対象を指示し、その対象について真なことを語りうるというものだった。上の事例では、2人の人物がスミスを誤って「ジョーンズ」という名前で指示しているが、スミスについて何事か真なことを述べていることをクリプキは認める。その点で、この例は指示的用法の誤記述の事例と似ている。違いは、確定記述が使われているか、名前が使われているかという点のみである。ここで、クリプキはこの例から次のような問いを立てる。

このとき我々は、この事例が固有名についての様々な理論に対する反例を提供していると言わなければならないか？たとえもし「ジョーンズ」と実際に呼ばれている人が世界にただ1人しかいなかったとしても、この事例は「ジョーンズ」という固有名が多くの特長で多義的であることを示していると言わなければならないか？(Kripke, 2013, pp. 117-118.)<sup>15</sup>

ドネランは、指示的用法の典型例として誤記述の事例を挙げつつ、確定記述が帰属的用法と指示的用法のあいだで多義的であるということを示していた。そして、彼はそこからラッセルの記述の理論はせいぜい帰属的用法にしか当てはまらず、この多義性を捉えられていないと主張していた。クリプキの疑問は誤記述で指示に成功する例が、確定記述の多義性を示すことになるのかという点にある。上の例で、「ジョーンズ」という固有名でスミスへの指示に成功しているからといって、我々は「ジョーンズ」という固有名の多義性が示されていると言いたくなるだろうか。

クリプキはこの事例を説明するために、グライスの「話者が言ったこと」と「話者が意味したこと」の区別の特別な場合として、2つの指示概念を導入する<sup>16</sup>。意味論的指示 (semantic reference) と話し手の指示 (speaker's reference) である。ある指示子 (designator) の意味論的指示対象とは、様々な世界についての事実を踏まえた上でその話者の個人言語 (idiolect) が決定する指示対象のことを表す。意味論的指示対象は、その指示子を用いるときはいつでもある対象を指示しようという話者の一般的意図 (general intention) によって与えられる。クリプキは、この意図を言語の一般的な意味論的規則に従おうとする話者の意図として説明している<sup>17</sup>。固有名の場合であれば、この意図は「私は「ジョーンズ」という名前で、ジョーンズを指示する」といったかたちで表される。対照的に、ある指示子の話し手の指示対象とは、ある所与の状況で、話者が話したいと思っており、なおかつ意味論的指示対象の条件を満たすと信じている対象のことを表す。クリプキは、ある所与

<sup>14</sup> この例は以下で何度も言及するため、以後、「スミス・ジョーンズの事例」と呼ぶ。

<sup>15</sup> ジョン・ロック講義では、ジョーンズとスミスが Kripke (1977) とは逆になっている。すなわち、ジョーンズがスミスと誤認される例になっている。Kripke (2013) の拙訳は Kripke (1977) の例に合わせて、ジョーンズとスミスを入れ替えてある。

<sup>16</sup> Kripke (1977) が用いている用語は、「話者の言ったこと」ではなく、「話者の語が意味したこと (what the speaker's words meant)」である。ここでは、前者の用語の方がより一般的であるという事情も踏まえ、先のグライスの議論と用語を一致させた。このことは本稿およびクリプキの議論に影響を与えない。

<sup>17</sup> Kripke (2013), p. 120, f.n. 15.

の状況で特定の対象を指示しようという話者の意図を特定の意図 (*specific intention*) と呼び、この意図によって話し手の指示は与えられるものとしている。

ここで重要なのは、一般的意図と特定の意図は必ずしも一致しないということである。つまり、意味論的指示と話し手の指示は分離しうる。クリプキは、この観点からスミス・ジョーンズの事例は理解されるべきだと主張する。この事例は、「ジョーンズ」という固有名の意味論的多義性を示している例なのではなく、意味論的指示と話し手の指示が分離している例なのである。「ジョーンズ」の意味論的指示はあくまでジョーンズ本人であり、スミスは話し手の指示にすぎない。話し手の指示という概念は、グライスのいう話者の意味したことに対応する概念である以上、意味論に関わる概念ではない。したがって、話し手の指示が意味論的指示と分離するという現象は語用論的なものであり、このことは「ジョーンズ」という名前の意味論にとってなんの影響も与えない。

クリプキは、固有名を例に意味論的指示と話し手の指示という概念を素描し、この 2 つの概念を確定記述にも対して拡張する。

この種の方法論が確定記述の場合にも適用されえない理由はないように思われる。「 $\phi$  (the  $\phi$ )」という確定記述を使うと想定しよう。このとき、「 $\phi$ 」を使う際には、一意に $\phi$ を満たす唯一の事物 (*the thing*) を指示しようという一般的意図をもっている。もし、一意に $\phi$ を満たすと思われる事物に出くわしたら、その事物について語るために「 $\phi$ 」という記述を使うことで、この意図を満たしていると考えよう。そして、ここでの第一の意図は、その事物が $\phi$ を満たすかどうかということとは無関係に、その事物について語ることであるかもしれない。それでもやはり、ここでは自らの一般的な意味論的意図に一致していると思うだろう。(Kripke, 2013, p. 120.)

クリプキによれば、確定記述を用いる話者がもつ一般的意図とは定冠詞と付随する述語の意味論的な規則に従おうという意図である。ここでクリプキは、ドネランの議論がラッセルを反駁するかどうかを検証するという彼の目的上、確定記述の意味論的規則とはラッセルの記述の理論によって与えられる規則だという仮定を敷いている。したがって、「the F is G」という発話をする際、意味論的規則から F である対象が一意に存在することが含意される。そして、確定記述を用いる話者はこの規則に従おうという一般的意図をもっている。確定記述の意味論的指示対象はこの一般的意図によって与えられる。これに対して、話し手の指示対象は、固有名の場合と同様、特定の状況においてある特定の対象について語ろうという特定の意図によって与えられる。もちろん、特定の意図には、確定記述の意味論的規則に従うという一般的意図を話者自身が満たしていると信じていることも含まれる。

もちろん、確定記述の場合でも、一般的意図と特定の意図が一致しない場合は十分にありうる。クリプキは、固有名であれ確定記述であれ、話者の特定の意図が一般的意図に尽きるような場合を「単純な場合 (simple case)」、この 2 つが分岐しうる場合は「複雑な場合 (complex case)」と呼ぶ。この観点から、ドネランの帰属的用法と指示的用法の区別は次のように定式化される。

思うに、私の仮説は、ドネランの帰属的用法は、確定記述句に特化した「単純な」場合以外の何ものでもなく、同様に、指示的用法は「複雑な」場合である。(Kripke, 1977, p. 264.)

この定式化が優れている点は、単純な場合と複雑な場合という区別自体は、確定記述と固有名を使う場合のいずれにも適用可能な点である。これにより、確定記述と固有名のいずれにせよ生じる誤記述（ないし誤った名前）による指示という現象は、意味論的指示と話し手の指示が分岐するという統一的な観点から説明可能になる。さらに、この区別は英語だけではなく指示表現をもつ言語であればどの言語に対しても当てはまる。よって、確定記述の帰属的用法と指示的用法の区別は、確定記述という特定の言語表現をもつ言語ではなく、指示表現をもつ言語であればどんな言語でも生じうる現象の一事例として、より一般的な見地から理解可能になる。

上記のように、意味論的指示と話し手の指示の区別という観点からドネランの区別を再解釈し、クリプキは次のことを示す。ラッセルの理論を確定記述の意味論として採用しても、ドネランがラッセルに対する反駁となると考えた現象は語用論の次元でなんの問題もなく扱える、と。まず、彼は言語分析のモラルとして次のようなテストを提案している。

もし、ある英語の言語現象がある特定の分析に対する反例になるという申し立てがあるなら、その分析が正しいと約定されている (*stipulated*) という点を除いては、（可能な限り）英語に似ている仮想言語を考えよ。そのような仮想言語がある共同体に導入され、その共同体によって話されていると想像せよ。もし、問題になっている現象が、（英語ではないかもしれないが）そのような仮想言語を話している共同体でもなお生じるのであれば、その現象が英語で生じるという事実は、当該の分析が英語に当てはまるという仮説を棄却することはできない。（Kripke, 1977, p. 265.）

いま問題になるのは、ドネランの指摘している確定記述の指示的用法という現象が、ラッセルの確定記述の分析を棄却するかどうかである。この検討のために、クリプキは仮想言語としてラッセルの記述の理論が正しいと約定されているラッセル言語をいくつか想定しているが、ここでは中間ラッセル言語 (*intermediate Russell language*) を使って彼の議論を敷衍する。中間ラッセル言語において、確定記述を含む文はラッセルの分析の省略として理解される。したがって、この言語で、例えば「現在のフランスの国王はハゲである (*The present king of France is bald*) 」は、「ただ1人の人物が現在のフランスの国王であり、その人物はハゲである。（*Exactly one person is at present king of France, and he is bald*) 」を意味するものとされる。中間ラッセル言語はこの点を除いては英語と相違ない。

クリプキは、指示的用法の誤記述の事例を念頭におき、この現象が中間ラッセル言語を話す共同体においても生じる現象であることを示す。

ドネランが提示した現象はこうした言語を話す共同体でも生じるだろうか？こうした言語の話者たちは、我々と同様に誤りを犯しやすいことは疑いないことである。彼らもあるパーティーにいる状況で、誰かが実際にはスパークリング・ウォーターを飲んでいるのだが、その人はシャンパンを飲んでいると誤解するだろう。もし、彼らが弱いラッセル言語ないし中間ラッセル言語の話者であるならば、彼らは「角でシャンパンを飲んでいる人は、今晚幸せなんだね (*The man in the corner drinking champagne is happy tonight*) 」と言うだろう。彼らがこのように言うのは、誤ってはいるのだが、ラッセル的真理条件が満たされていると思っているからに他ならない。（Kripke, 1977, p. 265.）

ドネランの主張は、話者が確定記述を指示的に用いている際、たとえ誤記述であっても意図している指示対象について真な言明をなしうるのだから、ラッセルの確定記述の分析は誤っているというものだった。これを逆手にとると、ラッセルが正しいのであれば、ドネランが反駁になると考えた現象は生じないということである。英語の確定記述の正しい分析が何であれ、中間ラッセル言語においてはラッセルの確定記述の分析が正しいものとして約定されているのであった。しかし、

我々はこの話者たちが、シャンパンを飲んでいると誤解はしているものの、その禁酒主義者を指示していると言わないのだろうか？そして、もし、彼が幸せなのであれば、この話者たちは彼について、正しく (*truly*)、彼は幸せであると述べているのではないか？どちらに対する回答も、自明に肯定的であると思われる。(Kripke, 1977, pp. 265-266.)

この直観も、今や話し手の指示という概念によって説明可能である。この概念は、英語であれ中間ラッセル言語であれ、同様に適用できることに注意されたい。角にいる人物がスパークリング・ウォーターを飲んでいようと、話者がまさにこの人物を指示したいと思っていて、「角でシャンパンを飲んでいる人」という確定記述の意味論的指示対象であると信じているのであれば、この人物が話し手の指示になるための条件は満たされる。上の状況で、これが満たされていないと想定する積極的な理由はないように思われる。であるとすれば、この人物が幸せなら話者はこの話し手の指示対象について真なことを述べているとも言えるだろう。ドネランがラッセルの記述の理論への反駁となると考えていた現象は、ラッセルの記述の理論が正しいと約定されている言語においても生じる上に、確定記述の意味論的な多義性を仮定することなく一般的な語用論的道具立てで説明可能である。したがって、クリプキのテストによればドネランの議論それ自体はラッセルに対する反駁とはならない。

クリプキのこの議論に対して、ラッセル言語とは違い、英語の確定記述は実際に意味論的に多義的だと反論することもできよう。この反論に対して、彼は次のような応答を用意している。上で論じたとおり、ラッセルの記述の理論を意味論として採用しても、意味論的指示と話し手の指示という観点から、帰属的用法と指示的用法の区別は問題なく取り扱うことができる。方法論的観点からして、確定記述の分析として統一的なラッセルの記述の理論を採用し、それを越え出る現象は語用論的な問題として取り扱うのと、確定記述は帰属的用法と指示的用法のあいだで意味論的に多義的だと考えるのとでは、どちらがより好ましいだろうか、とクリプキは問う。これまで論じてきた通り、意味論的指示と話し手の指示という区別は、スミス・ジョーンズの事例を説明するために、いずれにせよ必要とされる区別である。確定記述が意味論的に多義的だと仮定し、指示的用法の誤記述の事例とスミス・ジョーンズの事例という類似した 2 つの事例を、全く別の仕方の説明することにどれほどのもっともらしさがあるだろうか。クリプキは統一的な分析が好まれるべきだと主張する。

私が与えてきた説明は、この種の事例に対する自然な説明 (*the natural one*) であると思われる。そして、これは、ラッセルの分析が、正しいのだとすれば、斉一的に正しいという統一的な立場を支持するものである。私はここで言っているのは、ラッセルの分析が本当に正しいということではなく、一私はこのことについて立場を明確にはしていないし、私は 1 つの

統一的分析のとてもあざやかで適切な例として、ラッセルの立場を使っているだけである—何らかの統一的分析が与えられるべきであり、ドネランによって言及された諸事例は、意味論的指示から話し手の指示が分岐するという一般的な原理によって、もっぱら説明されるべきだということである。(Kripke, 2013, pp. 126-127.)

困ったときに多義性を仮定するのは、哲学において甚だしく怠け者のやり方である。  
(Kripke, 1977, p. 268.)

彼の主張は、確定記述の意味論としてラッセルの記述の理論を採用し、帰属的用法と指示的用法の区別を意味論的指示と話し手の指示という一般的な語用論の理論によって取り扱う方が方法論的観点からして好ましい、と要約されるだろう。最初に述べたように、クリプキはラッセルの記述の理論が確定記述の包括的な意味の分析として正しいと主張しているわけではなく、ドネランの考察はラッセルに対する反駁にはなっていないと主張しているに尽きる。そうだとすると、クリプキのこの論文はラッセルを擁護する議論として大いに支持を集めてきた。例えば、Neal (1990) は、クリプキの議論をさらに推し進めて、ラッセルの記述の理論を正しい確定記述の意味論として採用し、指示的用法をグライスの語用論の枠組みによって説明することを試みている。

以上、グライスとクリプキの語用論的解釈を敷衍した。歴史的観点からして特筆すべきなのは、ドネランが本来どのような意図で帰属的用法と指示的用法の区別を導入したのかとは独立に、クリプキのこの批判以降、この区別が意味論と語用論のどちらに関わる事柄なのかという問題が論争の争点になっていったという点である<sup>18</sup>。このことは、クリプキの議論が妥当であるにせよないにせよ、その影響力の大きさを物語っているだろう。したがって、クリプキの語用論的解釈以降、グライスやクリプキに対する反論と共に、この区別は意味論に属するという立場を擁護する議論が提出されるようになる。次節では、この意味論的解釈がどのような立場なのかをみていく。

### 1.3.2 意味論的解釈

帰属的用法と指示的用法の区別を意味論に属する事柄とみなす議論は、クリプキの語用論的解釈に応酬するかたちで現れてきた。クリプキの解釈を採用することは、確定記述は字義的には指示的な意味はもたないという結論を受け入れることに等しいと思われる。この結論が直観に反すると感じる人がいても不思議ではない。語や表現の字義的な意味は我々が恒常的にそれらを使う仕方や、それらを使うことで（素朴な意味で）我々が何を意味しているかに依存すると考えるのは自然である。そして、ドネランが素描している例から見てとれるように、我々がある対象を指示するために当たり前のように確定記述を用いているという事実そのものは否定しがたい。意味論的解釈を擁護する論者は、この事実に基づいて指示的用法は意味論で扱われるべき現象だという議論を展開して

---

<sup>18</sup> あらかじめ断っておくと、クリプキも言及しているが、当初ドネラン本人は帰属的用法と指示的用法の区別は語用論に属するものであると考えていたように思われる (Donnellan (1966) の 第Ⅷ節を参照)。後に、彼は Donnellan (1978) で半ばクリプキに対する応答を展開しており、ここではよりこの区別が意味論に属する事柄だという考えに傾いているように思われる。

きた。以下では、語用論的解釈への代表的な反論とともに、指示的用法の意味論的重要性を擁護する議論を取り上げる。

Devitt (1981) はクリプキの指示的用法の語用論的解釈のために用いている類比が、少なくともそのままでは成り立たないことを指摘している。クリプキは、グライスのいう話者の意味したことの特別な場合として、話し手の指示という概念を導入していた。しかし、この概念の導入に使われたスミス・ジョーンズの事例は、グライスが想定するような話者が言ったことを超える内容が伝達される例とは質が異なるという。というのも、クリプキが話し手の指示という概念の導入のために用いている例は、話者がスミスとジョーンズという 2 人の人物を混同している例であるのに対して、グライスは話者が誤解に基づいた発話をする例を取り扱っていないからである<sup>19</sup>。

デヴィットはここに着目し、クリプキのスミス・ジョーンズの事例はグライスが描いているような事例とは構造が異なることを批判する。

次のことに注意するのは重要である。ある話者が自分の言ったこと以外の何かを意味するという標準的なグライスの事例の全て—メタファーや皮肉、間接的言語行為、外国にいる話者—において、話者は発話の時点で自分が何を意味すると言われるかを裏付けることができる。したがって、こうした場合には話者が意味したことについての直観は十分に支持される。ここ [スミス・ジョーンズの事例] で、この特徴が欠けているというのは明らかである。

(Devitt, 1981, p. 514.)

まず、ここでデヴィットが「自分が何を意味すると言われるかを裏付けることができる」と述べることで、どのような状態を記述しているのかを明らかにした方がよいだろう。デヴィットはこの引用の直前で、スミス・ジョーンズの事例において話者がスミスのことを意味していたという直観を支持したいのだとしたら、この話者は誤解を指摘されるより前にそう言う用意があつて然るべきだと言う趣旨のことを主張している。ここから推測するに、おそらくここでデヴィットが指摘しているのは、標準的なグライスの事例において、話者自身が当該の発話で何を意味しているかを述べることができるということだと思われる。このことは、クリプキがグライスの話者が言ったことと話者が意味したことの導入のために用いている例でも成り立っている。

例えば、強盗犯が相方に対して「サツがその角のあたりにいる」と言うとする。語が意味すること (What the words meant) は明らかである。警察がその角のあたりにいるということだ。しかし、この話者が「俺たちはもうだらだらと金品を集めてはいられない。早く行こう!」と意味していたということは十分にありうるかもしれない。これは、この状況でも語の意味ではない。この状況で、これらの語を言うことで話者が意味したことではあるのだけれども。(Kripke, 1977, p. 262.)

---

<sup>19</sup> もちろん、上で見た通り Grice (1969) で挙げられている例は話者が誤解をしている例であるが、これは私の知る限りグライスが取り扱ってきた様々な事例の中でも例外的なものである。そのうえ、グライス自身もこの例に対して議論なしで、「話者が言ったこと」と「話者が意味したこと」という区別から特徴づけをおこなっているが、彼が他の論文で言及している様々な例との関連には触れていない。

上の状況で、相方が「何が言いたい？」と尋ねたとしたら、この話者はクリプキが話者が意味したこととして述べている内容を答える用意があるのは明らかに思われる。例えば、「早く逃げるぞ！」と言って相方を急かすかもしれない。

デヴィットの指摘は、スミス・ジョーンズの事例はこのような典型例とは事情が異なるという点であるだろう。「ジョーンズは落ち葉を掃いているね」という発話の時点で、話者はスミスが落ち葉を掃いていると言う用意があるだろうか。話者は直示詞や指標詞でスミスを指示して、「彼が落ち葉を掃いている」と言うことはできるかもしれないが、誤解を指摘されない限り「スミス」という名前を言う用意は全くないと思われる<sup>20</sup>。あるいは、ジョーンズではない他の人物を指示していると言う用意もないだろう。話し手の指示が話者の意味したことの特別な場合として導入されているのではあるが、グライスの標準的な事例と同じ状況が成立してはいない。このことは、話し手の指示という概念が、話者が意味したことに対応する語用論的な概念として機能するかどうかに関して、疑問を投げかけるものかもしれない<sup>21</sup>。

デヴィットとは独立に、ウェットステーンは語用論的解釈の議論にみられる 1 つの飛躍を指摘している。グライスもクリプキも指示的用法の典型例として誤記述の事例を考えていた。彼らは、この現象を語用論的現象として退けることで、帰属的用法と指示的用法の区別は語用論的なものにすぎず、何らラッセルの記述の理論に対する反駁にはならないという結論を導いている。ウェットステーンによれば、この議論には区別可能な 2 つの論点が混同されている。

ここには 2 つの区別可能な問題がある。1 つ目に、記述（ないし、ついでに言えば固有名）は、適合しない事物を指示するために用いられうるか？ [...] 2 つ目の問いはこうである。記述の指示的用法と帰属的用法の間に敷かれるべき区別が存在するか？（Wettstein, 1981, p. 243. [...] は中略を指す。）

指示的-帰属的の区別が意味論的重要性をもつという主張は、ドネランが一連の論文で展開したもう 1 つの議論の余地のある主張とは峻別されるべきである。この 2 つの主張を別々にしておくのが難しいというはわかっている。インフォーマルな議論や、論文においてでさえ、「ドネランの区別」はこの 2 番目の見解として理解されてきた。その見解とは、指示的な場合、そしてこの場合にのみ、当該の記述は、その字義的な意味という点からすれば指示対象に適合し損ねているときでさえ、（意味論的に）指示をすることができる、というものである。（Wettstein, 2012, p. 96.）

ウェットステーンは、帰属的用法と指示的用法という意味論上の区別が存在するという主張と、話者が意図した対象を誤記述で（意味論的に）指示できるという主張を峻別する。「スミスの殺害者」という確定記述が正しく適用されている事例だけを考えても、我々がある特定の対象を指示している場合（指示的用法）と、誰であれこの記述に適合するような唯一の対象について語っている場合（帰属的用法）は、直観的に区別可能であるだろう。実際、Donnellan (1966) の冒頭は確定記述

<sup>20</sup> 日常的な意味で話者はスミスのことを知っていると前提する。

<sup>21</sup> これは松阪陽一氏の指摘に負うが、デヴィットは、話者はその発話で自分が意味したことを、言表関与的（*de dicto*）な仕方でも述べるべきでなければならないという前提を敷いている。しかし、事物関与的（*de re*）な仕方でも、つまり、指標詞や直示詞を用いてスミス本人を指示することで、自らが意味していることを伝えるだけではなぜ不十分なのかに関して、何の議論も提示していない。

の正しい適用の例から始まっている。グライスもクリプキもこの 2 つの主張が区別可能であることに十分な注意を払っていないように思われる。いわんや、後者の主張を語用論的な現象として退け、それに依拠して前者の主張もまた誤りであるという議論を提示しているように解釈できるかもしれない。しかし、後者の主張に異議申立てすること自体は前者の主張に何ら重要な帰結をもたらすものではないとウェットステーンは指摘する。

デヴィットやウェットステーンのこうした指摘は、語用論的解釈を論駁するものではないかもしれない。しかし、クリプキとは異なる仕方で帰属的用法と指示的用法の区別を解釈することへの動機付けとしては十分であるだろう。以下で、デヴィットとウェットステーンの意味論的解釈を擁護する議論をそれぞれみよう。

議論の動機や道具立てに関してこの 2 人はいくつか相違点はあるものの、“the table”や“the cup”といった不完全確定記述 (incomplete definite descriptions) <sup>22</sup> についての観察に基づいて、指示的用法の意味論的重要性を擁護しているという点で共通している。これは、すでに Strawson (1950) によって論じられていることだが<sup>23</sup>、ラッセルの記述の理論は、少なくともそのままと不完全確定記述を含む文が表す命題の分析として不十分である<sup>24</sup>。この点について、ウェットステーンは詳細な議論を費やしている。「机が本でうもれている (The table is covered with books)」という文を例にとろう。私が本で散らかっている院生室の机を前にしてこの文を発話するという状況を考えてみよう。直観的にこの発話は真であるだろう。しかし、ラッセルの記述の理論に従うとこの発話は偽となる。なぜなら、ラッセルによればこの発話は世界にただ 1 つだけ机が存在することを論理的に含意することになるが、世界には明らかに 2 つ以上の机が存在するからである。

これに対するラッセル主義者の典型的な応答は、不完全確定記述は一意的に対象を表示する完全な確定記述の省略である、というものだ<sup>25</sup>。この応答によると、上の文の「机 (the table)」という不完全確定記述は「首都大学東京の哲学科院生室の西側にある机 (The table located on the west side in the graduate student's room of the Department of Philosophy at the Tokyo Metropolitan University)」や、「2018 年 9 月 6 日午前 11 時 30 分に浅利みなとが向かっている机 (the table at which Minato Asari is sitting at 11:30 a. m. on September 6, 2018)」といった一意的に対象を表示する完全な確定記述の省略であるとされる。ウェットステーンはこの応答の問題点を次のように指摘している。

こうしたより完全な確定記述は同義語ではないのだから、次のことが帰結する。我々が「ラッセル的な」記述のうちの 1 つで様々に不完全確定記述「机 (the table)」を置き換える各時点において、我々は異なる命題の表現を獲得しているように思われるだろう。この表現は記述の理論を介して異なる分析を受けているのである。[...] そうすると次のような問い

<sup>22</sup> ドネランとウェットステーンはこうした確定記述を “indefinite”、デヴィットは “imperfect”、クリプキは “improper” と呼んでいるが、本稿では現在標準的に用いられている「不完全 (incomplete)」という用語を採用する。Wettstein (1981) の訳語はこれに合わせてある。また、これとの対比のために、「彼女の夫 (her husband)」といったその記述内容から (少なくとも日本やアメリカでは) 一意的に表示対象が定まると想定可能な記述を「完全な確定記述」と呼ぶことにする。

<sup>23</sup> Strawson (1950), pp. 332-333.

<sup>24</sup> クリプキも不完全確定記述がラッセルの記述の理論の問題になることは認めている (Kripke (1977), p. 255.)。

<sup>25</sup> 不完全確定記述を論拠とした議論とそれに対するラッセル的立場からの応答に関しては、Neal (1990) の 3 章 7 節で詳しく論じられている。ここで取り上げる応答はニールが「明示的アプローチ (explicit approach)」と呼ぶものである。また先に引用した Grice (1969) での「表現されていない限定を適切に与える」とは明示的アプローチのことを指していると思われる。

が生じる。これらのより完全な（ないしラッセル的な）記述（あるいはこうした諸記述の連言）のうちどれが正しい記述なのか。どれが、話者が「机」という不完全確定記述を用いることで意図したことを実際に捉えているのか。（Wettstein, 1981, p. 246.）

ウェットスティーンはここで次の事実が説明されるべきだと仮定していると思われる。私がとっ散らかっている院生室の机を前にして「机が本で埋もれていますね」と発話したとしたら、私は 1 つの完全な真な命題を表現している。意味論の仕事はこれがいかにして可能なのかを説明することにある。ラッセルの記述の理論は“The F is G”という発話の意味論的分析として正しいものであり、不完全確定記述は完全な確定記述の省略とみなすとすると、次のことが帰結するだろう。それは、ある不完全確定記述を復元し、なおかつ話者の意図に合致する 1 つの正しい完全な確定記述が存在するということである。上の発話で、私が完全な真な単一の命題を表現しているという前提を共有する限り、ラッセル主義者はこれを受け入れざるをえない。なぜなら、ラッセルの記述の理論に基づく、不完全確定記述を復元する完全な確定記述が複数存在するとしたら、その復元の仕方次第で異なる命題が表されていることになるからである。このことは私が 1 つの真な命題を表現しているという仮定と衝突してしまう。

では、話者の意図に合致する完全な確定記述を復元することは可能だろうか。私が上の発話の時点でいくつか完全な確定記述を提示され、どれを意図していたのかと尋ねられたとしよう。ウェットスティーンは、そのうちどれが正しい完全な確定記述かを定めることはできないだろうと述べる。こうした困難から、ある不完全確定記述を 1 つの正しい完全な確定記述によって復元可能であるという見解は退けられる。

明らかに、現実にはこうした「完全な」記述のうちの 1 つが話者の意図したことを捉えられていると想定するのは、極めてありそうもない。そうではなく、我々は話者自身の助けをもってしても、どれが正しい記述であるのかを知ることはできないのである（Wettstein, 1981, p. 247.）

デヴィットも次のように主張している。

不完全確定記述は一意的に適合するという意図を伴って発話されているのでもないし、聞き手も不完全確定記述がそのような意図を伴って発話されているとは通常思っていないだろう。（Devitt, 1981, p. 517.）

デヴィットとウェットスティーンは、こうした困難から、ラッセルの理論は不完全確定記述を含む文が表す命題を正しく分析できないと結論づける。であるとすれば、不完全確定記述を含む発話で、真であったり偽であったりする命題を表すことができるという事実はどのようにして説明されるべきであろうか。

デヴィットもウェットスティーンも、不完全確定記述が “that table” や “this table” といった典型的には直示的に用いられる指示表現と似た仕方で用いられることに着目している。

もし記述が直示的な直示詞や代名詞の使用と同じ使用をもつということをここで示すことが

できれば、目下提案されている慣習が記述に関しても存在することを信じるのにかなりもつともな根拠がえられるだろう。私が思うに、「机 (the table)」といった「不完全な」確定記述を考察することによって、我々はそれを示すことができる。(Devitt, 1981, p. 517.)

このように、話者は不確定確定記述、すなわち多くの事物に適合する表現を用いて、ある特定の事物に対して確定的指示 (*determinate reference*)、いや実際は、「直示的指示 (*demonstrative reference*)」をおこなっているのである。(Wettstein, 1981, p. 248.)

直示詞が意味論値として記述ではなく指示対象をもち、その指示対象は話者の意図や様々な文脈的要因から決定されることは広く認められるだろう<sup>26</sup>。2 人は多くの場合で不完全確定記述が直示詞と同じような仕方で用いられるという事実<sup>27</sup>に依拠し、不完全確定記述に直示詞と同様の分析が可能だと主張する<sup>27</sup>。

デヴィットは、対象同定に関して表示 (*denotation*) による同定と指示 (*designation*) による同定の 2 つの慣習があることに訴えている。彼によれば、直示詞や直示的な代名詞は対象同定に関して後者の慣習に依存しており、不完全確定記述も同様であるという。こうした不完全確定記述が指示の慣習をもつのであれば、「彼女の夫 (her husband)」といった完全な確定記述が指示の慣習をもたないとする根拠はない。したがって、確定記述は表示と指示という 2 つの慣習をもつという点で多義的であると結論づけている<sup>28</sup>。ここから、デヴィットは、確定記述は意味論的に指示をするための表現でもあり、帰属的用法と指示的用法という区別は意味論に関わる区別であると主張する。

ウェットステイーンは、Kaplan (1978) にしたがって、単称命題 (*singular proposition*) と一般命題 (*general proposition*) の区別を引き合いに出す。目下の議論に関わる範囲では、この 2 つの概念は次のように理解して差し支えない。単称命題とはもともとラッセルによって導入された概念であり、個体そのものを構成要素として含む命題のことである。これに対して、“The F is G” という文の発話がラッセル的な仕方で、「F である対象がただ 1 つ存在し、その対象は G である」という命題として分析される場合、この命題を「一般命題」と呼ぶ。上でみたように、不完全な確定記述を伴う発話を一般命題として分析する場合、不完全な確定記述が一意的で完全な確定記述に還元されえないという困難が付きまとう。したがって、指示的用法を全面的にラッセル的に分析することはできない。代替として、ウェットステイーンは指示的用法と直示的指示を同一視し、確定記述の指示的用法を伴う発話を単称命題として分析することを提案する<sup>29</sup>。この分析によると、ドネランの指示的用法の例として用いられた「スミスの殺害者は正気ではない (Smith's murderer is insane)」とい

<sup>26</sup> クリプキも、直示詞の意味論的指示対象は話者の意図や文脈から決定されると述べている。

<sup>27</sup> デヴィットとウェットステイーンは、直示的な直示詞や代名詞と不完全確定記述の類比性を議論の足がかりにしているという点で共通しているものの、直示的指示の指示対象がどのように決定されるのかに関して見解が異なっている。デヴィットは、因果的な直接的知覚関係にある対象を指示するという立場を支持している。これに対してウェットステイーンは、文脈そのものが直示的指示の指示対象を明らかにするという見解をとっている。

<sup>28</sup> デヴィットは、不完全確定記述もその使用において表示の慣習に従う場合がありうると述べている (Devitt (1981), p. 517.)。しかし、私はデヴィットがどのような状況を念頭においているのかわからない。というのも、デヴィットに従えば、不完全確定記述はそもそも表示をしない記述だからである。また、もしこの世界に机が 1 つしか存在しないのだとすれば、「机 (the table)」という記述は、もはや不完全確定記述ではなく完全な確定記述だからである。

<sup>29</sup> デヴィットもウェットステイーンのどちらも、直示詞と同じはたらきをするものとして不完全確定記述を分析したのち、完全な確定記述にその分析が拡張可能であることに関してはほとんど議論なしで済ませている。

う発話は、「あの人物、ジョーンズは、正気ではない (*That one, Jones, is insane*) 」というジョーンズ本人を含む単称命題を表すものとされる。対照的に、

帰属的発話によって主張されていることは、あの人物、ジョーンズは正気ではない、という単称命題のようなものではなく、むしろ、(大まかに言って) ちょうどただ 1 人の人物がスミスを殺害し、その人物は正気ではない (*exactly one and only one person murdered Smith and that person is insane*) 、という「一般命題」である。(Wettstein, 1983, p. 188.)

したがって、ウェットスティーンの見解によれば、確定記述は一般命題と単称命題のどちらを表すのかで多義的であり、帰属的用法と指示的用法の区別は意味論的重要性をもつものである。この多義性について語るために、指示的用法の誤記述の事例に言及する必要はない<sup>30</sup>。

のちに、Reimer (1998) もウェットスティーンと同様に一般命題と単称命題の区別を前提とし、“The F is G” という文の発話はこのどちらを表すかで意味論的に多義的であるという立場を擁護している。デヴィットとウェットスティーンが不完全確定記述のラッセル的分析に付随する困難さを動機として指示的用法の意味論的重要性を擁護しているのに対して、ライマーは確定記述が極めて標準的に (*standardly*) 指示的に用いられ単称命題を表すという点に訴える<sup>31</sup>。

まず彼女は、死んだ比喩 (*dead metaphor*) <sup>32</sup>を根拠に、クリプキがラッセル擁護のために用いている論法は誤った結論を導くものであると論じる。死喩とは元々は比喩的だった表現の意味が、度重なる使用によりその表現の字義的な意味として定着した語の意味のことをさす。英語の “*incense*” という語を例にとろう。この語は動詞として香をたくという意味と、人をひどく怒らせるという 2 つの意味をもつ。しかし、後者の意味は前者の意味から比喩的に派生したものであることがわかっている<sup>33</sup>。ここで、先にクリプキの議論を思い出そう。彼は、ラッセルの意味論を採用し、指示的用法は語用論の問題として取り扱うほうが好ましいという議論を展開した。これに倣って、“*incense*” という動詞は字義的には香をたくという意味しかもたず、人をひどく怒らせるという意味は語用論的に生じる比喩的な意味だとみなすことも可能であるだろう。いわんや、多義性を排除するクリプキの方法論にしたがえば、このほうが好ましいかもしれない。しかし、この論法は死んだ比喩全般に当てはまることに注意されたい。そうすると、死んだ比喩は語用論的に導出される比喩的な意味として依然取り扱われることになるため、死んだ比喩というカテゴリーそのものが消滅することになる。ライマーは言う。

明らかに、ここで何かが誤った方向に進んでいる。間違いなく英語という言葉は死んだ比喩

<sup>30</sup> ウェットスティーンの議論に対する反論は Salmon (1982) を参照。サーモンはある文の発話によって伝達される内容とその文の意味論的内容をウェットスティーン (とドネラン) が混同していると批判する。また、不完全確定記述を論拠とした議論全般への反論は上述の Neal (1990) の 3 章を参照。ニールは、上で論じた確定記述の不完全さの問題は確定記述固有の問題ではなく、自然言語の量子化の量子化の範囲がどのように特定されるかという問題の 1 つにすぎないのであり、不完全確定記述を論拠に指示的用法の意味論的重要性を擁護することはできないと論じている。このニールの議論に対する応答は Devitt (2004) の 7 節を参照。

<sup>31</sup> デヴィットものちに確定記述が頻繁に指示的に用いられているという観点から、指示的用法の意味論的重要性を擁護している。(Devitt (1997), p. 126.)

<sup>32</sup> “*dead metaphor*” は「死喩」という訳語が当てられることもあるが、語感の問題から本稿では「死んだ比喩」という訳語を採用している。

<sup>33</sup> ライマーは燃やすことと怒ることの連関からこの比喩が生まれたのではないかと推測している。

を含んでいる。この議論の問題は、標準的用法 (*standard use*) と字義的用法 (*literal use*) の重要なつながりを暗黙のうちに否定しているところにあるのではと思う。(Reimer, 1998, p. 98.)

ここでライマーが示しているのは、クリプキが採用したような論法で、ある表現の意味を語用論的に解釈することができるからといって、そこからそのように解釈するべきかどうかは必ずしも自明ではない、ということであるだろう。この死んだ比喻の例と類比的に、ライマーは指示的用法もまたクリプキが想定したような語用論的なメカニズムによって導出されるものではないと主張する。ある表現の標準的用法とは、すなわちその表現の字義的用法なのである。実際、不完全確定記述に代表されるように、確定記述が標準的に指示のために用いられるという事実は否定し難いと思われるし、だからこそドネランの帰属的用法と指示的用法の区別そのものは言語哲学者に広く受け入れられているのだとも言える。ここから、ライマーは、確定記述は字義的に指示的な意味をもち<sup>34</sup>、“The F is G” という発話が字義的に単称命題を表すという主張は十分に擁護可能だと結論づける<sup>35</sup>。

意味論的解釈の基本的な主張は、語用論的解釈に反して、指示的用法は意味論が説明すべき事柄であるという点にある。クリプキ以降、語用論的解釈を採用する論者は、指示的用法をラッセルの記述の理論とグライスの語用論との抱き合わせによって説明してきた。しかし、Devitt (2004, 2007a) が批判するように、指示的用法という現象がこの図式で説明されるかどうかは自明ではない。また、この図式による説明は、確定記述が直示詞や指標詞のように、頻繁に指示に用いられるという事実とも相反するように思われる。ここから、意味論的解釈を採用する論者は、確定記述がラッセル的な分析によって与えられる意味だけではなくて、指示という機能も意味としてもつ、すなわち、確定記述の帰属的用法と指示的用法の多義性とは意味論的多義性に他ならないという立場を擁護してきた。

## 1.4 暗黙の前提

ここまで見てきたように、クリプキの批判以降、ドネランの帰属的用法と指示的用法の区別にまつわる論争の争点は、確定記述の指示的用法が意味論に関わる事柄かどうかにあったと言って差し支えないだろう。語用論的解釈を採用する論者は、確定記述のラッセル的な意味論的分析から、いかにして指示的用法あるいは単称命題がえられるのかを語用論的な道具立てで説明しようと試みてきた<sup>36</sup>。これに対して、意味論的解釈を擁護する論者は、確定記述は意味論的に単称命題を表すと主張してきた。

繰り返し述べておくが、本稿は、意味論的解釈と語用論的解釈のどちらが正しいのかという問題に関して中立的な立場をとる。むしろ、ここでの私の目的は、この論争の中で多くの哲学者に共有

<sup>34</sup> デヴィットとウェットステーンとは違い、ライマーは指示的に用いられている確定記述は「彼 (he)」や「彼女 (she)」といった指標詞 (indexicals) として解釈できるという議論を展開している (Reimer (1998), p. 93.)。いずれにせよ、指示的用法を自然言語に存在する他の指示表現と同一視できると考えている点でこの2つの立場に大きな違いはなく、本章の目的にとってもあまり重要なではないので詳細には立ち入らない。ライマーのこの立場に対する批判は、Numberg (2004) を参照。

<sup>35</sup> Reimer (1998), p. 99.

<sup>36</sup> 例えば、Neal (1990) の3章や Bontly (2005) を参照。

されている 1 つの前提を取り出すことにある。それは、確定記述の帰属的用法はラッセルの記述の理論と両立する、というものである。語用論的解釈を擁護する哲学者たちは、ラッセル的な意味論的分析からいかにして指示的用法が語用論的に生じるかをもっぱら論じてきたわけだが、これは裏返せば、帰属的用法はラッセルの記述の理論によって十分に分析できるという態度の現れである<sup>37</sup>。一方で、意味論的解釈によれば、確定記述の意味論的多義性とは、ラッセル的な意味と指示的な意味のあいだの多義性に他ならない。意味論的解釈を擁護する哲学者たちは、指示的用法の分析の仕方に関して異なるアプローチをとるものの、帰属的用法がラッセルの記述の理論と特に矛盾しないという点に関して一致している。したがって、語用論的解釈も意味論的解釈も、帰属的用法がラッセルの記述の理論と両立するという前提を暗黙のうちに共有している。少なくとも、この前提が正しいかどうかを真剣に疑った論者はほとんどいないと思われる。

例えば、フランシスコ・ピューパは、2008 年の彼の博士論文の中で次のように書いている。

Donnellan (1966, 1968, 1978) は、確定記述の 2 つのタイプの使用を区別した。帰属的用法と指示的用法である。[...] 多くの理論家にとって、帰属的用法はラッセルの説明のうちに楽々と収まる。話者が確定記述を帰属的に用いるとき、その確定記述は一般名辞のように機能するように思われる。これはおそらくラッセルによって定められた意味論と同じようなものである。(Pupa, 2008, p. 62.)

この一節で、ピューパは帰属的用法とラッセルの記述の理論は議論の余地なしに矛盾しないと前提している。実際、彼は帰属的用法と記述の理論が矛盾する可能性については触れていない。仮にピューパ自身はこの前提を疑っており、議論の便宜上こう述べているだけだとしても、この前提が多くの論者に共有されているという彼の所見は影響を受けない。また、この前提を共有している人物としてデヴィットも例外ではない。彼は、帰属的用法と指示的用法にまつわる論争において、意味論的解釈を擁護する中心的論者であり続けているが、近年の著作において次のように述べている。

記述が 2 つの用法をもつという合意はあるものの、記述が 2 つの意味をもつという合意はない。ラッセルによって記述された量化的な帰属の意味は論争を引き起こしていないが、多くの哲学者、特に Description (1990) のスティーヴン・ニールは、記述が指示的意味をもつことを否定するために、Grice (1975) の著作での卓越した考えに訴えてきた。(Devitt, 2007, p. 8.)

「ラッセルによって記述された量化的な帰属の意味」という記述からも明らかなように、デヴィットは帰属的用法がラッセルの記述の理論によって正しく分析される用法であると前提している。実際、ここで言及されている Neal (1990) やクリプキも含め、語用論的解釈を擁護する哲学者たちの中に、帰属的用法とラッセルの記述の理論の関係について所見を述べている哲学者はいない<sup>38</sup>。

<sup>37</sup> Neal (1990) はその代表である。他にも、Back (2004, 2007) は、私が理解する限りで、帰属的用法を伴う “The F is G” という発話は、“The F” という記述に適合する対象を選び出すという立場を支持している。彼は、帰属的用法は指示的用法と等しく語用論的な現象であると主張しているものの、彼の帰属的用法に関する見解は実質的に帰属的用法とラッセルの記述の理論が等値であることを認めているようなものである。帰属的用法が語用論的な現象だという仮定を受け入れたとしても、私が 3 章で論じる、出来事に依拠した帰属的用法に関して、彼のこの見解は妥当ではない。

<sup>38</sup> 例外として、そして本稿の先行研究として、Rostworoski (2013) を挙げる。ロストヴォロスキーはこの論文で、次のように書き出している。

もちろん、Donnellan (1966) で述べられていることから、ラッセルの記述の理論と帰属的用法は両立するという解釈に至るのは自然なように思われる。ドネラン自身もそのことを仄めかしてはいる。

確定記述の理論として、ラッセルの立場は、当てはまるのだとしたら、帰属的用法にだけ当てはまるように思われる。(Donnellan, 1966, p. 293, 邦訳 109 頁)

ただし、ドネランにとって、帰属的用法とラッセルの記述の理論との関係はそれほど重要でなかったことは心に留めておくべきだろう。彼の見解によれば、指示的用法は明らかにラッセルの記述の理論と相容れない。したがって、ラッセルの立場が確定記述の理論として満足できるものではないことを示すには、指示的用法を傍証とするだけで十分だったはずである。そして、これはストローソンに対する反駁に関しても同様である。こうした事情を踏まえると、当初のドネランにとって、何より重要だったのは指示的用法の正確な特徴づけであり、帰属的用法とラッセルとストローソンの理論との関係は二の次であったと推察される。実際、Donnellan (1966) は帰属的用法が正確に言っただけでどのような分析を受けるべきかについてはかなり曖昧な立場をとっている。リンスキーの論文を引用してから少し後に、ドネランは次のように述べている。

しかしながら、私のここでの主要な論点は、前提が満たされていないためにその言明が真でも偽でもなくなるというリンスキーの立場と関係している。(ストローソンとラッセルのどちらに從うかによるが) もし、確定記述が帰属的に使われていると考えられるならば、この見解は正しいものであるかもしれない。(Donnellan, 1966, p. 300, 邦訳 119 頁)

上の、「ストローソンとラッセルのどちらに從うかによるが」という挿入は、帰属的用法に対するドネランの立場の曖昧さをよく示しているだろう。あるいは、帰属的用法の特徴づけは彼の目的にとってそれほど重要でなかったことを現れであるかもしれない。いずれにせよ、1966 年の時点で、帰属的用法がラッセルの記述の理論によって説明し尽くされるかどうかについて、ドネランの立場は明確ではない<sup>39</sup>。

---

確定記述の帰属的用法と指示的用法というキースドネランによる区別は、数多くの議論を引き起こしてきた。明らかに、議論の中心にあるのは、この区別が何らかの仕方でラッセルの確定記述の理論を阻害するかどうかという問いである。哲学者たちは、指示的用法について互いに激しくいがみあってきたが、一般的に、ラッセル的分析は帰属的用法とは両立するという点に関して同意している。大まかに言って、この一般に容認された立場によれば、帰属的用法は単なる「ラッセル的」記述である。

本稿で、私はこの立場に反対したい。私は、ラッセル的分析は帰属的用法に不十分なものであると論じるつもりである。(Rostworski, 2013, p. 59.)

彼は、私が 2.1 節で引用する帰属的用法の誤記述の事例に言及し、帰属的用法が単なるラッセル的な記述ではないと論じている。さらなる傍証として、帰属的用法が記述の理論によって分析されるのだとすると、帰属的用法を含む直観的に妥当な推論が説明できないという議論を展開しているが、本稿の主眼とは直接関係のないものであるため、彼の議論について詳細を検討することはしない。

<sup>39</sup> しかしながら、ドネランは 2012 年に出版された自らの論文集の導入で、「帰属的用法に対して、喜んでラッセルの分析を適用する (Donnellan (2012), p. xv.)」と述べている。彼は 1990 年代前半に一線から退いた身であるとはいえ、正直に言って、私にはこれが解せない。そして、以下で論じるように、彼の当初の帰属的用法に関する見解が正しいものであるとすれば、帰属的用法がラッセルの分析で事足りるというのは誤りであると思う。

次章で、ドネラン解釈の問題として、ラッセルの記述の理論と帰属的用法は両立するという前提が疑わしいということを示したい。というのも、ドネランはのちに帰属的用法に関して、記述に適合する対象が存在しなくても、話者が真なことを語りうる可能性を認めているからである。ここから指示的用法だけでなく帰属的用法もまた、ラッセルの記述の理論ないしストローソンの理論と相容れないということが即座に帰結する。指示的用法の解釈が論争の中心であったことを踏まえれば、このドネランの見解は少々意外なものに思われるかもしれない。しかし、私が思うに、これはドネランのもっていた言語観からの自然な帰結である。次章では、まず、帰属的用法の誤記述の事例を取り上げる。次いで、発話の合理的設計と解釈という観点から、彼の言語に関する洞察を再解釈することを試みる。帰属的用法を伴う発話がいかに合理的に設計され解釈されるかを考察することで、帰属的用法の誤記述の事例は何ら意外なものではなくなるだろう。

## 帰属的用法再考

本章の目的は、ラッセルの記述の理論によってではなく、発話の合理的な設計と解釈という観点から帰属的用法に分析を与えることである。前章では、哲学者たちのあいだで帰属的用法はラッセルの記述の理論と両立するという前提が暗黙のうちに共有されていることを指摘したが、この前提はドネラン解釈の問題として誤りである。というのも、ドネラン自身が指示的用法だけではなく、帰属的用法においても誤記述の事例がありうることを認めているからである。私の考えでは、そもそもドネランが関心をもっていた事柄、ないし彼の言語観全体を踏まえれば帰属的用法においても誤記述の事例が認められるのは当然の事柄だと思われる。それは、行為としての発話がどのように合理的に設計され解釈されるかという観点から我々の言語使用を分析することである。彼の指示的用法や固有名の指示に関する様々な所見は、現代の意味論と語用論の区別を前提とするのではなく、この観点から我々の発話を探究したことの 1 つの所産であるように思われる。少なくとも、そうドネランを解釈することが一定の妥当性をもつことを示したい。発話の合理的設計と解釈という観点から、帰属的用法を伴う発話に対して正しい分析を与えることで、帰属的用法の誤記述の事例もまたその 1 つの帰結としてみるができるだろう。

本章は次のような構成となる。2.1 節では Ludlow and Seagl (2004) と Donnellan (1968) で言及されている帰属的用法の誤記述の事例に言及し、確定記述の帰属的用法が単なるラッセル的な記述と等値ではないことを指摘する。2.2 節でそもそもドネランが抱いていたと思われる言語観から、帰属的用法の再考を試みる。そのために、2.2 節では、発話の合理的設計と解釈という観点からドネラン解釈をおこなう。まず Korta and Perry (2011) を参照としつつ、発話の合理的設計と解釈という問題が哲学的に興味深いものであり、この線からドネランを解釈することの動機付けをおこなう。次いで、Donnellan (1970) での固有名の記述説批判の議論も踏まえながら、彼の関心が発話の合理的設計と解釈がいかになされているのか、という問題にあったことを実証することを試みる。2.3 節では、この議論を踏まえ、確定記述の帰属的用法を伴う発話がどのように設計され解釈されているのかを、ドネランのテキストを参照しつつ再考する。この観点から帰属的用法を捉え直すことで、これがラッセル的な記述と両立しないこと、そして指示的用法と同様に誤記述の事例が認められることは、何ら意外ではないと結論づけよう。

### 2.1 帰属的用法におけるニアミス

本節では、ドネラン解釈の問題として、帰属的用法はラッセルの記述の理論によっては説明し尽くされるものではないということを論じる。前章でみたように、多くの哲学者たちが、帰属的用法とラッセルの記述の理論は何の問題もなく両立するという前提を暗に共有してきた。一方で、あまり注目されていないが、話者が確定記述を帰属的に用いており記述に適合する対象が複数存在するか、あるいは全く存在しないのにも関わらず、直観的に話者の発話が真とみなしうる事例の存在は指摘されている。実際、後で論じるが、ドネランが後者の事例に言及している。まず、前者の事例

として Ludlow and Segal (2004) が言及している事例をあげることから始めようと思う。彼らは、帰属的用法がラッセルの記述の理論と相容れない可能性を指摘した数少ない哲学者である。

問題は、記述の古典的なラッセル的分析にとって問題含みであり続けている誤記述の別の事例が一特に帰属的用法に関して一存在するということだ。例えば、犯罪の現場で探偵ワトソンが「スミスの殺害者は正気ではない。それが誰であれ (The murderer of Smith is insane, whoever he is)」と言ったとしよう。しかし、ここで殺害者は1人ではなく2人で、彼らのうちどちらか、あるいは両方が正気ではないと想定しよう。またしても、我々はこれに関して決断をしかねるように思われる。明らかな意味でワトソンは何ごとか真なことを述べているが、またある意味で彼の所見は間違っている。(Ludlow and Segal, 2004, pp. 385-386.)

ここで彼らが想定している状況は、本稿でも最初に言及したスミスの殺害者の帰属的用法の例とみなしてよいだろう。スミスの殺害が単独犯によるものではなく複数人によるものであったと判明した場合、ラッセルの記述の理論に従えば「スミスの殺害者は正気ではない」というワトソンの発話は偽である。しかし、ルドロウとシーガルが述べているように、彼はある意味で真なことを述べているという直観を我々はもつのではないだろうか<sup>40</sup>。もし、この発話の後にスミスは複数人によって殺害されたとわかり、例えば、その殺害に加担した人物全員が正気ではなければ、ワトソンは自分の主張が真であることを正当化できるように思われる。この直観は帰属的用法がラッセルの記述の理論と両立するという前提と衝突する<sup>41</sup>。

これより遡ること 30 年以上前、帰属的用法と指示的用法を巡る論争においてほとんど忘れ去られているが、ドネランは帰属的用法がラッセルの記述の理論と両立しないことをすでに示唆している。彼は後の 1968 年の論文で、もとのスミスの殺害者の帰属的用法の例を、この記述に適合する対象が厳密に言って存在しない事例へと修正し、次のような考察を展開している。

私の論文の帰属的用法の 1 つの例は、友人であるスミスの遺体を発見した人が「スミスの殺害者は正気ではない」と叫ぶというものである。この例において、この話者はスミスの殺害者として特定の人物を念頭においているわけではない。そして、私は、仮にスミスが殺されていなかったとしたらその帰結はどうなるかと問い、この話者は真であることを述べ損なうだろうとの考えを述べた。しかし、スミスは自然死だったのだが、実際のところ彼は死ぬ前に暴行を受けていて、この話者が「スミスの殺害者」に正気のなさを帰属させた証拠が、依然として彼に危害を加えた人物が正気ではないことの十分な証拠であると想定しよう、ある意味で、話者は「ニアミス」を犯している。我々はこの話者が真なことを述べていなかった

<sup>40</sup> 興味深いことに、デヴィットは異なる直観を表明している。彼は帰属的用法を伴う「殺人犯は正気ではない (The murder is insane)」という発話を考え、スミスの殺害が単独犯ではなく複数犯であった場合、この発話は偽であると述べている (Devitt (2004), p. 302.)。デヴィットがそう考える根拠はわからないが、もしかしたら、帰属的用法とラッセルの記述の理論を同一視しているからかもしれない。

<sup>41</sup> 補足として述べておくと、ルドロウとシーガルは確定記述の意味は単なる存在量化にすぎず、ラッセルが指定した一意性はむしろ語用論的な推論によって導出されるという見解をとっている。すなわち、“The F is G” という発話は、 $\exists x (Fx \wedge Gx)$  という論理形式をもつものとして解釈される。したがって、彼らの立場に基づくと、ワトソンは意味論的に真な命題を述べているが、彼が語用論的に伝達しようとした命題は偽である。いずれにせよ、彼らの立場が何であれ、上で素描されている状況においてワトソンが何ごとか真なことを述べているという直観は、帰属的用法とラッセルの記述の理論が相容れないものであることを示唆する。

と断言する用意があるのか？ (Donnellan, 1968, p. 209.)

ドネランが描写している状況をもう少し具体化しよう。話者はひどい暴行を受けた痕があるスミスの遺体を今しがた目にしたところである。話者は知らないのだが、スミスは日頃の生活習慣の悪さから狭心症を患っていた。彼はたまたま仕事の帰りに追い剥ぎに遭いひどい暴行を受けたのだとしよう。その暴行自体とは何の因果関係もないのだが、スミスは警察に暴行を受けたことを訴えに行く途中、急性心筋梗塞でこの世を去ってしまう。この架空の状況で、スミスは死の直前に暴行を受けていたにせよ殺されたわけではないのだから、「スミスの殺害者」という記述に適合する人物は存在しない。よって、「スミスの殺害者は正気ではない」という発話は、ラッセルの分析に従えば偽になる。ドネラン自身も認めているように、こうした場合、ストローソンとラッセルのどちらに従うにせよ、話者は真なことを述べ損なうという見解を彼は当初採っていた。しかし、ここでドネランは自らの立場を改定している。彼は、この状況であれば、記述に適合する対象は存在しないのだが、話者の発話は真とみなしうる余地があると考えている。ドネランが立場を改定している理由として、当初の自身の見解が誤記述の事例における我々の現実の実践との関係からして厳しすぎるものであるという点に言及している<sup>42</sup>。実際、上のような状況であれば、話者が、それが誰であれ、スミスが死ぬ前に彼に危害を加えた人物について語っているという直観を我々はもつのではないだろうか。いわんや、殺人と誤認するほどの危害を加えるだけのことをするような人は往々にして正気ではないという我々の直観に照らせば、話者は何事か真なことを語っていると述べる余地はあるように思われる<sup>43</sup>。

このドネランの所見は、帰属的用法と指示的用法にまつわる論争においてほとんど無視されてきた。これはひとえに、指示的用法が意味論的現象か語用論的現象なのかに哲学者たちの関心が集中してきたためだと思われる。それゆえに、帰属的用法とラッセルの記述の理論が問題なく両立するという前提が暗に敷かれてきた。しかし、上記のドネランの所見を踏まえれば、ドネラン解釈の問題としてこの前提は誤りである。指示的用法だけではなく、帰属的用法もまた誤記述が生じた上でその発話を真とみなせる余地はありうる。

注意しなければならないが、いずれの場合にもニアミス事例が生じうるからといって、指示的用法と帰属的用法という区別そのものが霧散するわけではない。ドネランは帰属的用法と指示的用法において生じるニアミスが質の異なるものであり、むしろニアミス事例はこの区別の正しく理解するのに寄与すると考えていたようである。

---

<sup>42</sup> Donnellan (1968), p. 209. ドネランは1966年の時点で帰属的用法の誤記述の事例を見過ごしたというより、むしろそれをわざわざそれを考察する必要がなかったと言う方が適切かもしれない。1.2節でみた通り、ドネランの1966年の論文の目的は、確定記述の指示的用法と帰属的用法の区別を提示し、ラッセルもストローソンもこの区別を捉えきれていないことを批判することにあったと言って良いだろう。そして、彼は、そのためには指示的用法の誤記述の事例を傍証とするのが最も説得的であると考えたのではないだろうか。したがって、ドネランのこの目的にとってわざわざ帰属的用法それ自体を掘り下げて分析することは、指示的用法のそれと比べて重要性の低いことだったように思われる。

<sup>43</sup> ドネランのここでの主張は、Ludlow and Segal (2004) による確定記述の分析とも相容れないことに注意されたい。彼らによれば、“The F is G”という発話が真であるためには、少なくともFであるような対象が1つ存在することを要求するからである。しかし、目下の想像上の文脈では「スミスの殺害者」という確定記述に適合する対象が存在しないのだから、ルドロウとシーガルに従っても、ラッセルに従っても、「スミスの殺害者は正気ではない」という発話は偽なものとして分析される。

しかし、もし私が「帰属的」用法と呼んだものの関連するニアミスの可能性を無視していたのだとしても、この区別は実際には害を受けないだろう。というのも、ニアミスについて2つの源泉があるからだ。一方は帰属的用法、もう一方は指示的用法に関するものである。ニアミスが帰属的用法とともに生じるのは、何ものも用いられている記述に正確には当てはまらないが、何らかの個体が、そこで用いられている記述にある意味で意味が近いような記述に当てはまるときである。しかしながら、話者が指示したい特定の個体が、やや不正確な仕方では記述されていたのを見てとることで認識されるのは、全く異なった種類のニアミスである。一方の場合では、ニアミスが記録されるのは話者が何かしらの的を単に外しているときであると言ってよかろう。他方の場合、ニアミスが犯されるのは、話者が自らの狙った的を単に外しているときである。指示的用法の場合にのみ、話者は「大幅に外し (missed by a mile)」うるのである。なぜなら、この用法だけが、その記述が適切に当てはまるか、少し外れるか、ひどく外れるかする特定の対象を伴っているからである。一度このことが理解されれば、ニアミスを考慮することはこの区別を曖昧にはしない。それどころか、このことは、この区別がどのようなものなのかを理解する助けになる。(Donnellan, 1968, pp. 209-210.)

ここで、ニアミスという観点から、帰属的用法と指示的用法の対称性がさらに際立つ。ドネランが素描した帰属的用法のニアミスの例は確かに、意味が近いような記述に適合するような対象が存在している。「スミスの殺害者」という記述に適合する対象は存在しないが、例えば「スミスのに危害を加えた人物 (Smith's assailant)」という記述に適合する対象は確かに存在する。ここで、ドネランが「意味が近いような記述」と言うことでどこまでのことを意味しているのかは定かではないが、直観的に言って、この2つの記述は、程度の差はあれど他人に危害を加える人物に対して使う表現であるという点では似たような意味をもっているように思われる。そして、ドネランが素描している帰属的用法の誤記述の事例は、「スミスに危害を加えた人物」という記述は話者の意図を復元するにあたり、正しい記述である。

対照的に、スミスの殺害者の指示的用法の例はどうであろうか。指示的用法でニアミスが生じた場合、話者が用いていた記述に意味が近く、意図された対象に適合するような正しい記述があるかどうかは、そもそもあまり重要な事柄ではない。これは、指示的用法における記述の役割が特定の対象に聞き手の注意を向けることであることに由来していると思われる。話者は自分が意図している対象を指示するために、聞き手が正しく把握できる限りで如何ようにもその対象を記述することができるからである。話者はジョーンズのことを、「スミスの殺害者 (Smith's murderer)」と言ってもよいし、「被告 (the defendant)」や「弁護士の隣に座っている人 (the man who is sitting next to the lawyer)」など様々な記述を使って、ジョーンズについて語ることができる。この記述の中には、ドネランが言うように大幅に誤っているものも含まれているだろう<sup>44</sup>。それでも、念頭においている対象を聞き手に把握させるという役割を果たす限りにおいて、いずれの記述でも差し支えないのであり、帰属的用法の誤記述の事例で想定されるような意味での正しい記述は存在しないように思われる。どちらの用法にもニアミスの事例が存在するからといって、帰属的用法と指示的用法の区別が曖昧になるわけではないというドネランの主張はもっともであるだろう。

<sup>44</sup> 実際、ドネランはスミスの殺害者の指示的用法の誤記述の事例は、ニアミスとは言えないだろうと述べている (Donnellan (1968), f.n. 9.)。

本稿では、帰属的用法においても誤記述の事例がありうるというドネランの見解が、意味論的解釈と語用論的解釈のどちらに有利に働きうるかに関して論じることにはしない。むしろ興味深いのは、ドネラン解釈の問題として、帰属的用法の誤記述の事例をどのように位置づけるのが適切なのかである。指示的用法の誤記述の事例については、ドネランも含め哲学者たちのあいだで長きに渡り議論が費やされてきた。ドネランによれば、指示的用法の場合、まさに話者は念頭に置いている対象について語ろうとしているのであり、実際に話者はその意図された指示対象について真なことを語っている。そこで、記述はその対象に聞き手の注意を向けさせるという副次的な役割しか果たしていない。後の哲学者も、多くの場合、このドネランの説明にしたがって、話者の念頭におくという認知的状態に訴えて指示的用法を理解してきた。誤記述の場合でもなお意図された対象への指示が成功するのは、この話者の認知的状態ないし意図が指示対象を定めているからに他ならない。そして、スミスの殺害者の例であれ、マティーニの例であれ指示的用法の典型例は、話者が指示対象を直接的に知覚している場合であった。少なくともドネランの例だけ見れば、この直接的な知覚こそが話者の念頭におくという認知的状態を担保していると解釈できる。ウェットスティーンの言い方を借りれば、「話者の意図—話者が誰を念頭においているか—は字義の意味を覆す<sup>45</sup>」のである。このテーゼはドネラン哲学の中心のテーゼとして理解されてきた。

しかし、上で言及した帰属的用法の誤記述の事例において、「スミスの殺害者が正気ではない」という発話で話者がある意味で真なことを述べているという我々の直観は、同じ説明原理では汲み尽くされないように思われる。上でドネランが素描している事例では、話者はスミスの加害者にかなる意味でも直接的知覚をもっていない。しかしそれでもなお、Donnellan (1968) と Ludlow and Segal (2004) が指摘するように、話者はある意味で真なことを述べているという直観を我々は確かにもっている。帰属的用法の誤記述の事例は、ドネラン哲学の中でどのように位置付けられるべきだろうか。ドネランが帰属的用法の分析を単にラッセルの分析だけでよしとしていない背後には、どのような動機があるのか。この問いに答えるべく、まず 2.2 節で、単に指示的用法と帰属的用法の区別に関する彼の見解だけではなく、彼が抱いていた言語観そのものの明るみに出す。私はそこで、発話内容の合理的設計と解釈という観点からドネランの言語に関する洞察を捉え直す。次いで 2.4 節でこの観点からすれば、帰属的用法においても誤記述の事例が認められるのは当然の帰結であることを論じる。

## 2.2 ドネランの言語観—発話の合理的設計と解釈

1 章で論じてきたように、特にクリプキによるドネラン批判以降、ドネランの帰属的用法と指示的用法の区別は、これが意味論と語用論のどちらに属する区別なのかという観点からもっぱら論じられてきている<sup>46</sup>。どちらの立場をとるにせよ、哲学者たちは「単称命題 (singular proposition)」、「一般命題 (general proposition)」、「意味論的指示 (semantic referent)」、「話し手の指示 (speaker's referent)」、「言われたこと (what is said)」、「意味されたこと (what is meant)」、「含み (implicature)」等々の様々な意味論的ないし語用論的な専門用語を援用することで、ドネランの主張を再解釈し、各々の主張を展開してきた。これは結局、各々の哲学者が擁護する意味論と

<sup>45</sup> Wettstein (2012), p. 96.

<sup>46</sup> 最近だと、Back (2004, 2007) と Devitt (2004, 2007a, 2007b) の論争がある。

語用論の境界という色眼鏡を通して、ドネランの主張を解釈するに等しい。この区別が意味論的か語用論的かという論争は、実質的に確定記述の指示的用法を意味論的な現象とみるか語用論的な現象とみるかに関する相違についての争いであったことは、1章で論じた通りである。その結果として、帰属的用法はラッセルの記述の理論と矛盾しない確定記述の用法であるという前提が暗黙のうちに共有されてきた。

私は、こうした理論的枠組みを通じてドネランの言語についての洞察を解釈することは、必ずしも実りが豊かなものの見方ではないと考えている。現代ではごく一般的となった意味論と語用論の区別は、早く見積もっても1960年代後半から1970年前半に定着した枠組みである<sup>47</sup>。ドネランが自然言語の意味論について明確な描像を抱いていたかは定かではないし、もし、抱いていたとしても、それが現代の意味論と語用論の枠組みの中に上手く位置づけることができるかは明らかではない。むしろ、現代の意味論と語用論という枠組みは一旦脇におき、別の角度からドネランの哲学を解釈し直すことで、彼の言語についての洞察の真価が明らかになるのではないだろうか。

そのために、私は以下で、発話を1つの行為とみなし、合理的な主体による発話の設計と解釈がいかになされるのか、という観点からドネランの一連の言語についての洞察を解釈し直す。本稿では、「発話の合理的設計/解釈」と呼ぶことにしよう。この観点から発話を分析するにあたり重要になるのは、語の意味や発せられている文の論理形式ないし発話が表す命題だけではない。むしろ鍵となるのは、合理的な主体としての話者がどのような意図や目的をもって発話を設計しているか、および我々は話者を合理的な主体と仮定した上で、発話の状況や話者がもっていると想定される様々な意図や目的、信念等々を忖度し、いかにして発話を合理的に解釈しているのかを記述し説明することにある。あらかじめ述べておくと、以下で私がドネラン解釈として展開する考察は、伝統的に語用論に属するものであるだろう。例えば、Salmon (2004, 2007) はそもそも発話自体が語用論で取り扱われるべき現象であり、ドネランは誤った意味論概念を抱いているとして批判している。しかし、それはグライスやデヴィッドソン、モンタギューらの仕事の後に確立していった意味論と語用論という枠組みを前提したら、という批判であって、その批判によって我々が発話をどのように設計し解釈しているのかという問題それ自体の哲学的価値が貶められるわけではない。本稿でのドネラン解釈が最終的に意味論と語用論のどちらに関わる考察であるのかに関して、私はできる限り中立的な立場をとる。私の以下の考察は、伝統的な統語論、意味論、語用論という枠組みの中で理解されてきたドネランの言語に対する洞察を、その枠組みという呪縛から解き放き、新たな息吹を灯すことに捧げられている。

ドネランのテキストを紐解く前に、発話の合理的設計と解釈がいかになされるかという問題が、一般的な統語論、意味論、語用論という枠組みと切り離しても、それ自体で哲学的に興味深い問題

---

<sup>47</sup> この時期は、デヴィッドソンやモンタギューによって自然言語の意味論が開拓された時期でもあり、他方で、Grice (1975) の基になった1967年のウィリアム・ジェイムズ講義が行われた時期でもある。グライスはここで、言われたこと (what is said) とは区別された推意されたこと (what is implicated) が導出されるメカニズムを体系的に説明してみせた。このグライスの仕事が基になり、推論的語用論 (inferential pragmatics) が言語学の一分野として目覚ましく発展してきたと言えるだろう。また一方でこの時期は、デヴィッドソンやモンタギューの仕事が土台となり形式意味論が開花もした時代である。意味論と語用論は、哲学者たちのこうした仕事に依拠するかたちで、その区別が次第に明確になってきたという歴史的背景がある。Kripke (1977) のドネラン批判も部分的にはこうした仕事の上に立脚していると言えるだろう。

一方で、ドネランが帰属的用法と指示的用法の区別の着想に至ったのは、1960年代の前半であると推定される（「指示と確定記述」の出版は1966年だが、Almog (2012) によれば、この論文は1964年にリジェクトされた経緯がある）。その頃に、今ほど明確な意味論と語用論の区別という枠組みが存在していたかは疑わしい。

であることを論じよう。言い換えるならば、この枠組みを前提せずとも、我々の言語使用や発話に対して分析を与えることは十分に可能であると示そう。Korta and Perry (2011) の冒頭で素描されている次の例をみよう。

### 1.1 オンダリビア空港<sup>48</sup>での会話

オンダリビア空港に到着し、ジョン<sup>49</sup>は、自分のもとに近づいてくる2人の学生に気がつき、彼らがドノスティアで開催される語用論の学会で自分の招聘を任されているのだろうと推測している。ジョンは2人に対して、“[ninaizdjon]”と言う。哲学者であるヨナは、ジョンが同一性言明とジョークの両方を大変気に入っているということを耳にしていたので<sup>50</sup>、彼が次の英語の文を発話したのだと思った。

#### (1.1) Nina is John (ニナはジョンである) .

ヨナはこの英語の文が使われていると見定めたものの、ジョンが何を言おうとしていたのかと困惑している。彼女は、ジョンが「ジョン (John)」を使うことで彼自身を指示していると予測する。しかし、そうすると、彼は典型的には女性の名前として用いられる「ニナ (Nina)」という名前で、誰を指示しているのか？そして、なぜ彼は自分がニナだと言っているのか？彼は何をしようとしているのか？ヨナはジョンが、同一性言明および哲学者たちの同一性言明についての物言いと関連づけて何かおかしいことを伝達しようとしているのではないかと思っているが、この仮説に基づいたジョークが何なのかを見出せない。

ヨナの友人であるバスクの文献学者ラライツは、指示と同一性言明について学習することをそれほど要求されることはなかったので、ジョンについてあまり多くを知らない。このことは、彼が何を言っているのかを理解するに際し、彼女に有利に働いた。彼女は、ジョンの発話はバスク語の文、

#### (1.2) Ni naiz John (私がジョンです) .

を使っているのだと正しく理解した。これは、ややもすると不器用だが、極めて字義的な “I am John” という文に相当する。ラライツの唯一の関心事は、ジョンに挨拶をするための適切な仕方である。つまり、アメリカ的な仕方で握手をするか、ヨーロッパのこの地方では普通である、両頬にキスをするかどうかである。彼女は、ジョンに自分が誰であるのかを伝えることで、まずジョンに返事をしようと決める。ジョンが言ったよりも、より適切なバスク語の語順でこう言う。

#### (1.3) Ni Larraitz naiz [I-Larraitz-am] (私はラライツです) .

<sup>48</sup> スペインのバスク地方にある空港。サン・セバスティアン空港とも言う。

<sup>49</sup> ここで言っているジョンとは、この本の執筆者のうちの1人、ジョン・ペリーのことである。

<sup>50</sup> ジョン・ペリーは『自己同一性 (Personal Identity)』という本を1975年に出版している他、同一性に関わる文献を多数執筆している。

ここではひとまず発話の解釈にだけ焦点を当てる。発話を解釈するという我々の営みは普段ほとんど苦労なくおこなわれているように思われる。しかし、このコータとペリーの例は、ただ 1 つのとても単純な発話を解釈するために、かなり複雑な推論を要していることを示している。素朴な統語論、意味論、語用論という理論的枠組みに基づくと、我々の発話の解釈はややもすると次のように説明されるかもしれない。まず文が与えられ、統語論的な解析と意味論的な関数計算がなされる。そして、最後に話者の意図や文脈といった事柄が語用論的な事柄として考慮される。コータとペリーはこうした素朴なものの見方を暗に次のように批判している。

言語哲学の理論は、意図の形成と発見が線形のプロセス (*liner processes*) だという前提によってしばしば形作られている。この前提は暗黙のうちに敷かれていることもよくある。言語と語を認識し、ついで、部分的に文脈に依拠して、ありうる意味を選択し、内容一すなわち言われたこと、ないし表現された命題—をさらに文脈に訴えることによって決定する。そして、なぜ話者がなぜそう言ったのか—この話者がどんな付加的 (ないし代替的) 意味を伝えることを意図しているのか、およびどんな発話行為をなそうとしているのか—を見出すためのグライスの推論を行使し、最終的に、ほとんど非意図的にかもしれないが実際に話者がなしたことを見出す。それぞれのレベルが、ややもすると適切な文脈的情報の助けを借りて、次のレベルを決定している。

ヨナもラライツも明らかに線形の推論に自制することはしていない。ジョンが何語を使っているのかや、彼がどんな語を使っているのか、彼が何を言っているのか、なぜ彼がそう言ったのか、といったようなジョンの行為の数々の側面について、ジョンとラライツの各々が整合的な説明を考え出そうとしている。にこうした諸側面はお互いに調和する必要はない。役に立つ理論を提示することは、連続的に関数を計算し、音から音声、意味、文脈へと進んでいくという事柄ではない。むしろ、ほとんどの推論のように、数々の制約を満たすようにして、何が起きているのかについての理論、ないしもう少し穏当に言えば、それについての説明を提示するという事柄なのである。(Korta and Perry, 2011, pp. 11-12.)

ここで指摘されているように、我々の現実の発話理解が、統語論から意味論へ、意味論から語用論へという素朴な直線的なプロセスに根付いていると考えることが、唯一正しい観点であるとは限らない。現に、上の事例でジョンの発話を正しく理解するプロセスは、異なった道筋を辿っているように思われる。というのも、そもそも相手が何語を話しているのかが分からなければ、インプットとなる文が特定できないからである。そして、ジョンがバスク語で “I am John” に相当する文を述べようとしていることを特定するために、以下の事柄が考慮されなければならないように思う。

- (a) ヨナとラライツはバスクの空港でジョン・ペリーに初めて会う。(状況/共有知識)
- (b) 通常初対面の者同士は名前を述べることから会話を始めるのが一般的である。(慣習)
- (c) ジョンは挨拶をしようとしている。(意図/発話行為)
- (d) 異国の地に来たときは現地の言葉で挨拶をすると相手を喜ばせられる。(慣習)
- (e) ジョンはヨナとラライツの 2 人を喜ばせようとしている。(意図/発話行為)

伝統的な見地からすれば、これらはどれも語用論の領域で中心的に考慮される事柄である。しかし、だからといって我々が現実に発話を解釈するときに、そこで発せられている文の統語構造および意味論的内容が判明して、その後になって最後の最後に考慮される事柄というわけではない。むしろ、この例では文の統語構造と意味論的内容を特定するために、(a) ~ (e) は最初に訴えられる必要がある。ヨナが勘違いから解放され、ジョンの (1. 1) の発話を正しく理解するには (a) ~ (e) の全部、あるいはいくつかが彼女の意識にのぼってこななければならないだろう。

コータとペリーは触れていないが、次の事実はさらに興味深い。上記の例で、ジョンの発したバスク語の文はバスク語の文法として不適格なのである。それにも関わらず、ラライツはジョンの発話を合理的なものとして解釈できている。それは、ジョンがバスク語を発していることを正しく聞き取り、文法的に誤りであるにせよ、空港で彼を出迎えているという状況や通常バスク語で名乗るときに使われる語を使っているといったことから、自己紹介をしようとしているという意図を正しく察知し、彼の発話を合理的に解釈したからに他ならない。我々がいかに合理的な主体であろうとも、言い間違いや勘違いから誤った文を発してしまうことはよくある。現実の発話が常に統語論的かつ意味論的に適格な文を与えてくれるとは限らない。それでも、我々は発話された文に含まれる誤りをいわば度外視し、発話を話者の意図に沿った仕方で解釈することができるのである。発せられている文が統語論的に適格かどうかや、その発話内容が意味論的に真か偽か、あるいは語用論的に何が伝達されているのか等々の理論的枠組みに基づかなくとも、そもそもこういった我々の日常的な発話の設計と解釈が何に根差しているのかという問題は哲学的にとっても興味深い問題ではないだろうか。

コータとペリーは、この問題を探究するにあたって鍵となる観点がなんであるかを次のように論じている。

ヨナもラライツもジョンが何と言ったのかと考え、両者は異なる結論に至った。直観的に言って、正しい回答と誤った回答があることを鑑みると、真の問題がここにある。ヨナは間違え、ラライツは正しかった。この問題はジョンの口から出てきた音によっては解決されない。そして、この会話が交わされた地域で、バスク語が公用語であるという事実や、ジョンの母国語が英語であるという事実もこれを解決しない。この問題に対する回答の大部分は、ジョンが何をしようとしていたのか (*what John was trying to do*)、彼が音を発したときその意図は何だったのかということによって与えられる。ジョンが何を言ったのかを理解しようとする際、ヨナとラライツがしようとしたことの大部分は、彼の意図、つまり彼が何を言うつもりだったのかを見出そうとすることであった。人間はたくさんの意図的行為に携わり、人間はこの問題の複雑さを踏まえれば、なぜ他の人間がそのことをしているのかを見出すこと一意図の発見 (*intention discovery*) 一にとっても長けている。我々の事例は、人間の言語と言語理解がこの一例であることを示唆している。話すということは、意図的な活動であり、理解することは、主として意図の発見に関わっているのである。 (Korta and Perry, 2011, p. 2.)

コータとペリーは、発話がまずもって 1 つの意図的な行為であるという前提から出発する。この前提に基づくと、ある発話を理解するということは、話者が何をしようとしているのかを理解することである。もちろん、1 つの発話には様々な意図や目的が付随しているだろう。ジョンの “Ni naiz

John”という発話には、自分がジョンという名前であるという真な命題を主張することや、ヨナとラライツに挨拶をすること、バスク語で挨拶をすることで 2 人を喜ばせようとするなど、様々な意図や目的が付随している。コータとペリーの例はやや極端かもしれないが、こうした話者の意図や目的が、発話の設計と解釈に大きな役割を果たしていることを教えてくれている。だとすれば、話者が発話を設計し、聞き手がそれを解釈するときに、初めから様々な推論を行使されていると考えるのには十分なもってもらしさがあるだろう。コータとペリーが指摘しているように、発話を意図的な行為として考え、この観点から我々が発話を設計し解釈する際に現実には何が起きているのかについて説明を与えることは、1 つの十分な発話の分析、そして我々の言語使用の分析として体をなすのではないだろうか。

私の解釈では、ドネランはまさにこの観点から発話を分析した哲学者の 1 人である。コータとペリーもそのことを指摘している。

言語陣営からの哲学者たち、特にドネランは「マーカスやクリプキ、カプランといった論理学者たちとは」少し異なった仕方でも事態を見ている。彼は指示的用法の指示を決定する主導的な役割を話者の意図に委ね、発話、少なくとも人がある対象について何事かを述べるという行為に焦点を当てている。(Korta and Perry, 2011, p. 37.)<sup>51</sup>

ドネランのそもそもの関心が行為としての発話を分析することであったことは、彼のテキストにも裏付けがある。彼は発せられた文が有意味かどうか、意味論的に真かという観点からものを語ることにはせず、当該の状況で主張や質問、命令といった発話行為が成功しているかどうか、という観点から我々の言語使用を分析している。確定記述が用いられているときにその記述に適合する対象が一意的に存在するという前提ないし含意が満たされていない場合の考察の過程で、ドネランは次のように述べている。

帰属的に用いられている確定記述によって前提ないし含意が生じるのは、なにも記述に適合しなかった場合に、発話行為に込められた言語的目的が頓挫するからであろう。すなわち、話者は主張をしているのであれば真であることに成功しないであろうし、質問をしているのであれば答えられる質問をするのに成功しないだろうし、命令を発したのであれば、従うことのできる命令を発するのに失敗したことになる。 [...]

他方で、確定記述が指示的に用いられている場合、前提ないし含意が生じるのは、通常、自分が指示したいものを正しく記述しようとするのが、自らが指示しているものを聞き手に認識させるのに最良の方法なのであるから、普通、人はそうするという事実から端的に生じている。我々が見てきた通り、たとえ何も記述に適合せずとも、このような場合、発話行為の言語的目的が達成されるということはある。すなわち、何事か真なことを述べたり、答えのある質問をしたり、従うことのできる命令を発することが可能である。 [...]

(Donnellan, 1966, pp. 291-292. 強調は筆者によるものである。)

<sup>51</sup> ここで述べられているように、彼の指示的用法についての分析は、基本的にそれが 1 つの行為であるという観点からなされている。以下で論じるが、ドネランのこのものの見方は、指示的用法だけではなく帰属的用法や固有名の指示に関しても同様に当てはまる事柄である。

この態度は 1968 年になっても変わっていない。不完全確定記述が指示的に用いられているとき、いかにしてその指示対象が把握されるかに関する考察の過程で、次のようにも述べている。

しかしながら、ひとたび我々が指示的な確定記述の機能を理解すれば、我々は指示されている対象に一意的に適合するとされる何らかの記述が、当該の発話行為から復元可能であると想定する必要はない。聞き手は、部分的な記述と様々な手がかりやヒントから、話者が一意的に適合する記述をもつことなく何を指示しているのかがわかるだろうし、その指示対象は話者の発話行為のうちに最初から暗示されていたのである。(Donnellan, 1968, f.n. 5. 強調は筆者によるものである。)

こうしたドネランのテキストから窺いしれるのは、(少なくともこの時期の) ドネランが発話をまづもって 1 つの行為として考えていたという事実である。単なる “The F is G” という発話の分析の土台も、真な主張をおこなうという発話行為に込められた目的にある。それが、質問であれば聞き手が答えることのできる質問をするということが目的になるだろうし、命令であれば、従うことのできる命令を下すことになるだろう(もちろん、それに付随して他の様々な意図や目的があることは十分にありうる)。言語の分析は、その対象が発話になったとき、語や文だけでなく、発話の状況や、合理的な話者がもつ意図や目的、信念等がその解釈に決定的な役割を果たすということを、ドネランは見抜いていただろうし、彼の言語についての洞察はこの事実に立脚して生み出されてきたものだと考えられる。意味論と語用論という理論的枠組みを前提とするよりも、発話の合理的設計と解釈という観点からドネランを解釈することは、翻って帰属的用法と指示的用法についてより多くのことを教えてくれるように思われる。以下では、この観点に立脚しながら、彼のテキストをさらに紐解いていこう。

指示的用法の誤記述の事例を振り返ることから始めよう。1.1 節において、この例に言及した際、なぜ、話者は記述に当てはまる対象が存在しなくても指示に成功し、意図している対象について真ないし偽なことを述べるのかまでは議論しなかった。今やそれを論じるときであるだろう。問題なのは、「スミスの殺害者は正気ではない」という発話において、「スミスの殺害者」が指示的に使われており、なおかつこの記述に適合する対象が存在しない場合でも、話者が意図した指示対象について真な主張をしていると考えられるのはなぜか、である。

ドネランはこの問題に対して、そもそも合理的話者たるもの発話を設計する際に考慮していなければならない事柄を分析することで応答する。彼によれば、話者は意図によっていつでもどこでも好きな対象を指示できるわけではない。例えば、法廷で奇妙な振る舞いをしているジョーンズを「マティーニを飲んでいる人 (the man drinking a martini)」という記述で指示できるわけではない。いきなり、スミス殺害事件の裁判で話者が「マティーニを飲んでいる人は正気ではない」と言ったとしても、話者がジョーンズを指示していると考えるのは極めて困難である。では、話者が念頭においている対象を指示しているといえるために課される要件とは何か。ドネランによれば、話者がある対象を指示することを意図していると言えるためには、そもそも正しい予測 (expectations) をもっていなければならない<sup>52</sup>。

<sup>52</sup> ドネランは意図という概念は予測だけではなく、同じ目的を達成するための他の手段の存在や動機にも依存すると考えている (Donnellan, 1968, p. 212, f.n. 10.)。彼は、乗っていた船が沖で沈んで岸にたどり着くために必死に泳ぐ人を例にとる。この人はたとえ岸に到達できることに関して何ら合理的な予測はもってなかったとしても、岸に到達す

私が強調したい意図に関する事実は、それが本質的に予測（expectations）と結びついているということである。（Donnellan, 1968, p. 212.）

ドネランは腕を上下にバタバタさせることを例にとる。ある人に、飛ぼうという意図をもって腕を上下にバタバタ振ってもらうよう要求したとしよう。その人は応答として手をバタバタと確かに振ることはできるが、我々はこの人が本当に空を飛ぶことを意図していると言えるだろうか。否、とドネランは答える。なぜなら、普通の大人は、そもそも通常的环境下で腕を振ることで飛ぶことができるという予測を立てることそもそもできないからである。おそらくこれは、空を飛ぶという目的に対して、両腕をバタバタ振るという行為は適切な手段ではないからであるだろう。あることを意図するということは、そのことの実現のために適切な手段を選択するということ深く結びついている。

指示的用法に関しても同様のことが当てはまる。話者が“The F is G”である対象を指示していると言えるためには、話者は“The F”という確定記述、すなわち手段によって、聞き手に自分が念頭においている対象を把握という目的が達成されるという合理的な予測をもたなければならない。スミスの殺害者の例において、この予測は十分に満たされているだろう。そう言える 1 つの理由は、まずもってこの発話がなされている状況にある。ドネランはやや間接的にはあるが、我々の意図が状況依存的であることを示唆している。

[...] 全く不意に「ここ寒いね」と言うことで「ここ暑いね」と意味できないのは、私が思うに、何が意図されていたのであれ、この語がそのような意味を与えられえないからではない。むしろ、その理由は、そのような状況で正しい意図をもつことの不可能性によって、説明することができる。（Donnellan, 1968, p. 212.）

ここでの、「そのような状況で（in such circumstances）」という但し書きが重要である。これ逆手にとれば、全く不意に「ここ寒いね」と言って「ここ暑いね」を意味することを意図していたことを正当化するのが不可能なだけであって、状況が状況であれば合理的な予測のもとに、「ここ寒いね」と言って「ここ暑いね」と意味する意図をもつことは可能だということである<sup>53</sup>。我々が何を予測し、何を意図できるかは状況に依存している。

同様に、スミスの殺害者の例で話者が適切な意図をもっているということを正当化するために訴えるべきは、スミス殺害事件の裁判の被告席にいるジョーンズが奇妙な振る舞いをしているという状況である<sup>54</sup>。この状況で、ジョーンズを指示するという目的にとって、「スミスの殺害者」とい

---

ることを意図していると言えるだろう。これは、他に岸にたどりつくための他の手段が存在しないことや、生き延びたいという動機の切実さに依拠していると思われる。対照的に、海岸沿いで岸にたどり着くために同じ動作をする人がいたとしても、その人は岸に到達することを意図しているとはみなされえないだろう。

<sup>53</sup> 例えば、明らかに暖房が効きすぎている部屋の中で皮肉を込めた言い方をして、「ここ寒いね！」と言うような場合が考えられる。

<sup>54</sup> Almog (2004) は指示的用法における状況の重要性を正しく指摘している。

記述句が指示する対象を決定するのが、話者の「決断」や「意図」、「約定」だということを示唆するものとして、指示的用法は解釈されることが多い（これはなお残るハンプティードンプティードメイン主義である）。多くの人が念頭においているこの見取り図によれば、私の頭が指示という行為の引き金になっている。したがって、

う確定記述を用いることは完全に適切であると思われる。なぜなら、殺人事件の裁判の被告席にいる人物に対して「殺害者」という語を適用する言語実践が明らかに存在するからである<sup>55</sup>。このようにして、話者が指示をするという目的に対して、状況に応じた適切な言語表現の選択を経て発話が設計されているとき、次のように言えるだろう。話者はたとえ記述が念頭においている対象に適合しなくても、指示に成功し、その対象について真ないし偽なことを語りうる、と<sup>56</sup>。ドネランのこの指示的用法についての分析は、合理的な主体による指示的用法を伴う発話が、どのような意図を伴っていなければならないのかに関するものである。このことは、彼が発話の合理的設計と解釈という観点から我々の言語使用を追求していたことの1つの証左とみなせるだろう。

上述のようなドネランの言語使用の分析に対する態度は、後の1970年の論文、「固有名と同定記述 (Proper Names and Identifying Descriptions)」の中でも端々に現れている。彼はこの論文の中で、いわゆる固有名の記述説<sup>57</sup>を批判し、のちのDonnellan (1974)で展開される「歴史的説明説 (Historical Explanation Theory)」に繋がる議論を展開している。だが、ここでの私の目的は、彼の記述説批判や歴史的説明説の是非ではなく、彼の議論そのものに通底する態度を詳細に分析することにある。確定記述ではなく固有名を伴う発話であろうとも、発話は話者によって合理的に設計され、聞き手によって話者の意図や目的に適う仕方でも合理的に解釈されるということは大前提である。

---

指示対象が誰なのかは絶対的に私に委ねられているように思われる。私の理解だと、この解釈は、(i) ドネラン（彼が「意図された指示対象」や「念頭においている対象」で意味していたこと）と(ii) 指示的用法で実際に起きていることの両方を読み誤っている。

私が「念頭においている」ものについての説明は、私の頭が「約定する」ものからは始まらない。私の頭は物語の「中間」に現れる。指示的用法の歴史は、私の外の、世界の側にある起源となる状況から始まる—それは対象（例えば、海王星）かもしれないし、何らかの誤解された現象（例えば、ヴァルカン）かもしれない。(Almog, 2004, p. 415.)

アルモグがここで指摘しているように、指示的用法において最初に与えられているのは話者の外側にある世界の状況である。話者が何を念頭において、指示することを意図しているのかは、その発話の状況なしに考察することはできない。目下の例でいえば、話者が「スミスの殺害者は正気ではない」という発話で、誰について語っており、この発話が真かどうかを定めるためにあたり、スミス殺害事件の裁判で奇妙な振る舞いをするジョーンズがいるという状況は切り離されえない。以下で論じるように、ドネランのこの信条は、指示的用法だけではなく、彼の言語についての洞察全般に当てはまる。

<sup>55</sup> そして、確立された実践の存在が、通常、話者が正しい予測をもつために要求されるだろう (Donnellan (1968), p. 212.)。

<sup>56</sup> 指示的用法において、話者がどのような記述を選択していれば、適切な意図をもっていると言えるかという問題は発話のなされている状況だけではなく、話者と聞き手との背景知識にも依存する事柄でもあるだろう。つまり、指示的用法において、記述は聞き手の関心や知識に合わせて選択される必要もある。なぜなら、ドネランが強調するように、指示的用法における記述の役割は、話者の念頭においている対象を聞き手に把握させることだからである。例えば、「殺害者」という語の意味を明らかに知らない想定される聞き手（例えば、未就学児）に対して、自らの念頭においている対象について語るためにこの語を使うことは、指示する意図があるとは言えないだろう。そこには、この語を使うことで聞き手がその対象を把握できるだろうという合理的な予測が欠けている。

<sup>57</sup> 以下の議論に必要な範囲で固有名の記述説について補足しておく。ここでは、ドネランが「同定記述の原理 (the principle of identifying descriptions)」と呼び、批判しているタイプの記述説に話を限定する。これによると、ある発話中の固有名の指示対象は、話者がその固有名に結びつけている記述に適合する対象に等しい。例えば、「アリストテレス」という固有名の指示対象は、「ニコマコス倫理学の著者 (the author of Nichomachean Ethics)」や「アレクサンダー大王の教師 (the teacher of Alexander the Great)」といった記述に一意的に適合する対象が選び出される。複数の対象が記述に当てはまったり、何ものも記述に適合しなかったりする場合、当該の固有名で話者は何も指示していないことになる。

彼が示したのは、この観点から固有名を含む発話を分析したとき、固有名の記述説は明らかに誤った予測をしてしまう、ということであったと思われる<sup>58</sup>。

1つ目の例をみよう。

以下のような状況を想像してみよう。知覚に関心のある心理学者による実験で、ある被験者がある単色のスクリーンの前に座らされている。このスクリーンは彼の視界を完全に覆うほど大きいものである。このスクリーン上に、同型同色の2つの正方形が描かれており、片方がもう一方の真上にある。この被験者はこの正方形のうちのどちらが先に描かれたのか等—この2つの正方形の過去については何も知らない。未来のことについて何かを知っているわけでもない。この被験者がこの正方形たちに名前をつけ、彼は何を基準にその名前をつけたのかを言うように要求されるとする。あとで言及する状況の複雑化も踏まえると、この被験者が2つの正方形を区別する唯一の仕方は、その相対的な位置しかないと思われる。ゆえに、この被験者は上の正方形を「アルファ」、下の正方形を「ベータ」と呼ぶと答えるのはもっともである。

この例のひっかけはこうである。この被験者は知らないのだが、彼は視界を逆さにする鏡をかけられていたとしよう。したがって、彼が一見したところ上に見えている正方形は、実は下にあり、下の正方形は上にある。使用可能な2つの名前を手に入れたので、被験者がこの正方形のうちの1つについて何かを言うために、2つの名前のうちどちらかを用いるのを想像できよう。彼が2つの正方形のうちの1つの色が変わったと信じるに至ったとする（誤解かどうかは問題ではない）。彼は、「アルファは今色が変わっている（Alpha is now a different color.）」と報告するかもしれない。しかし、彼はどちらの正方形を指示しているのか？

(Donnellan, 1970, p. 347.)

話の単純化のために、実際に一方の正方形の色が変わったのだと仮定しよう。このとき我々は、「アルファは色が変わっている」という字面だけをみて、最初の約定どおり、「アルファ」という名前でこの被験者が上の正方形を指示しているとは解釈するべきだろうか。記述説に基づく、この状況で話者が「アルファ」という名前に結びつけている記述はせいぜい「上の正方形 (the square on the top)」程度のものであるだろうから、この記述は「アルファ」の指示対象として上の正方形を選び出す。したがって、話者は上の正方形についてその色が違うと語っているものとみなされる。しかし、ドネランはこう述べる。

私が思うに、彼は知らないとしても、この被験者は下の正方形を「上の正方形」として記述するのではあるが、彼が下の正方形について話をしていると述べるのは、完全に正しい。

(Donnellan, 1970, p. 348.)

ドネランのこの直観は大いに理解可能である。上で素描されている状況であれば、話者は「アルファ」という名前で明らかに下の正方形を指示しているものとして我々は理解するだろう。発話中の固有名の指示対象決定に関して記述説を採用することの誤りは、この直観を救えないことにある。

<sup>58</sup> もし、この憶測が的を射たものであるならば、Kripke (1980) が様相的な文脈における固有名の振る舞いから記述説を論駁したのとは対照的である。

それは、記述説が話者の意図や発話の状況といった要素をほとんど考慮していないからかもしれない。固有名を伴う発話であろうとも、まずもって、この被験者の発話が 1 つの行為であるという観点からの分析が必要である。この発話内容を合理的に解釈するためには、

我々は、彼がどのように指示対象を記述するかと、彼は知らないことだが、この眼鏡が一定の仕方で彼の記述に影響を与えていることの両方を知っていなければならない。(Donnellan, 1970, p. 349.)

「彼がどのように指示対象を記述するか」というのは、この被験者がどのような記述を与えるかということ指している。つまり、興味深いことかもしれないが、ドネランは、話者が与える「上の正方形」といった記述が指示対象の決定に役割を果たすという記述説の仮定を受け入れているのである。しかし、それは記述説が想定するように、一意的に適合する対象を選び出すことではない。ここで与えられる記述は不正確なことが往々にしてありうる。むしろ我々が問うべきは、何が与えられている記述に適合するのではなく、何にしかじかの記述が適合すると話者が判断したのか、であるという<sup>59</sup>。上の状況でいえば、「上の正方形」という記述は、この記述が自らの意図した指示対象に一意的に適合するという話者の判断を告げているのである。換言すれば、「上の正方形」という話者の記述は、上の正方形を指示する名前として導入された「アルファ」を、その約定どおりに使おうとしているという話者の意図を教えてくれているのである。これに加えて、ドネランは、この被験者は視界が逆さになる眼鏡をかけているという発話の状況も考慮されねばならないことを正しく指摘している<sup>60</sup>。そのことを踏まえれば、話者自身は上の正方形を指示することを意図していたのだとしても、実際には下の正方形について色が違うと語っているのだという解釈は合理的だと言えるだろう。この例についてのドネランの考察だけからでも、彼が 1 つの行為として固有名を含む発話を分析することに立脚していることは明らかであるだろう。

次の例は、話者が混乱しているあまり、話者自身が表明する意図にさえ頼ることができない場合である。ドネランは、それでも我々は話者の発話は合理的な設計されており、我々はそれを察知して発話を解釈しているという議論を展開する。

ある学生が自分は有名な哲学者 J. L. アストン・マーティンだと思っている人物と会う。以前にこの学生はこの哲学者の著作のいくつかを読んだことがあったので、彼は「『別の身体』の著者」や「自我多元主義の先導的解説者」といった記述を自由に使える。この出会いはあるパーティーで起きたことであり、この学生はいくらか長い会話をこの人物と交す。結局のところ、その会話の多くは海拔高度の高い順番から人口が 100 万人以上の都市を挙げていくことにあてられた。しかしながら、実際には、この学生は一度も疑うことはなかったのだが、このパーティーにいた人物は有名な哲学者ではなく、そのような印象を彼にもたせてしまった別の誰かだったのである。(たまたまこの人物が同名であったということさえも想像できる。)

<sup>59</sup> Donnellan (1970), p. 349.

<sup>60</sup> 話者が逆さ眼鏡をかけさせられていることに気がついていないということも、暗黙のうちにであれ考慮されているだろう。ドネランがそこまで言及していないのは、実験の被験者がこうした類の実験では逆さ眼鏡をかけさせられていることがありうるという事例をさらに考察しているからだと思われる。その事例に関しては、本稿では立ち入る必要はないと思われるため割愛する。

さて、のちの友人たちとの会話で、この学生がこのパーティーで起きたことを物語るのを想像してほしい。この学生は、「昨夜アストン・マーティンと会って1時間近くも話したんだよ」と言って話を切り出すかもしれない。彼はこの時点で誰を指示しているのか？

(Donnellan, 1970, pp. 349-350.)

この例に現れる学生は、パーティーでたまたま会った男を、彼が以前から著作に親しんでいた有名な哲学者、アストン・マーティンだと勘違いしてしまっている。ドネランがここで問題にするのは、この学生が「アストン・マーティン」という固有名を用いることで、パーティーで会った男と有名な哲学者のどちらを指示しているのか、である。後の友人との会話で彼が、「アストン・マーティンに会った」と言って話を切り出すとき、彼はどちらの人物を指示しているのか。それは疑いなく有名な哲学者であって、「この学生が言っていることは端的に偽である<sup>61</sup>」とドネランは答える。ところが、

[...] パーティーの残りのことに大きく関心が移り、何があったかについてのいくつかの話をするに至ったとしよう。この学生は、いわば、たまたま「J. L. アストン・マーティン」という名前を使うかもしれない。例えば、こうである。「…それで、ロビンソンがアストン・マーティンの足に引っかかって、顔面からすっ転んだんだよ」とか「僕はほとんど最後までパーティーにいて、あとはアストン・マーティンとロビンソンが、すごく酔っ払ってたけど、残ってたかな」

こうした後続する発話でこの話者は「アストン・マーティン」という名前を用いる際に誰を指示しているのか？ (Donnellan, 1970, p. 350.)

ドネランはこうした場合、この学生が指示しているのは、有名な哲学者ではなくパーティーにいた男である、と答える。つまり、発話によって同一の話者によって用いられる同一の固有名の指示対象が変化する可能性を認めている<sup>62</sup>。

この例においては、この学生がどちらの人物を指示しているのかを定めるために、彼が与える記述はもはや助けにならない。なぜなら、この学生にとってみれば有名な哲学者アストン・マーティンはパーティーにいた男は同一人物であり、発話の時点で彼が「アストン・マーティン」という名前に結びつけている記述が変化しているとは思われないからである。ドネランは次のように述べている。

この名前が、初めにアストン・マーティンにパーティーで会ったと主張している時点とパーティーで会った人物が関わる他の出来事を思い出している時点のどちらに現れているにせよ、「アストン・マーティンって誰だ？」と尋ねられた場合、記述の集合一式は、彼がのちにパーティーについて語る際にも利用可能ではあるものの、同じであるだろう。我々は指示対

<sup>61</sup> Donnellan (1970), p. 350.

<sup>62</sup> 本稿で立ち入ることはできないが、ドネランのこの主張はいくらかの議論を呼び起こしてきた。例えば、Evans (1973) は会話の中で同一の固有名の指示対象が変化するというドネランの見解を批判している (Evans (1973), p. 202.)。一方で、例えば、Wettstein (1984) は純粹指標詞「私 (“I”)」に関しても同様の事例、すなわち、同一の話者によって用いられる「私」の指示対象が、発話の状況や話者の信念、意図等々によって変化する可能性を認めている (Wettstein (1984), pp. 67-68.)。

象が一連の会話の中で変化したと言うだろうが、話者そうは言わないだろう。(Donnellan, 1970, p. 351.)

ここで強調されているように、この学生自身が「アストン・マーティン」という名前で誰を指示することを意図しているのかは、彼の発話を合理的に解釈する上で助けにならない。彼の頭の中では、有名な哲学者とパーティーにいた人物は同一人物なのである。そうだとすると、事情を知っている(in the know)我々がこの学生の発話を合理的に設計されているものと考え、その内容を適当な仕方

方で解釈する余地は十分にあるというのが、ドネランの直観である。  
ドネランがそう主張する根拠をみよう。我々は何を頼りに指示対象の変化を察知し、違う仕方

で発話を解釈しているのであろうか。ドネランは発話の「要点(point)」という概念に訴えて指示対象の変化を説明している。  
この違いは、最初の発話では、話者が有名な哲学者を指示している場合にのみ彼の発言は要

点をもつものに対して、のちの発話ではそこで何が起きたかが大事な要点であるのだから、彼はパーティーにいた人物を指示していると理解するのがより自然だという事実にあるのかもしれない。(Donnellan, 1970, p. 350.)  
本稿では、発話の要点という概念を分析することはしないが、我々は往々にして要点をもつようにして発話を設計する、換言すれば、支離滅裂に何の話をしたのかもわからないような発話をする

ことは比較的少ない、ということは認めてよいだろう。そして、話者が誤信念をもっていること自体は、このことを傷つけるものではない。ここでのドネランの主張は、たとえ話者が多少混同をきたしていても、話者は要点をもった発話を設計するように心がけるし、我々は発話全体がもつと推定される要点から、発話内容を合理的に解釈できる、と要約してよからう。  
上述の状況で、この学生が「アストン・マーティンに会った」という発話でもって会話を切り出す際、この発話の要点は、自分があの著名なアストン・マーティンと会って会話を交わしたことを哲学科の友人に自慢しようという点にあるだろう。そうであるとすれば、この学生は「アストン・マーティン」という名前で、パーティーにいた人物ではなく有名な哲学者を指示しているものとして、この発話は解釈されるべきである。ドネランが述べている通り、この発話で話者がパーティーに会った人物を指示していると解釈してしまうと、この発話は何を目的としているのかわからなくなる。なぜなら、パーティーで人と会って話をする

<sup>63</sup> 学生がいきなり「アストン・マーティン」という固有名を使って会話を切り出しているという点も考慮されてしかるべきだと思われる。なぜなら、我々がいきなり固有名を使って話を切り出すとき、一般的に聞き手がその人物を知っていることを前提するからである。語用論の用語で言い直せば、固有名はその指示対象がすでに共有基盤(common ground)に存在することをその前提(presupposition)としてもつ。例えば、Geurts (1997) や Maier (2015) はこの分析を擁護している。すなわち、この最初の発話でこの学生は聞き手である友人たちが、自分が「アストン・マーティン」と述べることで誰のことを指示しているのかを把握できることを前提している。それが誰かといえば、当然、哲学科の学生なら誰でも知っていると思定される著名な哲学者、アストン・マーティンである。

もちろん、その一方で、あとのパーティーの出来事に関する発話で「アストン・マーティン」という固有名の指示対象が変化しているというドネランの直観は、この固有名がもつとされる前提と衝突するものかもしれない。この衝

あとの発話の場合、会話の参加者の関心がパーティーでの残りの出来事にあるという状況で、ロビンソンが転んだという報告をしていることからして、その要点はパーティーの出来事を報告することにあるのは明らかだろう。この発話にとって、ロビンソンが足を引っ掛けた人物が有名な哲学者であったかどうかは重要な事柄ではない。この報告自体は「アストン・マーティン」という名前を使わなくとも可能である<sup>64</sup>。「ロビンソンが隣にいた人の足に引っかかって顔面からすっ転んだ」と言ってもよいし、単に「ロビンソンが顔面からすっ転んだ」と言っても、この出来事の報告自体は成功しているし、真とみなせるのは自明である。ドネランの言い方を借りれば、「アストン・マーティン」という名前が使われているのは、たまたま (incidentally) でしかない。そうであるとすれば、有名な哲学者ではなく、実際にその出来事に関与していたパーティーにいた人物を指示しているのであり、パーティーの出来事について真な報告をしていると解釈した方が、よりこの発話の要点に適うだろう<sup>65</sup>。

この例では、ドネランは、発話とはまずもって要点をもつように設計されるという観点から、この混乱した学生の発話内容を合理的に解釈できることを描いている。いかに我々が合理的な主体であっても、単なる言い間違いから誤信念まで、様々な誤りを犯しうる。それでも、話者自身が誤った信念をもっていること自体は、発話そのものが合理的な考慮のもとでなされているということを必ずしも傷つけはしない。コータとペリーの例や指示的用法の誤記述の事例にもあった通り、我々は発話自体が合理的に設計されていることを前提とし、多少の誤りは修正しつつ発話を合理的に解釈できるのである。そのとき頼りにするのは、発せられた語や文だけではなく、発話の状況や要点、話者がもつ意図や信念、目的等々であるだろう。

私はここでのドネランの議論に単なる固有名の記述説批判以上のことを見出している。彼の記述説批判は基本的に帰属的用法と指示的用法についての彼の考察と地続きであり、我々の発話設計と解釈がどのようになされるかを出発点としていると思われる。そして、彼が議論の過程で明らかにしているのは、発話を合理的な主体によってなされる 1 つの行為とみなしたとき、記述説が描くような発話解釈の描像は立ち現れて来ないという事実ではないだろうか。記述説によれば、ある発話に含まれる固有名の指示対象とは、話者がその固有名に結びつける同定記述に適合する対象のことである。この描像の下では、その発話の状況や話者のもつ意図や目的といった要素はほとんど考慮の対象にならない。もしかすると、それは、記述説が発話の解釈はそこで発せられている文を構成する諸要素の意味からボトムアップ式に決まる、といった見取り図を前提しているかもしれない。しかし、ドネランが議論の過程で指摘しているのは、実際の発話の解釈はそれほど単純ではないということであろう。まずもって、発話がなされている状況があり、話者は様々な意図や目的をもつ

---

突を避ける 1 つの方針として、固有名そのものが前提をもつと考えるのではなく、発話によって前提が生じるという考えを採用することが可能かもしれない。つまり、発話によって何が前提されるかは、その文脈や状況によって異なると考える道筋である。前提が自然言語の語に内在的と考えるか、発話によって生じていると考えるのかは論者によって立場が異なるところではあるが、例えば、マンディー・シモンズは後者の立場の熱心な擁護者の 1 人である (Simons (2001))。もし、後者の立場が正しければ、この学生が前提する事柄は最初の発話とあとの発話で異なるという主張が擁護されるかもしれない。

<sup>64</sup> ドネランにとってかなり微妙な論点となるだろうが、この学生が、ロビンソンがああ有名なアストン・マーティンの足に引っかかった、と伝えることを意図しているといった場合はここでの考察の対象外とする。

<sup>65</sup> 後者のパーティーについての発話において、この学生は有名な哲学者を指示していると解釈するのは、次の事実によっても妨げられるかもしれない。話者はあくまで有名な哲学者を指示していると解釈することは、このパーティーについての発話を偽とみなすことに等しいと思われる。そうすると、話者のパーティーについての発話で「アストン・マーティン」という名前を含む発話は全て偽とみなすことになる。このことは、話者が合理的な主体であるという想定と衝突するだろう。なぜなら、我々はやたらめったら偽なことを言わないからである。

ているのであって、こうした事柄の考慮なしに発話の正しい分析は成し遂げられえない。発話中に含まれる固有名の指示対象が決定するという問題は、発話内容を合理的に設計し、それを解釈するという営みの一部である以上、こうした事柄と独立に考察されてよい事柄ではない。

ここまで敷衍してきたドネランの一連の議論は、彼のそもそもの関心が、行為としての発話がいかに合理的に設計され解釈するかという問題にあったことを裏付けるものであると思う。クリプキのドネラン批判以降、帰属的用法と指示的用法の区別は意味論と語用論のインターフェイスに接触する問題として取り出されることがほとんどであった。その結果、この区別にまつわる論争において、ドネランがなしてきた発話の合理的設計と解釈にまつわる豊かな考察は忘却されてきた。しかし、これまでの私の議論が的を射たものであるならば、帰属的用法と指示的用法の区別を、意味論か語用論かという観点からではなく、むしろ、行為としての発話がいかに合理的に設計され解釈されるのかという観点から再解釈することもまた十分に哲学的意義のあるものであるだろう。

我々の言語活動についてのドネランの注意深い観察は、我々の発話の設計と解釈が単に語や文の意味だけではなく、発話のなされている状況や聞き手、話者のもつ意図や目的といった要素に深く依存しているという事実を教えている。帰属的用法と指示的用法の区別もまた、ドネランが行為として確定記述を伴う発話をつぶさに観察したことの所産であるとみなすことができるだろう。そうであるとすれば、指示的用法だけでなく帰属的用法を伴う発話がいかに合理的に設計され解釈されるのかという問題もまた、中心的ではなかったにせよ、ドネランにとって関心事の 1 つであったはずである。次章では、ドネランのテキストを参照としつつ、この発話の合理的設計と解釈という観点から帰属的用法を捉えなおすことを試みよう。

## 2.3 帰属的用法を伴う発話の合理的設計と解釈

今や、ここまで論じてきた発話の合理的設計と解釈という観点から、確定記述の帰属的用法も捉え直される。この時期のドネランの言語についての洞察は、発話の合理的設計と解釈がいかにしてなされているかという観点を土台としていることを論じてきた。私のこれまでの解釈が筋の通ったものであるならば、ドネランが帰属的用法はラッセルの記述の理論で分析しつくされると考えていたと解釈するのは、むしろ不自然でさえある。なぜなら、記述の理論は発話されている文の論理形式を教えてくれるにすぎず、帰属的用法を伴う発話が、どのような状況であれば適切であり、話者は典型的にどのようなことを意図しているのか、そして、それを解釈する聞き手が何を頼りに合理的な解釈を導出するのかについて何も指針を与えてくれないからである。以下では、まず、帰属的用法を伴う発話の合理的設計と解釈がいかにしてなされるのかをドネランのテキストを基にして明らかにしよう。そして、ドネランにとって、帰属的用法の誤記述の事例が認められるのは極めて自然な事柄であると結論づけることで、本章を締めくくろう。

まず、帰属的用法を伴う発話の設計に焦点を当て、極めて自明なことから言及したい。友人のスミスが極めて快活に明るく振舞っているところで、特定の人物を指示しようと意図しているわけもなく、「スミスの殺害者は正気ではない」と発話したとしよう。このとき、我々はこの話者の発した語および文を同定することはできるだろうが、この発話を合理的なものともみなすことができるだろうか。話者が本当に誰であれスミスの殺害者について語ろうという意図をもって発話をしていると考えることができるだろうか。もちろん、この話者が何か深刻な思い違いから、実はスミスが

殺されたと信じており、目の前で元気そうにしているスミスは実は殺されており、目の前にいる人物をスミスではない他の人物と思い込んでいるという場面は想像できなくはないが、それは極めて特殊な状況だろう。当然のことかもしれないが、ある発話が合理的なものであるためには適切な文脈や状況を必要とする。これは帰属的用法を伴う発話も例外ではない。

では、帰属的用法が適切に用いられる状況や文脈とはどのようなものだろうか。ドネランは「スミスの殺害者」の帰属的用法の例を、「我々が無残に殺害されたスミスに目にとると想定しよう。殺害の残忍な手口とスミスが世界で最も愛すべき人物であったという事実から [...] <sup>66</sup>」と述べることで切り出している。あるいは、「マティーニを飲んでいる人は誰ですか」という文の「マティーニを飲んでいる人」という記述の帰属的用法の例では、

[指示的用法を] 地方禁酒主義連盟の議長によって [「マティーニを飲んでいる人は誰ですか」という] 同じ質問がなされる場合と比較しよう。彼はたった今、この年次総会でマティーニを飲んでいる人物がいると知らされたところである。 [...] (Donnellan, 1966, p. 287, 邦訳 100 頁)

と述べることで切り出している。いずれの場合においても、「スミスの殺害者」や「マティーニを飲んでいる人」という記述を満たす人物が存在しうると想定され、聞き手もまたそのことを共有できるような状況である<sup>67</sup>。つまり、確定記述の帰属的用法を伴う発話が適切になされるためには、その記述を満たす対象の存在が話者と聞き手が共有可能でなければならない。これを「対象存在の共有可能性」と呼ぼう<sup>68</sup>。

次の3つの点に留意されたい。1つ目は、発話より前の時点で、実際に一意にFを満たす対象が存在していることを話者と聞き手が共有している必要はない。例えば、マティーニを飲んでいる人物がいるという情報を仕入れた議長が、信頼できる部下に対して「マティーニを飲んでいるやつを連れてこい (Bring me the man drinking a martini)」と命令したとする<sup>69</sup>。聞き手はこの命令が発せられるより前の時点でマティーニを飲んでいる人物が会場にいることに関して何の予断をもっていないとしても、この命令自体は適切なものでありうるだろう。なぜなら、聞き手である部下はこの発話を介して、会場にマティーニを飲んでいる人物がいるかもしれないということを議長と共有できるからである<sup>70</sup>。2つ目に、“The F”という記述の創出は、スミスの遺体やマティーニを飲んでいる人

<sup>66</sup> Donnellan (1966), p. 295, 邦訳 97-98 頁

<sup>67</sup> フィクションであることが自明であるような文脈でなされる帰属的用法を伴う発話はここでは考えない。

<sup>68</sup> ここで私が述べていることは、言語学の用語で言えば、確定記述がもつ前提、つまり“The F is G”という発話のうち“The F”という記述に適合する対象の一意存在が充足されていることとほとんど等価である。私がここで「前提」という用語を用いていないのは、誤記述の事例を考慮してのことである。一般的な見方からすれば、確定記述の前提が満たされていないとき、その発話は真理値をもたないか、あるいは文脈によっては偽とみなされる (Lesersohn (1991), von Fintel (2004) を参照)。しかし、ドネランやルドロウとシーガルが指摘したように、帰属的に用いられた“The F”という記述を満たす対象が2つ以上存在するか、1つも存在しなくても、“The F is G”という発話が真なものとみなされる場合がある。

<sup>69</sup> これは命令文だが、ドネランが述べたとおり、帰属的用法も指示的用法も叙法横断的である。この発話の「マティーニを飲んでいる人物」という記述は帰属的に用いられていると考えて差し支えないだろう。

<sup>70</sup> このような現象は、Lewis (1979) が提起した「組み入れ (accommodation)」という現象の1つと言えるだろう。ルイスは次のように組み入れの規則を定式化している。

ある時点  $t$  で前提  $P$  が受け入れ可能であることを要求するようなことが言われ、なおかつ  $t$  の直前で  $P$  が前提されていない場合、一変更すべきところは変更し、なおかつ一定の限度内で  $t$  の時点で  $P$  は成立する。

物がいるという噂のように、外的な状況に必ずしも依拠している必要はない。純粹にその記述内容だけから、その記述に適合する対象が一意に存在するという想定が容易に受け入れ可能な場合もある。例えば、以下で引用する例でもあるが、「世界で最も屈強な人は、少なくとも 450 ポンドは持ち上げられる (The strongest man in the world can lift at least 450 lbs)」という帰属的用法を伴う発話を考えてみればよい。ここで「世界で最も屈強な人」に適合する対象が存在することは、純粹にこの記述内容だけから受け入れられるものだろう<sup>71</sup>。3 つ目に、実際に“F”を満たす対象が存在している必要はない。スミスは殺されたわけではなかったかもしれないし、マティーニを飲んでいる人物がいるというのは誤った情報であるかもしれない。また、2100 年まで全人類（あるいは地球上の全生物）が絶滅して、「22 世紀に最初に生まれる子ども」という記述に適合する対象が結局のところ存在しないかもしれない。にしかし、そのことが原因で、「スミスの殺害者は正気ではない」という主張や、「マティーニを飲んでいる人は誰ですか」という質問が、その発話の時点で不適切なものであったということにはならないだろう。帰属的用法を伴う“The F is G”が適切であるには、スミスの無残な遺体やマティーニを飲んでいる人物がいるという情報といった、記述を満たす対象が存在すると想定するのがもっともと言えるような外的状況ないし、記述内容を必要とするだけである。

対象存在の共有可能性は、話者の確定記述の選択に制約を加えているが、これが満たされていれば、帰属的用法を伴う発話行為が何であれ適切なものとなるわけではない。話を単純化するために、質問文や疑問文はいったん脇において、主張文だけを考えよう<sup>72</sup>。スミスの無残な遺体を目の前にして、「スミスの殺害者は正気ではない」という発話がなされた場合、この発話は完全に適切なものとみなせるであろうが、そう発話する代わりに、例えば、「スミスの殺害者はハゲである (Smith’s murderer is bald)」と話者が発話したらどうであろうか。直観的に言って、非常に奇妙な発話に聞こえるのではないだろうか。このような直観がはたらく背後には、例えば、今しがた愛すべきスミスが殺されたのを発見したという状況におかれているのだから、彼の死を悼むべきであるとか、その殺害犯がハゲであったかどうかは極めて取るに足らない事柄であるといった様々な理由があるだろう。なかでも、私はこの直観の背後にあると思われる理由の 1 つとして、「スミスの殺害者はハゲである」という主張が根拠を欠いているという点を追究したい。主張をするという言語行為の中心的な目的は真なことを述べることにある。そして、我々が真なことを述べようとする際、通常我々はその根拠を提示する用意がある。「スミスの殺害者」の指示的用法の例を思い出してみればよい。話者は「スミスの殺害者」という記述を介して、法廷で奇妙な振る舞いをしているジョーンズを指示し、彼に正気のなさを帰属している。この主張がなぜ真となるのかを問われれば、話者はまさにジョーンズの常軌を逸した振る舞いを引き合いに出せばよからう。真なことを述べると

---

(Lewis, 1979, p. 340.)

目下の例でいえば、議長の発話はマティーニを飲んでいる人物が存在することを受け入れるよう要求すると思われる。聞き手にとって、議長の発話の前までこの前提を受け入れてはいなかったのだが、議長の発話を介してあたかも発話の時点で既に満たされていたかのようにして、マティーニを飲んでいる人物が存在するという前提を組み入れるのである。もちろん、部下がこの命令を訝しく思うこともありうるだろう。これは、ルイスが述べている通り、組み入れには一定の限度があるからである。この場合、部下はマティーニを飲んでいる人物が本当にいるのかどうかを議長に問いただせばよいし、議長はそれが確かな情報であるということをもって部下を説得すればよい。

<sup>71</sup> これは Kaplan (2012) が「盲目的記述 (blind descriptions)」と呼ぶ記述である。他にも、「最も背の低いスパイ (the shortest spy)」や「22 世紀に最初に生まれる子ども (the first born child in the twenty-second century)」などがあるだろう。

<sup>72</sup> あらかじめ注意しておく、以下の考察は確定記述にかかわらず、主張文の発話が適切なものとみなされるために必要とされること全般に関する事柄だと思われる。

いう主張の目的を果たすために、その主張を支持する適切な根拠を必要とするのは、帰属的用法とて例外ではない。スミスの遺体を目の前にして、「スミスの殺害者は正気ではない」と発話し、その主張の根拠は何かと問われれば、我々はその残忍な殺害方法や、彼のような愛すべき人物を失った悲しみ訴えればよからう。一方で、どう見繕っても、今しがたスミスの遺体を発見したという状況において、彼の殺害者がハゲであるという根拠を提供できるとは思われない。もちろん、この帰属的用法を伴う発話が適切なものなりうる状況もある。殺人事件の捜査が進み、殺害者が 50 代であることがわかり、DNA 鑑定の結果から 50 代以降になったらこの人は髪の毛を失っている可能性が極めて高いと判明したとしよう。このような状況で、事件の捜査官が「スミスの殺害者はハゲである」と主張したとすれば、この発話は適切に思われる<sup>73</sup>。もちろん、最終的に逮捕された犯人が髪の毛がふさふさであれば、この主張は偽なものと見なされるだろう。ただし、それは真なことを述べるという言語行為の目的が達成されなかったというだけであり、「スミスの殺害者はハゲである」という発話そのものが適切ではなかったということにはならない。これはひとえに、この捜査官が、発話の時点での文脈や状況に依存しつつ、適切な根拠を提示できる可能性をもつからである。帰属的用法を伴う発話が適切なものであるためには、発話の時点でその主張の根拠を提示する用意があらねばならない。これを「根拠の提示可能性」と呼ぼう。

指示的用法との対比で注目すべきは、帰属的用法と指示的用法で引き合いに出される根拠の種類が違うという点である。指示的用法を伴う主張の場合、先も言及した通り、その主張の根拠は、法廷でのジョーンズの奇妙な振る舞いといった特定の対象がもつ性質に求められる。これに対して、帰属的用法を伴う主張の場合、その主張の根拠は、ドネランの言葉を借りれば、「一般的な考察 (general considerations)」に求められる。次の帰属的用法の例をみよう。

適切な状況のもとで、私が「世界で最も屈強な人は、少なくとも 450 ポンドは持ち上げられる (The strongest man in the world can lift at least 450 lbs)」と言ったとしよう。私はこう述べた根拠として、誰か特定の人物についてその人が世界で最も屈強な人物であるという信念は何ももたずに、人間の屈強さの下限についての一般的な考察を挙げるかもしれない。

(Donnellan, 1978, p. 30.)

この事例でドネランが述べている通り、「世界で最も屈強な人は、少なくとも 450 ポンドは持ち上げられる」という主張の根拠は、人間の屈強さについての一般的な考察に求められるだろう<sup>74</sup>。主張の根拠が一般的な考察に基づいているという点は帰属的用法の典型的な事例に共通している。例えば、「スミスの殺害者は正気ではない」という主張は、殺害方法に関する一般的な考察をもとに

<sup>73</sup> 3 章で論じるが、スミス殺害事件の捜査が進んだ段階で、「スミスの殺害者」という確定記述が帰属的に用いられるかどうかに関しては議論の余地がある。今は議論の都合上、帰属的に用いられていると仮定する。

<sup>74</sup> ドネランも言及しているが、根拠が一般的な考察に基づいていないような帰属的用法を伴う発話もありうる (Donnellan (1978), p. 30.)。例えば、私は、世界で最も屈強な人物はモハメド・アリであり、彼は 450 ポンド以上のバーベルを持ち上げられると固く信じているとする。私が、モハメド・アリに指示しようという意図は発揮せずに、「世界で最も屈強な人物は少なくとも 450 ポンドは持ち上げられる」と発話した場合、この主張の根拠は一般的な考察というよりも、特定の対象の性質に求められているという方が適切かもしれない。しかしながら、特定の人物が記述を満たすと固く信じていながら、あえてその人物については言及しないという確定記述の用法はあまり典型的な事例だとは言えないと思われる。そのような場合、話者は通常その対象に指示をすると考えられる。本稿ではこういった事例は、ひとまず考察の対象としない。私が以下で展開する議論に直接の影響はないと思われる。

して、正気のなさをスミスの殺害者に帰していると言えるだろう。他にもドネランは次のような例を挙げている。

例えば、もし誰かが、ゴールド・ウォーター氏が 1964 年の共和党候補になるだろうという考えをもつ前に、1960 年に「1964 年の共和党の大統領候補は保守的だろう (The Republican candidate for president in nominee in 1964 will be conservative)」と (党の代表的な人物たちの立場に関する分析を基にするなどして) 述べたとすると [...] (Donnellan, 1966, p.293. 邦訳 110 頁)

もちろん、ドネランはこれを帰属的用法の例として挙げている。ここでの「1964 年の共和党の大統領候補は保守的だろう」という主張は、「党の代表的な人物たちの立場に関する分析」と述べられているように、特定の誰かについての性質というよりも、複数人にまたがる党の代表的な人物や共和党内での政治的力関係に関する一般的な考察その根拠にしている。こうした例をもとにしてドネランが帰属的用法を特徴づけていることから、帰属的用法を伴う主張の根拠は特定の対象の性質ではなく、話者の一般的な考察に基づいていると言えるだろう。これを「根拠の一般性」と呼ぼう<sup>75</sup>。

実際、ドネランは、話者が一般的に考察に基づいて根拠を提示すること (ないし提示できる可能性を帯びていること) は、帰属的用法が帰属的用法として適切に機能するための鍵だと考えているように思われる。次の例をみよう。

[...] ジョーンズが殺人犯として法廷にかけられていて、全員が彼は有罪であると信じているとする。私が、スミスの殺害者は正気ではない、と発言するとしよう。しかし、先に使った例のように彼の被告席での振る舞いを引き合いに出す代わりに、この発言に続けて、誰であれ、あれほどひどく残忍な仕方で亡きスミスを殺害した人物は正気ではないと考える理由を述べたとしよう。もし、ジョーンズではなく他の人物が殺人犯だとわかったとしても、その本当の殺人犯が正気ではなければ、私は自分が正しかったと主張できる。ここで、私は特定の人物がこの記述に適合すると信じているのではあるが、この確定記述を帰属的に用いていたことになると思う。(Donnellan, 1966, p. 290, 邦訳 105 頁)

ドネランは、特定の対象が記述に適合するという話者の信念が、確定記述が帰属的用法と指示的用法のどちらで用いられているかに関して無関係であることを示すためにこの例を使っているが、私がここで強調したいのは、これが帰属的用法の例だという点である。上の状況では、話者と聞き手含め全員が「スミスの殺害者」という記述にジョーンズが適合すると信じている。ここまでは、ドネランがもともと「スミスの殺害者」の指示的用法の例として挙げていた状況と完全に同じであると考えて差し支えない。しかし、その状況が揃っていて同じ文を発話しているからといって、話者がジョーンズを指示しているとは限らない。なぜかといえば、この例では、話者は自らの主張の根

<sup>75</sup> この論点は Over (1985) に負う。彼は数学の哲学においてしばしば問題となる、構成性 (constitutivity) という観点から指示的用法と帰属的用法の区別の理解を試みている。詳細に立ち入ることはしないが、彼は指示的用法に伴う推論や正当化は構成的であるのに対して、帰属的用法に伴うそれは非構成的であると論じている。帰属的用法を伴う発話が適切であるために根拠の一般性が必要とされるという点は、帰属的用法を伴う発話の正当化が非構成的である、というオーヴァーの主張に対応している。

拠を、ジョーンズの奇妙な振る舞いと言った特定の対象についての性質ではなくて、スミスの殺害された方法に関する一般的な考察にもとめているからである。この根拠の一般性は、典型的な帰属的用法の事例において鍵となっていることがわかるだろう。

さて、ここまでは下準備である。帰属的用法において誤記述の事例がいかにして容認されるのかを論じよう。帰属的用法を伴う発話が適切なものとみなされる要素として、対象存在の共有可能性、根拠の提示可能性、根拠の一般性という 3 点を論じてきた。合理的な話者はこの 3 つが満たされるような仕方で、帰属的用法を伴う発話を設計していると考えてよいだろう。私の主張は、この 3 つが満たされているとき、たとえ帰属的に用いられている確定記述に適合する対象が存在しなかったとしても、話者が真なことを述べる可能性が拓かれる、というものである。ここには、指示的用法の誤記述が容認されるのと類似したメカニズムがはたらいっている。

まず、指示的用法の誤記述の事例を今一度詳細に考察しよう。まず、指示という現象一般において、話者と聞き手のあいだに存在する非対称性について言及することから始めたい。話者が言語を介して指示をおこなうとき、言語表現を選択して発話するより前に、先に指示をしたい対象が外の世界に存在している。そして、その対象を聞き手に把握させるために、話者は状況や聞き手との共有知識に応じて適切な言語表現を選択する。お互いがよく知っている人を指示したいのであれば、固有名を使うだろうし、知覚的に到達するのが容易であり文脈的に顕著な対象を指示したいのであれば、直示詞を使うこともあるだろう。ここから明らかなように、指示をおこなう話者は対象から言語表現へという道筋をたどる。これに対して、聞き手に先に与えられるのは言語表現である。聞き手はそれを手掛かりとして、話者が意図している指示対象へと到達しなければならない。固有名が与えられればお互いに知っている人のことを指示していることを察知し、共通の知人の中からその固有名の担い手を指示対象として選び出すだろうし、直示詞が与えられれば知覚的に到達可能でありなおかつ文脈的に顕著となっているような対象を探し出し、それを選び出す。聞き手は、話し手とは反対に、言語表現から対象へという道筋をたどらなければならない。ここにはある種の非対称性が存在する。すなわち、指示という現象において、話者が対象から言語表現へという道筋を辿るのに対して、聞き手は言語表現から対象へという道筋を辿るという非対称性が存在する。

指示の非対称性は、もちろん確定記述の指示的用法においても存在する。指示的用法を伴う“The F is G”という発話を解釈する聞き手は、この非対称性に隠伏的に依拠することで指示対象へと到達することが要請される。2.2節で論じたのは、指示的用法を伴う発話がどのようにして合理的に設計されているかに関するものであったが、解釈する側に話を移そう。この発話を解釈する我々に必要とされるのは、話者が上述したような合理的予測のもとで記述を選択しているということを仮定した上で、言語表現を発するまでに存在する話者の信念や予測を与えられている言語表現から遡求し、意図されている指示対象へと到達することであるだろう。例えば、指示的用法を伴う「スミスの殺害者は正気ではない」という発話を与えられた聞き手が、正しくジョーンズを選び出すにあたり、次のような推論を隠伏的にしているかもしれない。話者は、「スミスの殺害者」という記述を使うことで、意図している指示対象を聞き手が把握できるという合理的な予測を立てているはずである。そして、スミス殺害事件の裁判がおこなわれているという状況で、この予測が合理的なものとなるには、意図された指示対象は被告席にいるジョーンズであると考えるのがもっとも合理的な解釈である。実際、ジョーンズはとても常軌を逸した振る舞いをしている、といった具合に。このように、発話を解釈する聞き手の側は、話者が当該の状況である対象を指示し、その対象について真なことを語ろうという目的があり、その達成ために合理的な予測を立てた上で「スミスの殺害者」という

記述を選択しているということを仮定し、意図された指示対象へと到達していると思われる。ドネランの例から明らかなように、聞き手はこの過程で、必ずしも与えられた記述が適合する対象を探そうとする必要はない。なぜなら、話者が記述を選ぶ基準は、意図している指示対象が適合するかどうかではなく、聞き手がその記述で意図している指示対象を把握できるかどうか、だからである。したがって、その基準で選ばれた記述を介して指示対象を把握しなければならない聞き手も、話者がそのような基準で記述を選択しているという仮定を敷くのが合理的であるだろう。

さて、指示的用法において、聞き手がなぜ誤記述が容認し意図している対象を選び出せるのかといえば、まさに話者が記述を選択する基準が対象との適合にはないからだと思う。つまり、“The F is G” という発話で、“The F” という記述は意図された対象に依拠しつつ、その対象をいかに把握させるかという基準で選ばれているのであるから、その記述が適切な予測のもとで選ばれている限り、“The F” という記述の出元、つまり意図された指示対象へと到達し、発話を合理的に解釈できるのだと考えられる。

帰属的用法に関しても同じような意図の付度、つまり、発話が合理的な設計のもとになされているという仮定に基づいた発話の合理的解釈が生じないと考える理由は何もないように思われる。まず、帰属的用法にも指示の非対称性と同様の非対称性が存在することを指摘しよう。上で論じてきたように、帰属的用法を伴う“The F is G” という発話をなす話者は、“The F” に適合する対象の存在の共有可能性が拓かれていることを前提し、一般的な考察に依拠して発話を設計している。対照的に、聞き手の側は、先に“The F is G” という発話を与えられて、“The F” を満たす対象がいると想定するにたる外的状況や、その主張の根拠となる一般的な考察を特定しなければならない<sup>76</sup>。つまり、話者は外的状況に一般的な考察から言語表現へという道筋を辿るのに対して、聞き手の側は言語表現から外的状況と一般的な考察へという道筋を辿る<sup>77</sup>。

ドネランがなぜ、帰属的用法においても誤記述の事例がありうると考えたのかを明らかにしよう。本章冒頭で挙げた Donnellan (1968) の帰属的用法の誤記述の例を今一度思い出そう。

私の論文の帰属的用法の 1 つの例は、友人であるスミスの遺体を発見した人が「スミスの被害者は正気ではない」と叫ぶというものである。この例において、この話者はスミスの被害者として特定の人物を念頭においているわけではない。そして、私は、仮にスミスが殺されていなかったとしたらその帰結はどうなるかと問い、この話者は真であることを述べ損なうだろうとの考えを述べた。しかし、スミスは自然死だったのだが、実際のところ彼は死ぬ前に暴行を受けていて、この話者が「スミスの被害者」に正気のなさを帰属させた証拠が、依然として彼に危害を加えた人物が正気ではないことの十分な証拠であると想定しよう、ある意味で、話者は「ニアミス」を犯している。我々はこの話者が真なことを述べていなかったと断言する用意があるのか？ (Donnellan, 1968, p. 209.)

指示的用法の場合がそうであったように、帰属的用法を伴う“The F is G” という発話を与えられた聞き手は、この発話が合理的な設計のもとになされていること、つまり、対象存在の共有可能性、

<sup>76</sup> このことは、元気に振る舞うスミスを前にして、「スミスの被害者は正気ではない」という発話がなされた場合に、この発話を合理的に解釈できないことを説明するだろう。聞き手は、「スミスの被害者」という記述に適合する対象が存在すると言えるような外的状況を特定できないゆえに、この発話を合理的なものとみなせないのである。

<sup>77</sup> もちろん、話者が盲目的記述を使う場合は、純粋に記述内容だけからその記述を満たす対象が存在することは自明であるので、外的状況を考慮する必要はほとんどないだろう。

根拠の提示可能性、根拠の一般性という 3 要件が満たされていることを仮定する。話者はスミスが殺されたという誤信念を抱いてはいるものの、アストン・マーティンの例で論じた通り、話者が誤信念を抱いていることそれ自体は、帰属的用法を伴う発話の設計そのものの合理性を傷つけるものではない。この合理的な発話の設計がなされているという仮定のもとで聞き手は、「スミスの殺害者」という記述に適合する対象が存在すると言えるにたる外的状況や、「スミスの殺害者は正気ではない」という主張全体の根拠へと到達することが要請されるだろうし、上述の状況でそれは可能であるだろう。「スミスの殺害者」という記述は、傷跡のあるスミスの遺体に依拠しており、その傷の深刻に基づいた一般的な考察から、この主張がなされていることは容易に判断できるだろう。ドネランは、指示的用法において、話者の合理的な発話設計に裏打ちのもとで記述の出元の対象が明らかになれば、話者が意図していないような誤記述があったとしても容認されると考えた。それと同様に、帰属的用法においても話者の記述の出元が明らかであり、その主張全体の根拠が明らかとなき、誤記述が容認されると考えたのではないだろうか。話者はスミスの遺体の様子を、スミスの殺害者が正気ではないことの根拠として引き合いに出してはいるが、これはいずれにせよスミスに危害を加えた人物が正気ではないことの十分な根拠として機能する。話者はそれを知らずとも、スミスが殺されたのではなく、心筋梗塞で亡くなる前に危害を加えられただけと知っている我々は、主張という言語行為に込められた真なことを語るという目的に適う仕方で話者の発話を合理的に解釈できるとドネランは考えたのではないだろうか<sup>78</sup>。すなわち、スミスの遺体とその無残な様子という記述の出元および主張全体の根拠を介することで、いずれにせよ話者はスミスにこれだけの傷を残した人物に関して、正気のなさを帰属させているという真な主張をおこなっているのである、と。こ

ここまでの私の議論が的を射たものであるならば、帰属的用法がラッセルの記述の理論によって説明し尽くされるという哲学者たちの暗黙の前提は、ドネラン解釈として不適切であるだろう。私はこれまで、発話の合理的設計と解釈という観点から、1960年代から70年代のドネランの言語についての洞察を解釈し直してきた。ラッセルの記述の理論は、発話されている文の論理形式を明らかにしてくれるだけで、発話の状況や話者の意図等については何も教えてくれない。しかし、ドネランが指示的用法や固有名を伴う発話は、状況や意図、目的、信念等々に依拠した様々な推論が付随していることを描いていたことを鑑みると、帰属的用法を伴う発話もまた同様の推論が伴われていると考えることはもっともだと思われる。私は、そこから帰属的用法は指示的用法ないし指示という現象といくつかの共有する構造が共有されていることを論じてきた。指示的用法において、言語表現を手掛かりに話者の意図する指示対象へと到達できるように、帰属的用法においても、言語表現を介することで、その記述や発話全体の出元になっている世界の状態へと到達することができる。その過程で、我々は発話の状況や話者の意図や信念を加味しながら、その発話を解釈するための推論をおこなう。たとえ話者がなにがしかの誤りを犯していたとしても、その発話自体が合理的に設計されていることに依拠し、話者の発話の目的に適う仕方で話者の誤記述も修正されうるのである。帰属的用法においても誤記述の事例が認められることは何ら不可解なことではないだろう。むしろ、これまで論じてきた彼の言語観を鑑みれば、当然の事柄であるとさえ言えるだろう。

この章の締めくくりとして、次のことに言及しておこう。興味深いのは、アストン・マーティンの例もそうだったが、帰属的用法の誤記述の事例で合理的に解釈された内容は、話者が発話の時点

<sup>78</sup> 発話の目的に合わせて発話を合理的に解釈できるという直観は、アストン・マーティンの例で、発話の要点に合わせて指示対象の変化を認める直観と重なるものがある。

で意図している内容ではないということである。話者の意図は明らかに、「スミスの殺害者」に正気のなさを帰すことである。ドネランは、発話を 1 つの意図的・合理的な行為としてみなしたとき、発話の合理的な解釈が、必ずしも話者が発話の時点で意識的な内容による制約を受けないことをよくよく見抜いていたと思われる。コータとペリーがこの点を適切に論じている。

我々が発話を生成する際、そのプロセスは自動的であることがよくあるように思われ、ゆえに我々がそれを聞いて解釈するときも同様である。これは行為の哲学においては一般的な現象である。我々は複雑な行為と行動を合理的で目的をもった行為として、すなわち、目的を追い求め、信念に可感的な事柄として理解したいのである。ここでの推論は常に、当該の主体が意識して明示的に定式化するようなものではないし、いわんやほとんどの場合そうではない。それにもかかわらず、こうした推論は、我々が行為を分析し、なぜそのように我々が物事をおこなったのかを我々自身、あるいは他者に問いかけるとき、事後的に到達可能になることがよくある。実際、信念や目的、推論がもつその他諸性質の帰属は、当該の主体が行為を展開しているときにこうした諸要素に意識的に気がついていたという条件による制約を受けはしない。(Korta and Perry, 2011, p. 11.)

ここまで論じてきたドネランの洞察を踏まえれば、彼がここでコータとペリーが指摘している点をよくよく承知していたのは明らかであるだろう。話者は発話の状況や聞き手との共有知識、発話の目的にとって適切な言語表現を選択しようとするし、聞き手もそれを察知して、話者の意図や目的、信念等を加味しながら様々な推論に依拠して、発話を解釈している。コータとペリーが指摘するように、このプロセスはほとんど無意識的である。それでも、行為として発話の設計と解釈のプロセスを真摯に見直すとき、状況や、意図、目的、信念に合わせた様々な推論が現にはたらいいており、我々の発話の設計と解釈を支えている。ドネランのこの基本的な態度は、意味論と語用論という枠組みではなく、発話の合理的設計と解釈という観点からドネランの哲学を解釈することが、より彼に忠実であり、より哲学的に実り豊かであることを示唆するものかもしれない。

## 従来のドネラン解釈との比較

本章の目的は、私が前章で提示したドネラン解釈を踏まえつつ、近年盛んになっているドネランの哲学の再解釈<sup>79</sup>の潮流を批判的に検討することである。とりわけ私が焦点を当てるのは、近年何人かの論者によって言及されている証拠事例（Evidence Cases）である。この事例は、本来の確定記述の帰属的用法と指示的用法の区別に従えば、帰属的用法に分類される。しかし、荒磯やカプラン、アルモグは、ドネランが提示した指示概念を拡張し、この事例を指示的用法の一例として一般化することを試みている。特にカプランとアルモグは、ドネランの念頭におく（*have in mind*）という概念を拡張できることをその論拠としている。しかし、私が思うに、証拠事例を典型的な指示的用法の事例と同一視できるかはそれほど自明な事柄ではない。ドネランのテキストをつぶさに読み解くと誰であるかを知る（*knowing who*）という概念、あるいはそれとほとんど同一視できる概念が、指示的用法を指示的用法たらしめていることが明らかになるだろう。このことは証拠事例を指示的用法の一例とみなすことへの決定的な反論とはならないかもしれないが、ドネランの本来の特徴づけ通り、証拠事例をあくまで帰属的用法の一例としてみなす動機付けとしては十分である。私は、指示的用法と帰属的用法においてなぜ誤記述が生じるのかを分析することで、出来事に依拠した帰属的用法という概念を抽出する。そして、証拠事例はこの帰属的用法の一例として解釈できる可能性を示唆したいと思う。

本章は次のような構成となる。3.1節では、証拠事例がどのような事例であるかを紹介し、なぜこの事例が帰属的用法ではなく、指示的用法へと分類されうるのかをみる。とりわけ、念頭におくという概念がドネランが当初考えていたよりも拡張できるとするカプランとアルモグによる議論を敷衍する。3.2節では、証拠事例を指示的用法の一例としてみなすことが妥当かどうかを批判的に検討し、あくまで帰属的用法の一例として考えることができる可能性を示唆する。まず、3.2.1節では、今一度、ドネランのテキストをつぶさに検討し、指示的用法の典型例において共有されている特徴を明らかにする。その特徴は、話者は何らかの意味で、指示対象が誰（何）であるのかを知っていなければならない、というものである。私は、証拠事例においてこの特徴が共有されているとは言い難いと主張する。3.2.2節では、証拠事例を帰属的用法の一例として一般化するための議論を提示する。そのために、指示的用法と証拠事例において誤記述が生じる要因が異なることを指摘する。そこから、証拠事例でも指示的用法でもない典型的な帰属的用法における誤記述の事例を検討することで、「出来事に依拠した帰属的用法」と言い表せる確定記述の帰属的用法を抽出する。そして、証拠事例はこの一例として、つまり、帰属的用法の一例として一般化できると論じる。

### 3.1 証拠事例

近年、私がこれまで展開してきたドネラン解釈とはやや異なる角度からではあるが、彼の哲学を再評価する向きがある。代表的なものは荒磯 (2005), Kaplan (2012), Almog (2014)らである。彼らのそ

<sup>79</sup> Bianchi and Bonanini (2014) はこれを「ドネラン・ルネサンス (Donnellan Renaissance)」と呼んでいる。

それぞれのアプローチの仕方はやや異なっているものの、根底にある動機は共通している。それは、ドネランの提示した指示的用法という概念を拡張することである。

すぐに明らかになることであるが、彼らが焦点を当てるのはまさに私が前章で議論した、帰属的用法の事例の一部である。荒磯は「痕跡を通した指示」、カプランは「証拠事例 (evidence cases)」と呼ぶ<sup>80</sup>。本稿では、カプランに従って「証拠事例」と呼ぶことにしよう。私は、これまで証拠事例は帰属的用法の一例としてドネランの言語観の中に収まるものであることを論じてきた。しかし、彼らによれば、証拠事例とは、「「指示と確定記述」での特徴づけに従えば確定記述の帰属的用法であると考えられるかもしれないものの [...] むしろ指示的用法に分類すべきと考えられる<sup>81</sup>」事例であるという。本節では、彼らがドネランの指示概念を拡張することで、証拠事例を帰属的用法ではなく、むしろ指示的用法の一例とみなしうると主張する論拠をみていくこととしよう。

彼らが証拠事例として挙げるのは例えば次のような例である<sup>82</sup>。

“The man who slapped Bob has a temper” (「ボブをひっぱたたいたやつは癪癪持ちだ」)

発話の状況: 話し手と聞き手は、頬を真っ赤にはらしたボブを目の前にしている。ただし、実際にはボブはひっぱたかれたのではなく、ハイキックを受けたことで頬をはらしたのである。そしてその犯人は、ベティである。(荒磯, 2005, 53 頁)

この例を本稿では「ベティの例」と呼ぼう。荒磯もカプランも認めている通り、ドネランはこのような例を典型的な帰属的用法の例と考えている<sup>83</sup>。換言すれば、指示的用法の例とは考えていない。ドネランがそのように考えていた理由は、彼は指示的用法の典型例として、話者が意図している指示対象と直接的な知覚関係にあるような事例を考えていたからだと思われる。ラッセルの用語を借りれば、話者が指示対象に見知り (acquaintance) をもっているような事例である。スミスの殺害者の指示的用法の例であれば、話者は法廷の被告席にいるジョーンズを、マティーニの例であれば、パーティー会場にいる目立った格好でマティーニグラスを持っている人物を直接知覚している。そして、指示的用法とは、話者が直接的な知覚を介して、当該の対象を念頭におき (have in mind)、確定記述を介してその対象を聞き手に把握させるような記述の用法であった<sup>84</sup>。

このことを鑑みると、上の事例を含め、典型的な帰属的用法の例が指示的用法の例とはみなされないのは当然のことである。いかなる意味においても、話者はベティを直接的に知覚しているとは言えない。ベティの例は紛れもない帰属的用法の例である。しかし、注目すべきは、これが誤記述の事例であるということだろう。「ボブをひっぱたたいたやつ」という確定記述に適合する対象は存在しない。そして、1966 年の時点でドネランは確かに、帰属的用法において記述に当てはまる対象

<sup>80</sup> あらかじめ断っておくと、Kaplan (2012) は、以下で論じる証拠事例を指示的用法の一例として考える余地があると主張しているだけで、私の理解する限り、これが実際に指示的用法の一例であるかどうかに関しては中立的な立場をとっている。この点は荒磯 (2005) と Almog (2014) とは対照的である。

<sup>81</sup> 荒磯 (2005), 53 頁

<sup>82</sup> 荒磯とカプランが挙げる例は異なっているが、Kaplan (2012) で議論されている事例はやや複雑であり、両者に本質的な違いはないので、本稿では荒磯 (2005) の例を使って議論を進める。

<sup>83</sup> 荒磯 (2005), 53 頁, Kaplan (2012), p. 143.

<sup>84</sup> Kaplan (2012) の注 18 でも言及されているが、例外としてドネランの王の篡奪者の例が挙げられる (Donnellan, 1966, pp. 291-292, 邦訳 106 頁)。この例では、話者は発話の時点で意図している指示対象を直接的に知覚しているわけではない。カプランは、この例を話者の短期記憶が要求される例として言及している。私が思うに、この例は話者がこの篡奪者と見知りをもっていなくても指示的用法の例として成り立ちうる。

が存在しないとき、話者は何であれ真なことを述べることに失敗すると考えていた<sup>85</sup>。しかし、荒磯やカプラン、アルモグによれば、証拠事例は指示的用法の一例とみなすことは十分可能であり、話者はベティを指示しており、彼女について（彼女が実際に癩癩もちであれば）真なことを語っているという。

では、荒磯やカプラン、アルモグが、これを指示的用法に分類できると考える論拠は何であろうか。彼らが共通して着目するのは、ある対象が因果的に引き起こしたと想定される証拠ないし痕跡である。上の事例で言えば、ボブの赤くはれた頬である。彼らによれば、話者は指示対象とは直接的な見知りをもっておらずとも、ある対象が因果的に引き起こした事物を知覚することで、その対象と特別な関係に立つことができる。話者と因果的な証拠との間に結ばれる特別な関係こそが、証拠事例を指示的用法たらしめるものであるという。荒磯とカプラン、アルモグが同じ結論へと至る道筋にはやや相違はあるものの、上述した、話者と因果的な証拠との関係に着目するという点で共通している。以下では、カプランとアルモグの議論を敷衍していく<sup>86</sup>。

カプランとアルモグは、ドネランの念頭におくという概念に焦点を当てる。上述した通り、ドネランは指示的用法を、話者が「誰を念頭においているかを聞き手が認識することを意図し、预期して<sup>87</sup>」確定記述を用いる用法として特徴づけている。実際、言語哲学の歴史上、ある対象を念頭におくという概念はドネランの哲学の代名詞として理解されてきている<sup>88</sup>。話者が確定記述を指示的に用いているとはどういうことかと言えば、話者がある対象を念頭においているということである。ある対象を念頭におくという話者の認知的状態こそが指示的用法ないし、指示一般に関してその基盤を提供すると目されてきた。このことから自然な帰結だと考えられるが、話者が確定記述を指示的に用いているかどうか、という問いは、話者がある対象を念頭においているかどうか、という問いへとすり替わることになる。そして、上述した通り、ドネランが提示している指示的用法の例から抽象する限り、我々が念頭におくことのできる対象は直接的に知覚している対象に限られるように思われる。

しかし、カプランとアルモグは、我々が念頭におくことのできる対象は、直接的な見知りだけに限られないと主張する。カプランの次の一節を参照しよう。

証拠事例 (*evidence cases*) を「念頭におくことの」最初のステップとして認める人もいだろう。個体の因果的起因の結果—足跡そして壊された鍵—を調査することで、我々はある個体の存在を仮説として想定する。我々はその個体が残した因果的な残余物から少しずつ心像を組み上げていくかのようにして、その個体を心に留めておく。ここで、我々は因果的結果に対して、純粋なラッセル的見知りをもつ。その結果に対して、我々はある原因を仮定する。

<sup>85</sup> Donnellan (1966), pp. 291-292, 邦訳 107 頁

<sup>86</sup> 私が理解する限り、荒磯の議論は以下で論じる念頭におくという概念の拡張を暗黙のうちに受け入れていると思われる。彼はベティの例を指示的用法の例として一般化できるとする議論の過程で、「話し手にとって、自分の意図した対象（荒磯, 2005, 57 頁）」という概念を援用している。このように言うためには、話者が発話するより前に、何らかの仕方でベティに対する意図をもっていなければならないと思われる。そして、その意図の発揮するためには、念頭におくという認知的状態のような、ベティに関する心的な像のようなものを話者がすでに獲得していることを前提するように思われる。

<sup>87</sup> Donnellan (1966), p. 285, 邦訳 98 頁

<sup>88</sup> このことは、2012 年に出版されたドネランに対するアンソロジーのタイトルが、*Having in Mind: The Philosophy of Keith Donnellan* であることから明らかである。実際、Donnellan (1978) の中で、「念頭におく (have in mind)」という用語は多用されている。

我々はその原因を直接見知っていることは要求されない<sup>89</sup>。我々は結果を念頭におき、ある種の因果的起源を（正しく）指定する必要があるだけである。この過程には、推論と真理を受け入れが明らかに含まれている。この基準はルヴェリエの海王星に対する関係を包含する。著者に対する読者の関係も含むだろう。（Kaplan, 2012, p. 143.）

ここでのカプランの提案は、ある対象が因果的に残した痕跡や証拠から、我々はその対象を念頭におくことができる、というものである。この提案に一定のもっともらしさがあるのは確かである。上のベティの例で言えば、我々はボブの真っ赤にはれた頬という因果的な証拠から、ボブの頬を真っ赤にはらした人物がいることをいわば直覚し、その原因となっている人物の存在を仮定するだろう。カプランのここでの提案によれば、まさにこれは、ドネランが指示の基盤とみなした、ある対象を念頭におくという認知的状態を獲得することに他ならない。我々は、直接的な知覚だけではなく、因果的な証拠や痕跡を介することで、その対象を指示するための認知的基盤を獲得できるという。

アルモグはここでいう証拠や痕跡は多岐に渡ることを指摘している。

[...] 我々は、自然な非規約的なプロセスによって、原因となっている対象を心の中に留めさせるような対象基盤的信号を受信することがある。その信号によって私は、その対象を見たり、思い出したり、その対象について考えさせられたり、想像させられたりすることがある。受信する仕方は数多くあるが、その全てが対象と関わっている。もしかしたら、私がその対象を直接見ることや、鏡越しに見ていること、あるいは対象が生じさせた一連の光が私に到達していることかもしれない（その対象は、遙か昔に消えた星かもしれない）。あなたが対象の写真を見せてくれることや、私が対象からメールないしラジオの音の振動を受け取ることかもしれない。私が未知の星によって引き起こされた別の対象の軌道の摂動を見て、このことがその摂動を引き起こしている対象が私の心にやってくる仕方かもしれない。私が、それ一つまり、対象一が柔らかな火山灰の中に 6500 万年前に残した足跡を見ることかもしれない。私が対象の名前を受け取ることかもしれない—例えば、「アリストテレス」という名前があるが、この名前自体は本来のギリシャ語の名前ではなく、変形や外国語への字訳、あるいは書き写しの際の誤りがあるかたちである。私が、それ自体述語としてはアリストテレスに関して誤っているのだけれども、アリストテレスを起源とする指示的な確定記述を受け取ることかもしれない。私が述べた通り、数え切れない仕方で、対象は私の心に一歴史を通じて—影響を与えにやって来うる。（Almog, 2014, p. 68.）

アルモグの主張が正しければ、念頭におくという概念はドネランが当初思い描いていたと思われる範囲よりも、かなり広範な事例に適用されることになる。写真や絵、惑星の摂動、足跡あるいは噂など、様々な因果的あるいは広く歴史的な関係を通じて、我々はその起源や原因となっている対象を念頭におくことができることになるだろう。

---

<sup>89</sup> 原文は、"It is not required that we be directly acquainted with the effects" となっているが、これでは話の辻褄が合わない。おそらく "effects" は "causes" の誤植だと思われるため、訳文はこれに合わせてある。次文の "them" の訳語もこれに合わせてある。

以下の議論にとって重要であるため、直接的知覚以外の経路からある対象を念頭におくという認知的状態をいかに獲得されるかに関して、カプランによって指摘されている 2 つの区別可能な問題があることを心に留めておこう。1 つは念頭におくという認知的状態がいかに始まるかという問題、もう 1 つはいかにそれが人から人へと受け渡されるかという問題である<sup>90</sup>。Kaplan (2012) の中で述べられているが、ドネランはある対象を念頭におくという我々の認知的状態が、談話を通じ人から人へと受け渡されるものであることを認めていた<sup>91</sup>。本稿では、ドネランのこの所見に詳細に立ち入ることはしない。目下、私が「証拠事例」という語で言及するのは前者にだけにのみ関わる事例である。つまり、ある対象が因果的に残したと推定される証拠や痕跡から、我々はその対象を念頭におくという認知的状態を獲得できるのかどうか、その対象についてのある種の心的な像を構築することができるのかどうかという点のみを議論の対象にしよう。アルモグは明らかにそれが可能であると主張しているし、カプランもその可能性を認めている。

また、証拠や痕跡という概念でどの程度のものを指すのかも考慮しなければならない。本稿では、本来、帰属的用法として分類されていた典型例にみられる程度に、つまり、スミスの遺体やベティの真っ赤な頬といった範囲に、証拠事例をひとまずは限定する。というのも、例えば、直接的知覚ではないにせよ、ある人物についての絵や写真は、その人物を直接知覚するのと同程度の認知的インパクトがあると思われる。またメールや手紙を受け取ることも、その送り主に直接会ったことがなくとも、その送り主と何らかの特別な関係に立つことを可能にさせるかもしれない。ドネランはこうした事例は考えておらず、彼が念頭におくという概念でどの程度の範囲までのことを考えていたのかも定かではない。いずれにせよ、以下では、荒磯やカプラン、アルモグが本来の帰属的用法を指示的用法に組み入れようとしているという点のみを争点とする。

さて、このようにして念頭におくという概念を拡張することで、今や上のベティの例も指示的用法の誤記述の例の一例として説明可能である。指示的用法の典型例において誤記述が許容されるの

---

<sup>90</sup> カプランは念頭におくという認知的状態の創始の問題 (*initiation of having in mind*) と伝達と問題 (*transmission of having in mind*) とを適切に分離している。カプランがそうしているように、この 2 つの問題は独立に論じることが可能であると思う。カプランは後者の問題に焦点を当てているが、本稿で焦点を当てるのは前者の問題である。

<sup>91</sup> Kaplan (2012) の次の一節を参照。

ドネランはかつて私に次のように言った。「アリストテレス」という名前は中世に研究者たちによって初めて導入された名前であり、彼らはそれまではアリストテレスについて書いたり話したりするために、確定記述しか使っていなかった、と。ドネランによれば、この研究者たちは、アリストテレスを十分に念頭におくことができただろうし、会話の中で、確定記述の指示的用法やその他の手段を介することで、人から人へと、アリストテレスを念頭においている (*having Aristotle in mind*)、という認知的状態を人から人へと受け渡していただろうという。したがって、研究者たちは、認知的観点からみて、固有名を導入できるだけ適切な状態にあっただろうし、その名前は指示的に、つまり真の固有名として、後の使用者たちが使うことのできるものであっただろうという。(Kaplan, 2012, p. 142.)

カプランが述べている通り、ドネランはこの会話で示されているアイディアを、彼の出版物に具体的に残すことはしていない。しかし、このドネランの初見は彼の出版物にある他の主張とも整合する。まず、彼が我々の指示全般に関してその我々の念頭におくという認知的状態がその基盤を提供すると考えていたことは事実である。そして、Donnellan (1974) で展開された歴史的説明説によれば、話者が固有名で何を指示しているのかは、その固有名の使用を歴史的に遡っていたときに、その歴史的つながりの末端にいる対象であると主張している。この 2 つのドネランの考えと、念頭におくという認知的状態の受け渡しという考えはうまく整合するように思われる。すなわち、指示対象と話者とを結ぶ歴史的なつながりを、その対象を念頭におくという認知的状態の受け渡しの経路として解釈することができるかもしれない。本稿では詳細を議論する余裕はないが、この線からドネランの歴史的説明説を解釈しているものとして、Bonanini (2016) を挙げておく。

は、まさに話者がある特定の対象を念頭におき、その対象を把握させようという意図のもとで発話をおこなっているからであった。ベティの例においても、カプランやアルモグによれば、話者はベティの残したボブの真っ赤な頬から、その原因となっている対象を念頭におくことができる。話者の用いている記述に適合する対象は存在しないものの、まさにこの話者の認知的状態によって、話者はベティを指示し彼女についての発話をなしているものとみなすことが可能であるという。

ここまでの議論からほとんど明らかであるかもしれないが、このようにして念頭におくという概念を拡張すると、ドネランが本来帰属的用法と考えていた事例の多くは指示的用法の事例として分類されることになる。前章で私が議論を費やした **Donnellan (1968)** で言及されていた帰属的用法の誤記述の事例も例外ではない。カプランとアルモグによれば、この事例はむしろ次のように説明されるだろう。スミスの無残な遺体もまた、それを因果的に引き起こした対象を念頭におくための十分な証拠ないし痕跡として機能する。実際に、スミスは殺されたわけではないにせよ、話者はスミスに残された傷跡から、それを因果的に引き起こした対象、すなわちスミスに危害を加えた人物を念頭におくことができる。この事例で「スミスの殺害者は正気ではない」と話者が述べたとき、話者はスミスの加害者について真なことを述べているのは、まさに話者がその危害を加えた人物を念頭におき、その人物を「スミスの殺害者」という記述で指示し、その人物について語ることを意図していたからに他ならない。荒磯もスミスの殺害者の誤記述の例は、彼の言うところの痕跡を通した指示の例として説明可能であると主張している<sup>92</sup>。同じ論法で、誤記述を含まないスミスの殺害者の例も同様に指示的用法として説明されるだろう。いずれの場合でも、原因が異なるだけで、話者の側に与えられている証拠や痕跡は同じであり、話者がスミスに残された無残な傷跡から、それを因果的に引き起こした対象を念頭におくことができるかどうかに関して違いが生じるとは思われなからである。また、マティーニの帰属的用法の例も同様である。議論の都合上、次のように改変しよう<sup>93</sup>。禁酒主義連盟の会場で、議長が空になっているマティーニボトルを発見する。このとき、議長が部下に対して、「マティーニを飲んでいる人物は誰だ？」と部下に対して質問したとしよう。当初のドネランの特徴づけに従えば、議長は誰か特定の人物を念頭においているわけではないのだから、これは帰属的用法の例とみなされるはずである。しかし、アルモグやカプランの提案によれば、ここで空になっているマティーニボトルは、誰かそれを飲んだ人物が存在する証拠として十分に機能すると思われる。すなわち、議長はその空いたマティーニボトルから、それを飲んだ人物を念頭におくことができ、その人物を「マティーニを飲んでいる人」という確定記述で指示することができるであろう。もし、マティーニボトルに入っていたのが水であったとしても、「マティーニを飲んでいる人」という記述によって、議長はそのマティーニボトルで水を飲んでいた人物に指示をしていると、荒磯やアルモグは主張するだろう。実際、アルモグはほとんどの確定記述の使用は指示的であるという立場を表明している。

表示句（と特に確定記述）についての私自身の理論的見解とは全く別にしても、直観的な事例の記述のレベルで、私は帰属的に用いられている確定記述を伴う単純な文に関して自然な事例を思いつくのは極めて困難だと思っている。例えば、ちょうど言及したような事例にお

<sup>92</sup> 荒磯 (2005) の 60 頁を参照。ただし、彼が使っている例は **Donnellan (1968)** のものとは異なる。

<sup>93</sup> もとのマティーニを飲んでいる人物がいるという情報が、ある人から議長に対して伝えられたという想定になっているからである。先にも述べたが、目下私が「証拠事例」として言及しているのは、このように人から人に何かしらの情報が提供されたというような場合を含まないものとする。このようにマティーニの例を改変したからといって、ドネランの本来の特徴づけに従えば帰属的用法の例に分類されるのは疑いない。

いて、パーティーの主催者が耳にする噂や、空のマティーニのボトルは、それとの関連で、「どこかの誰かがマティーニを飲んでいる (Someone out there is the martini drinker)」という仮説を形成する因果的な背景を確立する。この意味で、噂（ボトル）は、何らかの他の天体（惑星）が目に見えている摂動を引き起こしているという仮説へと至る天王星の軌道の摂動に似ている。[...] こうした全ての事例において、[...] 私は記述を指示的に読んでいる。(Almog, 2014, p. 78, f.n.12.)

このようにして、指示的用法の領域が拡張されたとすると、帰属的用法の例として残る確定記述は、外的な証拠や痕跡に依拠せずに、何らかの一般的な考察からだけ案出されたものだけに限られることになるかもしれない。カプランはこうした記述を「盲目的記述 (blind descriptions)」と呼ぶ。注 70 でも言及したが、ここには「世界で最も屈強な人」、「22 世紀に最初に生まれる子ども (the first child to be born in the twenty-second century)」、「最も背の低いスパイ (the shortest spy)」といった記述が含まれるだろう。荒磯やカプラン、アルモグらが正しければ、帰属的用法として解釈される確定記述の用法の範囲は、ドネランが考えていたよりもずっと狭いことになるかもしれない<sup>94</sup>。

さて、明らかなことではあるが、前章で私が提示したドネラン解釈は、この証拠事例をどのように扱うかに関して荒磯やカプラン、アルモグとは袂をわかつ。現に私は、こうした近年の大勢に抗して、あくまで証拠事例は帰属的用法の一例だと考えている。もう少し慎重な言い方をすれば、証拠事例は、少なくとも指示的用法で生じている指示という現象と同じ意味で、話者が当該の証拠や痕跡の原因となっている対象を指示しているとは言えない事例であると考えている。

自戒を込めて注意しておく、私と彼らの対立点はドネラン解釈にあるのではない。最初に述べた通り、彼らの眼目はドネランの提示した指示概念を解釈することではなく、拡張することにあるからである。私もまた、単にドネラン解釈の問題として証拠事例が指示的用法の例として考えられるべきではない、と主張したいわけではない。そうではなく、事柄の本性上として、証拠事例と指示的用法は同一視されるべき事柄ではない、と主張したいのである。そして、私が思うに、ドネランが証拠事例を指示的用法の例としてではなく、帰属的用法の例として考えたのには十分な根拠がある。

### 3.2 証拠事例の批判的検討—「スミスの殺害者」は指示的か？

本節では、証拠事例を指示的用法の一例とみなす議論に対して、2つの反論を 3.2.1 節と 3.2.2 節それぞれで提示する。3.2.1 節では、話者がある特定の対象を指示するという意図をもつためにどのような認知的状態におかれていなければならないのかを論じる。私は、話者が確定記述を指示的に用いていると言えるための基準として、認知的状態を据えることに関して異論を唱えるつもりはない。話者が確定記述を帰属的と指示的のどちらで用いているのかを決める基準は、結局のところ話者がある対象を指示するという意図をもっているかどうか、すなわち話者がそのような認知的状態にあるかどうかにかかっていると思う。したがって、ある対象を指示する意図をもつという認知的

<sup>94</sup> このようにして指示的用法の拡張された解釈が提示されてきていることは、帰属的用法と指示的用法の区別についての論争が、実質的に指示的用法が意味論に属するか語用論に属するかという点に集中し、指示的用法が多大な注目を浴びてきたことと無関係ではないだろう。

状態がいかなる状態なのかが分析されなければならない。（ドネランも含まれるだろうが、）カプランとアルモグは、指示をする意図を念頭におくという概念に基礎付けている。しかしながら、彼らは、ある対象といかなる種類の関係に立つことで、その対象を念頭におくことができるのかについての議論を提示しているだけであり、そもそも話者がある対象を念頭におくという認知的状態に関してはかばかし分析を提示しているわけではない。私は、念頭におくという概念が指示のための認知的基盤であることを受け入れた上で、「誰であるかを知る（knowing who）」という概念を手掛かりに、念頭におくという概念に一定の分析を与える。そのうえで、証拠事例は指示的用法の事例と同一視されるべきではないと論じる。

3.2.2節では、証拠事例と典型的な指示的用法の例において、誤記述が生じる要因が異なることを指摘し、証拠事例を指示的用法としてではなく、あくまで帰属的用法の一例として考えられると提案する。私が思うに、指示的用法と証拠事例は、誤記述が生じるという点は同じであるものの、その要因は異なる。指示的用法で誤記述が生じるのは、ある特定の対象についての誤信念が原因となるのに対して、証拠事例の誤記述は特定の対象というよりもある特定の出来事に関する誤信念に原因があると考えられる。ここから、出来事に依拠した帰属的用法という概念を抽出する。そこから、証拠事例を指示的用法の一例としてではなく、この用法、つまり帰属的用法の一例として一般化できる可能性を示唆する

### 3.2.1 念頭におくことと誰であるかを知ること

さて、念頭におくという概念はどのような概念だろうか。指示的用法の典型例を振り返り、確定記述を指示的に使う話者がどのような認知的状態を獲得しているのかを精査することで、この概念に対する一定の分析を与えよう。ドネランは指示的用法を次のように特徴づけていた。

〔帰属的用法と〕対になるのは、我々がスミスの殺害者について語っている際に我々が誰を念頭においているのかを聞き手に把握させ、さらに、最も重要なことであるが、我々がなにごとかを述べようとしている人物がその人物であると聞き手が知ることができると予測し意図しているような状況である。（Donnellan, 1966, pp285-286, 邦訳 98 頁）

ドネランのこの特徴づけに従えば、ある話者が確定記述を指示的に用いているとき、その話者は自分がどの対象について話をしようとしているのかを聞き手に知らせようとしている。話者は、スミスの殺害者の例であればそれはジョーンズ、マティーニの例であれば、それは面白い格好をしたマティーニグラスをもっている人物といった、ある特定の対象について話題にしようとしていることを聞き手に知らせる意図をもっている、ということになる。

さて、ある話者がそのような意図をもつためには、あらかじめ自分がどの対象を指示しているのかを知っていなければならないと思われる。ドネランは、表示と指示が別の概念であることを述べる過程で次のように主張している。

もし、表示と指示が同じ概念であると主張しようとするならば、話者はそれに指示しているとは知らずに何かに指示していることが帰結するだろう。もし誰かが、ゴールドウォータ

一氏が 1964 年の共和党候補になるだろうという考えをもつ前に、1960 年に「1964 年の共和党の大統領候補は保守的だろう (The Republican candidate for president in nominee in 1964 will be conservative)」と (党の代表的な人物たちの立場に関する分析を基にするなどして) 述べたとすると、確定記述はゴールドウォーター氏を表示することになる。しかし、話者はゴールドウォーター氏を指示した、あるいは氏に言及した、氏について語ったと言いついてもいいものだろうか？私にはこれらの言い方は場違いなものであると感じられる。それでもなお指示と表示を同一視するならば、話者は我知らずに 1960 年にゴールドウォーター氏を指示していたと (共和党大会のあとで) 判明する可能性がなくてはならない。しかしながら、私の見解では、ここで使われた確定記述は (ラッセルの定義を使えば) ゴールドウォーター氏を表示しているが、話者はこの記述を帰属的に用いているのであって、ゴールドウォーター氏を指示しているわけではない。 (Donnellan, 1966, p. 293, 邦訳 110 頁)

ドネランはここで、「1964 年の共和党の大統領候補」という確定記述は、指示的には用いられえないと考えている。1960 年の時点で、話者はこの確定記述にゴールドウォーター氏が適合するということに関して何の予断ももっていないのだから、これを指示的用法の事例と認めるとすると、我知らずにゴールド・ウォーター氏を指示していたということが帰結する。しかし、これは明らかに場違いである、とドネランは主張する。実際これはもっともであると思う。こうした彼の見解からも、(もしかしたらこれはほとんど同語反復に聞こえるかもしれないが、) 確定記述を指示的に用いる話者は、発話の時点で自分がどの対象を指示しているのかを知っていなければならない、と考えるのはそれほど無茶な認知的制約ではないだろう。

では、「どの対象を指示しているか知っている」というのは具体的に言ってどのような認知的状態だろうか。指示的用法の典型例から抽象すると、目下用いている確定記述とは別の手段でその対象を同定するための手段を持ち合わせていることだと言える。指示的用法の例を振り返ってみよう。例えば、スミスの殺害者の指示的用法の例において、「その記述を用いて誰を指示しているのかと誰かに尋ねられたら、ここでの答えは「ジョーンズ」である<sup>95</sup>」とドネランが述べているように、話者は別の手段、つまり固有名を用いることで自分が指示しようとしている対象を同定できる。次の例も同様である。

次の例はよくある類の会話である。このような会話において、最初の記述が、自分の発言の指示対象を聞き手に同定させるという目的を果たさないことが明らかになった場合に、話者は最初の記述を捨てて別の記述を使うことを躊躇しない。「昨日あなたに紹介した人は面白いことやってたね (The man I introduced to you yesterday did an amusing thing)」 「昨日あなたが私に誰かを紹介してくれた記憶がないんだけど (I don't recall your introducing anyone to me)」 「うーん、もしかしたら紹介はしてなかったかもしれない。派手なチェックのシャツを着ていた人のこと覚えてない？ (Well, perhaps I didn't, but don't you remember the man in the loud checked suit?)」 「ああ、誰のこと言っているのかわかったよ (Oh, now I know whom you mean)」 (Donnellan, 1968, p. 205.)

<sup>95</sup> Donnellan (1966), p. 286, 邦訳 98 頁

ここで話者は、自分の意図している対象を把握させる「昨日あなたに紹介した人」という確定記述を使っている。しかし、この記述がその役目を果たせないと判明したことで、「派手なチェックのシャツを着ていた人」という別の記述を対象同定のために持ち出している。ここでも、話者は自分の意図した対象を指示するために別の手段をもっているといえるだろう。ドネランが最初に特徴づけていたように、指示的用法においては指示するという目的を果たせるのであれば、他の記述や名前でも構わないのである<sup>96</sup>。

この別の同定手段は、記述や名前に限らず、明示的な直示でも構わない。指示に失敗することに関するドネランの考察をみよう。

私が遠くからある人物が歩いているのを目にしたと思って、「ステッキを持っている人は歴史学の教授か？（Is the man carrying a walking stick the professor of history?）」と聞いたでしょう。この段階で4つ場合分けをするべきかもしれない。[...] (d) 最後の場合は、私がステッキを持っている人がいたと思っていたところにはそもそも何も存在しなかった場合である。この記述は指示という目的に使われているのかもしれないが、我々は本当に指示に失敗しているのかもしれない。私が指示しようと意図していたものは岩であれ何であれ何も存在しないのである。私は、光の錯覚でそこに人がいると思ったのかもしれない。私が、「これが私の指示していたものである。それはもうステッキを持っている人ではないのはわかっているが（That is what I was referring to, though I now see that it's not a man carrying walking stick）」と言えるようなものは何もないのである。いずれにせよ、指示に失敗することは、使われている記述に適合するものが単に存在しないという状況よりも、ずっと極端な状況が必要とする。「これこそが指示したものだ（That is what he was referring to）」と言っているようなものが存在してはならないのである。（Donnellan, 1966, pp. 295-296, 邦訳 113-114 頁）

ドネランによれば、典型的な指示的用法において、話者が指示に失敗するような場合とは、何であれ「これこそが指示したものだ」と話者が言えるようなものが存在しないような場合である。この主張を逆手にとれば、話者が指示をおこなうとき、通常、「これこそが指示したものだ」と言えるような対象があらかじめ存在しているということである。そして、その対象は発話より前の時点で、話者がまさに念頭においていた対象である。他にも、マティーニの指示的用法の例で、もし聞き手が「マティーニを飲んでいる人」という記述で指示対象を把握できなければ、話者は「あの人（that man）」という明示的な直示によって、自分の意図した指示対象を聞き手に知らせることができるだろう。こうしたことから、直示による同定もまた、別の同定手段とみなして差し支えないと思われる。

このことは確定記述だけではなく、固有名を使って指示をするような場合にも当てはまる。例えば、我々が「ソクラテス」という名前を使うとき、どの対象を指示しているかを知っているように思われる。もし、誰のことを指示しているのか尋ねられたとしたら、「プラトンの師匠さんだよ」や「ドクニンジンの杯をあおって死んだ古代ギリシアの哲学者さ」と言って別の記述に訴えるか、あるいは高等学校で使われている倫理の教科書を引き合いに出して「この人だよ」などと言って直示的に示すことも可能であるだろう。確定記述にせよ固有名にせよ、目下使っている記述や名前と

---

<sup>96</sup> Donnellan (1966), p. 285, 邦訳 97 頁

は別の同定手段を持ち合わせていることは、話者がある特定の対象に指示をしていると言えるための1つの重要な条件であると考えられる。

ここまで、指示的用法の典型例や、固有名を用いてある対象を指示するという標準的な事例、すなわち、ドネランが本来使っている意味で、「話者がある対象を念頭においている」と呼べる事例から、話者は自分がどの対象を指示しているのかを知っていなければならないという論点を抽出してきた。そして、話者がどの対象を指示しているか知っているという認知的状態とは、他の記述や固有名、あるいは直示などによって、目下使っている言語表現以外の手段で対象を同定する手段を持ち合わせていることであると論じてきた。私はこの認知的状態は、指示という目的に対してその指示対象が誰（何）であるのかを知っている（*knowing who*）という認知的状態とほとんど同じか、極めて近いものであると主張する。私の提案は、話者がある対象を念頭においているのであれば、指示という目的に対してその対象が誰であるのかを知っていなければならない、というものである。私がそう考える根拠を提示しよう。

誰であるかを知るという概念は、極めて扱いの難しい概念であることがよく知られている。Boër and Lycan (1986) の次の一節を参照しよう。

「S は N が誰なのか知っているのか？（Does S know who N is?）」という質問に対して理にかなった回答をしているかどうかは、異なる状況で、ひどく完全に異なった根拠に左右されるというのは自明の理である。環境が異なれば、ある人が誰であるのかを知っているかどうかに関して、異なるテストが課される。そのようなテストは、通常、「N って誰？（Who is N?）」に対する応答として、適切な単称名辞を S から引き出すことから成り立っているものの、この「適切さ（*appropriateness*）」の基準は劇的に異なる。（Boër and Lycan, 1986, pp. 3-4.）

ボーアとライカン様々は様々な例を引き合いに出して、我々が誰であるかを知っていると言える基準がひどく可変的であることを実証している。彼らの例は、次のようなものである。クラーク・ケントが勤めている新聞社の雑用係は、非常に明らかな意味でクラーク・ケントが誰であるのかを知っていると言えるだろう。彼は、クラーク・ケントの名前や住所、役職、仕事上の功績等々について数多くのことを語ることはできるはずである。しかし、また別の意味、すなわち、クラーク・ケントがスーパーマンであるということを知らないという意味では、クラーク・ケントが誰であるのかを知らないと言えるだろう。すなわち、ある人物が誰なのかを知っているかどうかは、「N って誰？」という質問に込められた目的や関心に相対的である。

（話者 S が N を知っているかどうかに関する我々の評決を決めるであろう）「N って誰？」という質問に対して S が与える回答は、単に N についての S の知識状態だけではなく、（これに加えて）N に関する S の興味の度合いや、その時点での N に関わる S の目的、あるいは、こう言ってよければ、N に対する S の計画（*project*）にも左右される。したがって、我々の雑用係は、新聞社のビジネスを上手くやっていくという目的に対しては、クラーク・ケントが誰であるのかを知っているが、（巨大イカに食べられそうになっている）ロイス・レインをすぐに助けを呼ぶという目的や、愛国者や犯罪と戦う人、英雄についての賞賛すべき事柄を物語るという目的に対しては、クラーク・ケントが誰であるのかを知らないのである。

こうした理由から、ボーアとライカンが話者 S が N を知っていると言える条件を、目的を変数（彼らの用語で言えば、パラメータ）として組み込み、非常に込み入った仕方で定式化している<sup>97</sup>。

目下の私の目的にとって彼らの定式化の詳細に立ち入る必要はない。ここでの私の議論にとって重要なのは次のことである。それは、彼らが、話者 S が N を知っているかどうかのテストとして、「N って誰？」というテストを設けているように、N を知っている S は、この問いに対して、目的や計画に相対的にであれ、有意味な仕方で答えられるということである。ボーアとライカンは、「N」が固有名の場合、指示的な確定記述と帰属的な確定記述の場合、直示詞の場合をそれぞれ考察している。彼らによれば、いずれの場合においてもこの「N って誰？」という質問に対して、

- (1) 「N は G だよ (N is the G)」 ( “the G” は帰属的な確定記述<sup>98</sup>)
- (2) 「N は M だよ (N is M)」 (M は別の固有名)
- (3) 「D が N だよ (D is N)」 (D は直示詞)<sup>99</sup>

のいずれかの形式で答えられなければならない<sup>100</sup>。どの形式で答えるのが適切なのかは、もちろん目的や計画に依存するが、私がここで問題としている目的は、確定記述や固有名で指示をするという目的である。上で論じてきたように、確定記述や固有名で指示をおこなう典型的な事例において、話者は別の記述や固有名、直示詞といった、目下使っている手段とは別の指示対象を同定する手段を持ち合わせていた。このことは、まさに (1) ~ (3) のいずれかの形式で、その意図された指示対象に関して「N って誰？」と問われたときに、この質問に答えられることと同一視可能であると思われる。例えば、話者が指示しようとしている対象が直接知覚できないような状況であれば、話者は別の確定記述を使ってその対象を把握させようと努めるだろう。これはおおよそ (1) に対応するものとみなせる<sup>101</sup>。また、スミスの殺害者の指示的用法の例であれば、「ジョーンズ」という固

<sup>97</sup> 詳細は、Boër and Lycan (1986) の第 2 章を参照。

<sup>98</sup> ここでボーアとライカンが「帰属的」ということで意味しているのは、「N」によって指示されている対象の属性 (attribute) を述べるということである。例えば、「アリストテレスって誰？」と聞かれたときに「アリストテレスはニコマコス倫理学の著者だよ (Aristotle is the author of Nichomachean Ethics)」と答えるような場合を考えてみよう。ここで「ニコマコス倫理学の著者 (the author of Nichomachean Ethics)」という記述が指示的に用いられているとは考え難い。なぜなら、「アリストテレス」がアリストテレスを指示するために用いられているのは自明であり、この記述も指示するために用いられているのだとすると、この応答は同一性言明を述べていることになるからである。しかし、我々が日常的に「アリストテレスって誰？」と聞くときに、その回答として同一性言明を期待しているとは到底思われえない（もちろん、そ例外としてそのような場合がありうるのは否定しない）。したがって、この回答の中で「ニコマコス倫理学の著者」という記述は、アリストテレスに指示するためではなく、むしろ彼が持っている性質、ボーアとライカンの用語で言えば属性を述べるために用いられていると考えるのが適切であるだろう。

<sup>99</sup> Boër and Lycan (1986), p. 23, 30, 32.

<sup>100</sup> Boër and Lycan (1986), pp. 24-25. ボーアとライカンは、(1) の形式の回答にプライオリティーがあり、(2) と (3) の形式は派生的なものであると論じている。彼らがそのように論じる理由は、典型的に (2) と (3) の回答は、さらなる「M/D って誰？」という質問を引き起こすからである。

<sup>101</sup> この点について補足する。もちろん、意図した対象を同定するために別の確定記述を持ち出す話者は、その確定記述を指示的に使っている。ゆえに、(1) で述べられているように、“the G” を帰属的に用いるわけではないように思われる。しかし、だからといってボーアとライカンが提示している枠組みに当てはまらないと考えるのは早計である。ボーアとライカンが提示している「N って誰？」のテストをそのまま当てはめてみればよい。“The F” と “The G” という別の記述で意図している指示対象を同定する用意のある話者が、仮に「F って誰？ (Who is the F?)」と聞かれたら何と回答するだろうか。極めて不自然な言い回しかもしれないが、「F は G だよ (The F is the G)」と答える

有名を使うことで、話者は「スミスの殺害者って誰？」という質問に答えたことになるだろう。これは (2) に相当する。また、意図している指示対象を話し手も聞き手も直接知覚できているような場合であれば、直示詞を使うことで、つまり (3) の形式に訴えることで、「誰？」の問いに答えたことになるだろう。

もちろん、それ以上の回答を求められた場合、話者は答えに窮することもあるだろう。スミスの殺害者の例で、「で、ジョーンズって誰？」と聞かれた場合、彼がスミスを殺した犯人であるということ以外知らなければ、この質問には答えられない。しかし、だからといって話者が指示対象、つまりジョーンズを知らないということにはならない。このような場合にジョーンズが誰であるのかを答えられないのは、ポーアとライカンの用語を用いれば、パラメータ変化 (*parameter shift*)<sup>102</sup> が起きているからである。例えば、聞き手がジョーンズは犯人ではない固く信じていれば、話者が「スミスの殺害者は正気ではない」と発話したとき、「スミスの殺害者」で誰が指示されているのかを聞き手が把握できないという場合は想像可能である。このとき聞き手は、「スミスの殺害者って誰？ (Who is the Smith's murderer?)」と聞き返すかもしれない。この目的は、指示対象を把握することにある。ゆえに、話者が「ジョーンズ」と答えることは適切であるし、聞き手も話者が誰のことを指示しているのかを把握できるだろう<sup>103</sup>。この後に、聞き手が「ところで、ジョーンズって誰なの？」と聞き、話者が答えに詰まるのは、目的が、指示をすることから、ジョーンズの職業や人柄といった彼の素性を述べることに変化しているからに他ならない。最初に述べたとおり、誰であるかを知るという概念は、目的や計画に対して極めて可感的な概念である。ジョーンズの素性を述べるという目的に関して彼が誰であるのかを知らないことは、指示をするという目的に対して彼が誰であるのかを知らないことは意味しない<sup>104</sup>。

ここまでの私の議論が的を射たものであるならば、どの対象を指示しているのかを知っているという認知的状態を、指示をするという目的に対してその対象が誰 (何) であるのか知っているという認知的状態と同一視することは一定のもっともらしさがあると思われる。また、これによって念頭におくという概念に対して少なからず分析を与えられたと信じる。話者がある対象を念頭においているとき、その話者は指示という目的に対してその対象が誰 (何) であるのかを知っている必要がある。つまり、話者は当該の念頭においている対象が誰なのかを尋ねられたときに、異なる確定記述や固有名、ないしは直示詞といった別の同定手段を引き合いに出し、その「誰？」の質問に対して有意な仕方で答えられなければならない。

実際、念頭におくという概念と誰であるかを知るという概念の親近性は、Salmon (2004) によって指摘されている。

ドネランのある個体を念頭におくという概念—確定記述を指示的に用いるために要求される念頭におくという概念—は、問題になっている人物に関して、事物関与的な態度や意図ない

---

用意はあるはずだ。上の注 98 でも述べたとおり、ここで “the G” という記述はほとんどの場合、帰属的に用いられる。このことから、意図した指示対象を把握させるために別の確定記述を用いる用意のある話者は、(1) に対応する回答をする用意があると言えるだろう。

<sup>102</sup> Boër and Lycan (1986), p. 20.

<sup>103</sup> 話者も聞き手もその人物がジョーンズという名前であることを知っていると前提する。

<sup>104</sup> Kaplan (2012) の p. 144 で、ある対象が誰であるのかを知らないことと、その対象を念頭におくことは両立すると指摘されているが、この 2 つが両立するのはまさにこのためである。つまり、指示をするという目的にしか指示対象を知っていると見えない場合、話者はその対象を念頭におき指示をすることはできても、その対象が誰であるのかを知らないと言われる場合が多々あるだろう。

しは他の認知的態度といった明確な概念よりも、ある人が誰であるかを知るという概念、あるいはある人が誰であるのかに関する意見をもつという概念（誰であるかを知るという認識論上の概念のドクサ的類比）に、よりどこかで接近するようになると思われる。確かに、ある人を念頭におくという概念と誰であるかを知るという概念は同じではない。ある記述をある人に対して指示的に使いつつも、通常の意味でその人の身元に関して、知識はもちろんのこと意見ももたないということもありうる。しかし、この 2 つの概念は、念頭におくという概念が事物関与的な態度をもつという概念と似ている程度と比べても、関連がある、ないし似ているように思われる。私が思うに、誰であるかを知るという概念や誰であるのかに関して意見をもつという概念のように、念頭におくという概念に関連するものは、認知主体と内容との認知的関係として考えるのが最善であり、この関係は単称名辞にとって適切なものである。（Salmon, 2004, p. 254.）<sup>105</sup>

また、Over (1985) もドネランが帰属的用法と指示的用法の区別を論ずるにあたって、隠伏的に誰であるかを知るという概念が使われていることを指摘している。

ドネランがいうところの単称名辞の指示的用法と帰属的用法を区別しようという彼の試みは、多くの注目を浴びてきたが、まだこの区別に関して未解決の問題がいくつかある上に、この区別とより一層根本的な区別のあいだの関係についても、主張しておくべき重要な点がいくつかある。ドネランは、この主題に関して自らの論文で意味していることを説明しようとするために、志向性や、ある対象を念頭におく、ある人物が誰であるかを知る、と言った諸概念を含め、数多くの概念を使ってきている（Donnellan, 1966, 1968, 1978）。（Over, 1985, p. 415.）

オーヴァーはこの点を掘り下げ、話者が確定記述を指示的に用いているとは、「話者がどの対象がその指示対象であるのかを知っており、その対象を念頭においているということを意味する<sup>106</sup>」と主張するに至っている。私のこれまでの議論およびこうした哲学者たちの所見からも、念頭におくという概念を、誰であるかを知るという概念を援用することで分析することはそれほど的外してはいないだろう<sup>107</sup>。

さて、今や誰であるかを知るという概念を援用し、指示的用法と証拠事例との違いが明らかとなるだろう。私は、証拠事例はいかなる意味でも、その指示対象を知っているとは言えない事例であり、ゆえに指示的用法の一例として一般化することはできない、と主張する。

このことを確かめるために、証拠事例において、話者が「N って誰？」という質問に (1) ～ (3) のいずれで、有意味な仕方で答えることができるかを想像してみればよい。ベティの事例において、「ボブをひっぱたいやつつて誰？」という質問に話者が答えられるとしたら、「それはボブをひ

<sup>105</sup> サーモンはこの一節に私の注意を向けてくれたパオロ・ボナルディ氏に感謝を申し上げる。

<sup>106</sup> Over (1985), p. 419.

<sup>107</sup> ところで、サーモンもオーヴァーも、ドネランの洞察の中に誰であるかを知るという概念が潜在していることをほとんど議論なしで認めている。しかし、彼が基本的に使う言い回しは「誰であるかを知る」ではなく「話者が誰を指示しているのかを知っている (knowing who/what the speaker refers to)」とパラフレーズできるような言い回しである。この 2 つが同一視可能な概念かどうかは自明ではないように思われる。そのことを立証するためには、本節で私が費やしてきた議論が必要だと思われる。

「ひっぱたいやつのことさ」と答える他ないように思われる。この答えは「ジョーンズって誰？」という質問に「それはジョーンズさ」と答えるようなものである。これは明らかに同語反復であり、「誰？」という質問に対する適切な答えではない。つまり、話者は指示をするという目的に対して、ボブをひっぱたいやつが誰であるのかを知らないのである<sup>108</sup>。ゆえに、ベティを念頭におき、彼女のことを指示しているとは言い難いように思われる。このことは、ひとえに話者が、目下用いている「ボブをひっぱたいやつ」という確定記述以外に、ベティを同定するための手段を持ち合わせていないことに起因していると思われる。スミスの殺害者の帰属的用法の例もしかりである。「スミスの殺害者って誰？」と聞かれても、今しがたスミスの遺体を目にしたばかりの話者は、それが誰であるのかに関して、適切な答えを返すことはできないだろう。この点で、指示的用法の典型例と証拠事例は明らかに異なる<sup>109</sup>。

もちろん、中間的な事例は存在しうる。例えば、スミス殺害事件の捜査が進むにつれてスミスを殺した人物の身長や住んでいる地域、利き腕、指紋やDNAまで明らかになっていったとしよう。事件の捜査官たちは、「スミスの殺害者」以外にも、同じ人物を意味するために、「この指紋の人物 (the man who has the fingerprints)」といった別の確定記述や、DNAから顔を復元することで、「この男 (that man)」という直示詞を使うことができるようになるかもしれない。つまり、複数の証拠や痕跡を手に入れることで、その人物が誰であるかを知る場合はありうる<sup>110</sup>。こうした場合、話者はスミスの殺害者を指示するために確定記述を用いることができるのかもしれない。上記のような中間的な事例、言い換えるならば、指示的用法と証拠事例の境界がどこに引かれるべきなのかに関して、私は中立的な立場をとる<sup>111</sup>。先に述べた通り、私が目下批判しているのは、ベティの例やスミスの殺害者と言った典型的な帰属的用法の事例を指示的用法の一例として一般化できるという立場である。

ここまでの議論を振り返ろう。話者が典型的に指示をしている事例、つまりある対象を念頭においていると言える事例において、ドネランが示している典型的な例から抽象するに、その話者はその対象を指示していると知っているという認知的状態を獲得している。話者がこの認知的状態にあるとき、話者はその対象を目下使っている記述とは別の仕方でもその指示対象を同定できる。これは、指示という目的に対してその対象を知っていることと同一視できるものである。私の主張は、証拠事例は指示をするという目的に対してその対象を知っているという条件を満たしえないものである、

---

<sup>108</sup> もちろん、このことは話者がベティのことを知らないということは意味しない。話者が日常的な意味でベティと顔見知りであり、いわんや隣にベティがいると仮定してもよい。それでもこの話者は、ベティがボブをひっぱたいやつであるとは知らないのである。

また、「ボブをひっぱたいやつって誰？」という質問に対して、でたらめな予想のもとで「ベティだよ」と答えるような場合もありうるだろう。しかし、この場合は、日常的な意味で、話者はベティがボブの頬を真っ赤にさせたことを知っていたとはみなせない場合であるだろう

<sup>109</sup> もちろん、「ボブの頬を赤くはらしたやつさ」とか「スミスを死に至らしめたやつだよ」というような、字義的には異なった確定記述を与えることは可能であるかもしれない。しかし、私が思うに、これは日常的な仕方でも「キケロって誰？」と聞かれたときに「タリーのことだよ」と答えるようなものである。つまり、この質問の目的が対象の同一性に向けられていると想定しない限り有意味で適切な回答とはみなされないだろう。

<sup>110</sup> このような場合に私の注意を向けてくれたハワード・ウェットスティーン氏に感謝を申し上げる。また、本稿の内容は、筆者がカルフォルニア大学リバーサイド校に滞在中、氏と議論した事柄を土台としているものが少なくない。彼の類いまれなる懇切さと知的誠実さに謝意を表したい。

<sup>111</sup> また、証拠や痕跡の違いも加味されなければならないだろう。例えば、直接知覚してはいないもののある人物についての絵や写真はその人を直接知覚するのと同じ程度の知覚的效果をもたらすように思われる。

というものである。なぜなら、証拠事例において、発話をなしている話者は「誰？」という質問に対して適切な回答を与えうる余地がないからである。

ここまでの私の議論は、少なくとも、証拠事例と指示的用法が単純に同一視できるものではないことを示す動機付けにはなると信じたい。現に私は、証拠事例は指示的用法の一例としてではなく、広く出来事に依拠した帰属的用法として一般化をするほうが、より類似の事例を網羅することができると考えている。次節ではそれを論じよう。

### 3.2.2 出来事に依拠した帰属的用法

本節では、証拠事例を指示的用法の一例としてではなく、ある出来事に依拠した帰属的用法として一般化できる可能性を示唆する。これは私の推測だが、証拠事例が指示的用法と同一視できると考えられてきている背景には、帰属的用法はラッセルの記述の理論で分析されるという暗黙の前提があったことと、指示的用法の誤記述の事例に多くの注目が集まってきたことが挙げられるかもしれない。ここから帰結しうるのは、誤記述の事例は何であれ指示的用法である、という見立てだろう<sup>112</sup>。私は以下の議論の過程で、この見立てが誤ったものであることを示そうと思う。というのも、指示的用法でもなく証拠事例でもなく、典型的な帰属的用法の事例ではあるものの誤記述の事例がありうるからである。この事例は、証拠事例があくまで帰属的用法の一例である可能性を切り拓いてくれる。

そのために、まず指示的用法と証拠事例においてなぜ誤記述が生じるのかを検討する。証拠事例を指示的用法の一例とみなすのであれば、どちらの事例においても誤記述が生じる原因は、特定の対象についての誤信念に起因すると考えられるかもしれない。しかし、私が思うに次のように考える方がより事柄の記述として自然だと思われる。指示的用法の誤記述の事例は、ある特定の対象についての誤信念に由来するのに対して、証拠事例での誤記述は、ある出来事に関する誤信念に由来する。この違いを明確に捉えることで、「出来事に依拠した帰属的用法」と呼べる帰属的用法の一群が存在することを示せればと思う。そして、証拠事例はこの出来事に依拠した帰属的用法の一例であると論じる。

まず、典型的な指示的用法の例での誤記述が何に由来しているのかを見よう<sup>113</sup>。スミス殺害事件の裁判で奇妙な振る舞いをする被告ジョーンズを見て、「スミスの殺害者は正気ではない」と話者が発話する。このとき、誤記述の事例が生じるとすれば、「ジョーンズはスミスを殺した/スミスの殺害者である」といったかたちで表せるような、話者がある特定の対象についてもつ信念に原因があると考えられるだろう。マティーニの指示的用法の例も然りである。指示的用法を伴う「マティーニを持っている人は誰ですか？」という発話が誤記述でありうるのは、「あの人物はマティーニを飲んでいる」という話者がもつ特定の対象についての信念が誤信念であった場合である。このことは、2章で論じたように、指示的用法を伴う主張の根拠が、特定の対象の性質に求められるという点とも合致する。

<sup>112</sup> 実際、荒磯 (2005) は帰属的用法をラッセル的な記述とほとんど同一視している (荒磯 (2005), 50 頁)。2章で論じた通り、これは正しくない。

<sup>113</sup> ドネランは指示的用法において話者があえて誤記述を使う例もいくつか考察しているが、本節ではひとまずその事例は考えない。つまり話者が意図せず誤記述を使ってしまう例のみを考察の対象とする。このことは、私が以下の議論で確立したい点を損なうものではない。

証拠事例において、誤記述が生じる要因も同じ線で考えることができるだろうか。今しがたスミスの無残な遺体を見た話者が「スミスの殺害者は正気ではない」と発話する。証拠事例と指示的用法の一例として組み入れるのであれば、ここで誤記述が生じる要因も次のように説明されるかもしれない。まず、話者はスミスの無残な遺体からスミスをおこなう状態に至らしめた特定の対象を念頭におくことができる。そして、その対象について話者は「この対象はスミスを殺した/スミスの殺害者」であるという信念をもつことができる。誤記述が生じるとしたら、この特定の対象についての信念が誤信念であった場合である。ベティの例も同様に、ここで誤記述が生じるのは「その対象はベティをひっぱたいた」という信念が誤記述であった場合として説明されるかもしれない<sup>114</sup>。

証拠事例において誤記述が生じる要因を、特定の対象についての誤信念に求めることのもっともらしさについて私は懐疑的である。むしろ、次のように説明する方が事柄の記述として自然なように思われる。証拠事例における誤記述は、「誰かがスミスを殺した/スミスが殺された」というかたちでパラフレーズされるような、ある出来事に関する信念が誤信念であることに起因していると思われる。ベティの例も、荒磯がそう認めているように、「ベティがひっぱたかれた/誰かがベティをひっぱたいた」という出来事に関する信念が誤信念であるがゆえに、誤記述が生じていると考えられる。

このように証拠事例における誤記述の要因を説明することが正しいとすれば、証拠事例において話者は発話に至るまでに出来事に関する信念形成を経ていると考えることができるだろう。私が思うに、ドネランが帰属的用法として分類した事例の中には、大別すると、何らかの出来事が存在することを前提しつつ発話をおこなう事例と、カプランが「盲目的記述」と呼ぶ事例の2つが混在している。そして、いま問題となっているのはこの前者の事例である。本節の冒頭で、証拠事例を指示的用法の一例と考えようとする背後には、何であれ誤記述が生じていれば指示的用法であるという見立てがあるかもしれないと示唆した。しかし、私が思うに、帰属的用法のうち前者の事例は潜在的に誤記述が生じうる事例である。誤記述が生じるから指示的用法なのではない。証拠事例はあくまで前者の事例の一部である。このことは、証拠事例でも指示的用法でもない典型的な帰属的用法の事例で誤記述が生じうることを確かめてみればはっきりするだろう。

次の事例を考えよう。

太郎と花子がせっせと公園で落とし穴を掘っている。ようやく落とし穴が完成し、誰か引っかからないかと思って、2人は木の陰から落とし穴をじっと見つめている。太郎が次のように発話する。「次にあそこを通る人は落とし穴に落ちこちるだろう (The man who pass there next will fall into our trap)」すぐ後に、野良犬がその落とし穴の上を通り、落ちる。かわいそうに思った太郎と花子は、犬を救出し、落とし穴を埋め直した。2人は公園を出て家に帰り、落とし穴のことはすっかり忘れる。

---

<sup>114</sup> この点について、荒磯 (2005) は慎重である。荒磯はベティの例での誤記述が出来事についての性質帰属の誤りに起因していることを認めている (荒磯 (2005), p. 59.)。この点で私は荒磯に賛同する。しかしながら、以下で論じるように、私の考えでは出来事に対する性質帰属が発話に隠伏的に含まれているという観点から、証拠事例を指示的用法としてではなく、帰属的用法の一例として一般化する余地がある。

「次にあそこを通る人」という確定記述に適合する対象は存在しないのではあるが<sup>115</sup>、直観的に言って、太郎の「次にあそこを通る人は落っこちるだろう」という発話は、真な発話とみなせる。この事例は、全き帰属的用法の事例であり、完全に合理的な設計のもとになされていると言えるだろう。この太郎の発話が、2.3節で論じた帰属的用法を伴う発話の合理性の3要件、対象存在の共有可能性、根拠の提示可能性、根拠の一般性のいずれをも満たしていることは明らかである。子どもが遊ぶ公園のある地点を通過する人物がそう遠くない未来に出現すると想定することはたやすい。もし、花子が本当にその落とし穴に人が落ちるか訝しげにしていたら、太郎は自分から飛び込んで落とし穴に落ちることで、自らの主張が正しかったことの根拠とできるだろう。この点で太郎は自分の主張の根拠を提示できる。この根拠が、人間の一般的な体重と、自分たちが作った落とし穴の強度や深さをもとにした一般的な考察に基づいていることは、言うまでもなからう。

そして、この事例はいかなる意味でも証拠事例とはみなされえない。太郎は落とし穴に落ちた犬とは、証拠や痕跡を介したいかなる因果的關係にもたっていない。カプランやアルモグが言うような意味で、太郎が発話の時点で落とし穴に落ちた犬のことを念頭においていたと考えるのは常軌を逸している。それでもなお、この事例は誤記述の事例だと考えられる。

この事例で誤記述が生じている要因は、証拠事例の誤記述の場合と同様に、出来事に関する誤信念という点から説明することができるだろう。つまり、太郎は何か自分たちが作った落とし穴の上を通るという出来事に関する信念をもってはいたが、その出来事の主体が人であるということに関して彼の信念は誤っていたのである。そこを次に通ったのは、人ではなく犬であった。

このように、ある出来事に関する信念形成を伴うような帰属的用法を、「出来事に依拠した帰属的用法 (*event-dependent attributive uses*)」と名付けよう。では、話者が何がしかの出来事に依拠しているということ自体はどのようにして示されるのだろうか。私の考えでは、それはまさに、ある特定の状況でなされる“The F is G”という発話の、“The F”という記述を介することによってである。我々は、確定記述を介することで、自分がその発話で依拠している出来事を示すことができると考えられる。例えば、無残な傷跡が残るスミスの遺体の前で、「スミスの殺害者」という記述を用いることは、この発話を介して、スミスをこのような状況に至らしめた出来事に依拠していることを明示できるだろう。上と花子の例であれば、太郎は「次にあそこを通る人」という記述を使うことで、誰かが落とし穴に引っかかりうるような出来事に依拠していることを明示しているのである<sup>116</sup>。<sup>117</sup>

<sup>115</sup> もちろん、厳密に言えば、この記述に適合する対象は存在する。つまり、太郎と花子が落とし穴を埋め直して、公園を出てから落とし穴があったところを通った誰かである。当然その人はもう落とし穴はないのだから何であれ落ちることはない。よって発話は偽である。しかし、この人物が太郎のこの発話の真理値に影響を及ぼすと考えるのは、直観に反する。

<sup>116</sup> 私がここで、太郎が依拠していると考えられる出来事を、何であれ落とし穴の上を対象が通ることに限定していないのは、落とし穴の例で次のような場合を念頭においているからである。落とし穴を作り終わった太郎と花子が木の陰から様子を見ていて、次郎がやってくる。次郎は立ち幅跳びの練習を始め、勢いよく助走し、落とし穴の4メートルほど手前からジャンプして、ちょうど落とし穴があるところに着地し、落とし穴に落ちたとする。この場合、我々は次郎が落とし穴のあるところを通ったとは言わないだろう。それでも、太郎の「次にあそこを通る人は落っこちるだろう」という発話は真な発話とみなすことができると思う。これはひとえに、太郎のこの発話が、何らかの対象が落とし穴に引っかかりうるような出来事が生じるであろうことを、発話を介して明示しているからかもしれない。

<sup>117</sup> この点に関してはより詳細な議論が必要なのは言うまでもない。私は、確定記述を介することで依拠している出来事を示せるのは、“The F”のうちの述部“F”内容が大きな貢献をしていると考えている。つまり、「殺害者 (*murderer*)」という述語は明らかに、殺すという出来事を想起させるし、「次にあそこを通る (*pass there next*)」という述語は、落とし穴に引っかかる何がしかをなすという出来事を想起させるだろう。これは、“F”の中に動詞や、そのかたちを変えることで動詞にできる名詞が含まれているからかもしれない。盲目的記述はこの点对照的である。

帰属的用法のうち、何がしかの出来事を依拠するタイプの用法が存在することは、帰属的用法において対象存在の共有可能性が満たされていなければならないこととも調和する。なぜなら、出来事は典型的にそこに参与する対象が存在することを前提とするからである<sup>118</sup>。いわば、話者は出来事に依拠していることを聞き手に明示することで、対象存在の共有可能性が充足されることを期待しているのである。この出来事の依拠が明示されない場合に発話が不合理なものとなるのは明らかである。例えば、スミスの殺害者の帰属的用法の例で、「スミスを手でたやつは正気ではない (the man who stroked Smith is insane)」と発話したとしても、対象存在の共有可能性の要件が満たされないだろう。「手で」 という動詞では、スミスが無残な状態に至らしめた出来事に依拠していることを明示できないからである。また、スミスが快活に振る舞っている目の前で、突拍子もなく「スミスの殺害者は正気ではない」と発話することが合理的とはみなされないことも説明がつく。これもまた、「スミスの殺害者」という確定記述を用いることで、話者がどのような出来事に依拠して、その発話をなしているのかが不明だからであるだろう。こうした場合、これは誤記述の事例ではなく、端的に不合理な発話をなしている事例とみなせると思う。

出来事に依拠した帰属的用法を伴う発話が合理的に設計される要件を、指示的用法を伴う発話が合理的に設計されるための要件と類比的に、次のように言い直せるかもしれない。指示的用法において、話者はどの対象を指示しているのかが聞き手に把握できるという合理的な予測をもって記述を選択しなければならなかったのと同様に、出来事に依拠した帰属的用法において、話者はどの出来事に依拠しているのかを聞き手が把握できるだろうという合理的な予測のもとに記述を選択しなければならない、と。

ここまでの議論から、出来事に依拠した帰属的用法において、記述の果たす役割は次の 2 つがあると言えるだろう。1 つは、話者が依拠する出来事を明示すること。もう 1 つはその記述に適合する対象を選び出すというより、むしろ、その出来事に決定的な仕方に関わった（関わるであろう）対象をパラフレーズすることである<sup>119</sup>。なぜ、純粋に記述に適合する対象を選び出すわけではないのかといえば、依拠する出来事を明示することはその出来事に参与する対象が存在することを含意するからである。スミスの殺害者の例であれば、スミスをこのような無残な状態へと至らしめた出来事に依拠していることを明示することで、誰であれその出来事に参与した人物もまた同時に仮定されるのである。「スミスの殺害者」という記述はその人物をパラフレーズしているのである。上の落とし穴の例も、「次にあそこを通る人」という記述は、何がしかの対象がその落とし穴に引っか

---

「世界で最も屈強 (strongest in the world)」や「背が最も低い (shortest)」といった述語は、直観的に言ってなにがしかの出来事を想起させるとは言えないだろう。

<sup>118</sup> 出来事がそこに参与する対象を必ず含むかどうかは必ずしも自明なことではないかもしれないが、典型的に出来事がそのような性質を有していることは認めてよいだろう。例えば Parsons (1990) は出来事には参加者 (participants) がいることを前提として、出来事意味論を構築している (pp. 21-22.)。私も以下の議論で、出来事にはそこに参与する対象が存在することを前提する。

<sup>119</sup> 無論、話者は一意的に適合する対象が存在する記述を使うよう心がけるだろう。むしろ、事柄の本性上そうせざるをえないのかもしれない。というのも、私は、出来事に依拠した帰属的用法の事例の中で、指示的用法のように、話者があえて誤記述を使い、そこから復元される内容を意味することを意図していたと言える事例がありうるかに関して何度か考えを巡らしたことがある。私が想定しているのは、例えば、「スミスの殺害者」の誤記述の事例で、話者は「スミスに危害を加えた人物」を意味しようという意図をもって、「スミスの殺害者」という記述を使えるかどうかといった類のことである。スミスは殺された訳ではないと知っている話者が、あえて「スミスの殺害者は正気ではない」という発話することはできるだろうし、この発話自体は適切であると思う。しかし、私が思うに、この場合、この話者が「スミスに危害を加えた人物」を意味することを意図していたと言えるかどうかは議論の余地があると思う。私の直観では、これは単純に嘘をついたか、人を騙そうとしていた事例にみえる。しかし、この直観が何に由来しているのか私はわからない。

かるようなことするという出来事に依拠していることを示していると考えられる。それと同時に、そこに参与するのは、その落とし穴の上を通ろうとする人であるというパラフレーズをしているのである<sup>120</sup>。

私の考えでは、帰属的用法において誤記述が許容されるという我々の直観は、この出来事に依拠した帰属的用法の性質に由来している。合理的な話者は、自分がどの出来事に依拠して発話をなしているのかを明示するし、当然聞き手がそれを察知できるであろうことを期待していると考えられる。解釈する聞き手は、話者の発話からどの出来事に依拠しているのかをまず把握する必要がある。それは、発話の前の時点から話者との間に共有されている出来事かもしれないし、その発話を聞くことで初めて聞き手の注意が向けられる出来事かもしれない。いずれにせよ、聞き手はどの出来事に依拠されて帰属的用法を伴う発話がなされているのかを把握しなければならない。ひとたび、これが達せられれば、“The F”の部分に誤記述があろうともそれは度外視されうる。なぜなら、話者が何であれその出来事に決定的に参与した対象について語ろうとしていることは自明だからである。その対象のパラフレーズの仕方を誤っていようと、その出来事に参与した対象について語ろうとしているものとして、聞き手は話者の誤記述を修正しているのだと思われる。我々は、「スミスの殺害者」という記述から、我々は話者がスミスが無残な状態へと至らしめた出来事に依拠していることを察知できるし、「ボブをひっぱたいたやつ」という記述から、ボブの頬を真っ赤にさせた出来事に話者が依拠していることを察知できる。上の落とし穴の事例でも、「次にあそこを通る人」という記述から、自分たちが作った落とし穴に引っかかるような出来事に依拠していることは明らかである。そこから、我々はたとえ記述に適合する対象が存在しなかったとしても、それが誰（何）であれその出来事に決定的に参与した対象について話者は語っているものとして、誤記述を度外視し、発話を合理的な真な発話をなしているものとして解釈しているのではないだろうか。スミスは殺されてはいないのだが、殺人と想起させるほど暴行を加えた出来事に参与した対象に関して、それが誰であれスミスに危害を加えた人物について真な発話をなしているのだとか、ボブはひっぱたかれてはいないのだが、彼の頬を赤くはらすという出来事に参与した人物について真な発話をなしているものとして、合理的に発話を解釈していると思われる。上の落とし穴の例でも、落とし穴に引っかかったのが人でなかったり、落とし穴の上を通ることによって落とし穴に引っかかっていなかったりしたのだとしても、落とし穴に引っかかるという出来事に参与している限りで、その対象について真なことを語っているものとみなしているのかもしれない。

以上の考察から、私は、証拠事例は指示的用法の一部ではなく、出来事に依拠した帰属的用法の一例として一般化できると主張する。もちろん、私の議論が決定的なものだと主張するつもりはない。まず、私は「出来事（event）」という用語を素朴で直観的な意味でしか使っておらず、出来事に依拠した帰属的用法をより正確な仕方で特徴づけるには、まず出来事という概念に対する一定の分析を必要とするのは疑いない。また、私は帰属的用法の誤記述の事例が、全て話者の出来事についての誤信念に由来しているのかどうかに関しても確信がもてていない。例えば、出来事ではなく「持つ（have）」や「身に着ける（wear）」といった状態（state）に関する誤信念に由来するような誤記述の事例も存在するように思われる。カプランが「盲目的記述」と呼ぶものや、私が「出来

<sup>120</sup> ここで私が「パラフレーズ」と呼んでいる事柄は、少なくとも私の立場からすれば、指示ではないことに注意されたい。なぜなら、3.2.1節で論じたように、話者が指示をする意図をもっていると言えるためには、指示をするという目的に対してその指示対象が誰（何）であるのかを知っていなければならないと私は考えているからである。出来事に依拠した帰属的用法において、この要件は満たされえないことは3.2.1節でも見た通りであるし、ここで使っている落とし穴の例ではいわんやだろう。

事に依拠する帰属的用法」と呼んだもの以外にも、帰属的用法の中に更なる区分が必要なかもしれない。

そして、先に述べたように、私はここで証拠事例ということで、ベティの例やスミスの殺害者の例といった非常に限定的な事例しか扱っていない。したがって、これまでの私の議論が、カプランが「証拠事例」と呼ぶ事例のうち、どこまで有効かも定かではない。例えば、カプランが述べている通り、確かに我々は一冊の本から、見知りをもっていなくても、その著者について様々に思いを巡らすことができる。これは、その本から著者を念頭におくことができるからかもしれない。何らかの意味で、その著者を知っていると言うこともできるかもしれない。ゆえに、我々は、例えば、「この本の著者 (the author of this book)」という記述を指示的に用いることができ、その著者について語ることができるのかもしれない<sup>121</sup>。

いずれにせよ、帰属的用法と指示的用法の境界が最終的にどこに求められるのかを明らかにするためには、我々の念頭におくという概念やそもそもの指示概念に関して、より綿密な探求を必要とすることは疑いない。もちろん、明確な境界線など存在しないのかもしれないし、そもそも帰属的用法と指示的用法という仕方で確定記述の用法を区分すること自体が誤っているのかもしれない。こういった事柄は本稿の射程を大きく超え出ているゆえ、私が現段階で述べられることは何もない。指示的用法だけでなく、帰属的用法もまた、これまで哲学者たちに想定されてきたほど単純な確定記述の用法ではないことを示唆することができたのであれば、本稿の目的の大部分は果たされているだろう。

---

<sup>121</sup> また次の事実も私の頭を悩ましている。証拠事例の代表例として、ルヴェリエの海王星の事例はよく引き合いに出されるところである。本稿でこれ以上の詳細な議論をする余裕はないが、ドネランは 1977 年の時点では明らかに、ルヴェリエは海王星を念頭におくことはできない、と考えていた（詳細は、Donnellan (1977) を参照）。しかし、彼は往年になって、ルヴェリエが海王星を命名の時点で念頭におくことができたと見解を変えたという (Kaplan (2012), f.n. 92.)。これを整合的に解釈するには、次の 2 つの道筋がありうるだろう。1 つ目の道筋は、ドネランも、念頭におくという概念をカプランやアルモグが示唆する方向に拡張できる、と考えを改めたと解釈する道である。しかし、なぜ彼がそのように立場を変更したのかが明らかではない上に、海王星の例を私がここで言うところの証拠事例の 1 つだとみなすのであれば、私の考えでは、間違っている。2 つ目の道筋は、海王星の例は、スミスの殺害者やベティの例に代表されるような単純な証拠事例とは事情が異なると考える道筋である。このように考える動機を 1 つ挙げよう。ルヴェリエを含め天文学者たちが、たった一度だけ天王星の摂動を観測したことで、「海王星」という名前が導入されたとは考えづらい。ルヴェリエが天王星の摂動となっている対象が存在すると仮定するにあたり、天文学や物理学といった一定の科学的知識に依拠していながら、おそらく何度も海王星が引き起こしている因果的結果を観測したと考えられる。彼らは、何度も天王星の軌道の歪みを観測し、実際に天王星の理論上の軌道とは誤差が生じることを確かめていたはずである。つまり、何度も様々な仕方で、海王星が因果的に引き起こした痕跡や証拠に触れ、科学的な根拠に依拠して海王星の存在を措定したとははずである。その点で、海王星の例は、ここで私が述べている証拠事例とは異なりうるだろう。

## おわりに

私の証拠事例についての解釈が、なぜ荒磯やカプラン、アルモグらとは袂をわかつことになったのかを述べて、本稿を締めくくことにしよう。彼らはドネランの一連の言語に関する洞察を、指示という概念との結びつきから理解していると思われる。ゆえに、ドネランがなした以上に、彼の哲学のうちにみられる指示という概念を拡張できる可能性を提示していると思われる。これに対して、私は、合理的な発話の設計と解釈という観点から彼の哲学は解釈されるべきだと考えている。もちろん、この中には指示概念に関する洞察も多く含まれているのではあるが、ドネランの洞察はそれ以上のことを教えてくれている。彼の言語哲学の根幹にあるのは、アルモグの言い得て妙な言葉を借りれば、—ここでアルモグの言葉を引用するのも皮肉かもしれないが—「日常言語に抗うことなかれ (Don't fight ordinary language) <sup>122</sup>」と言い表せるだろう。発話を合理的な主体によってなされる 1 つの行為として考え、その設計と解釈には発話の状況や、話者と聞き手の共有知識、話者がもつ意図や目的、信念が複雑な仕方で絡み合っていることを事実として認めることが彼の哲学の出発点にはある。帰属的用法と指示的用法の区別や、固有名に関する指示の歴史的説明説はその所産であって、初めから指示概念を探求することに執念を燃やしていたわけではないというのが私の解釈するドネランである。行為としての合理的な発話の設計と解釈という観点から彼の哲学を捉え直すことで、指示だけではなく、我々の言語活動全般に関してより多くの哲学的示唆を与えてくれるのではないだろうか。

---

<sup>122</sup> Almog (2004), p. 401.

## 参考文献

- Amaral, F. (2008). "Definite Descriptions Are Ambiguous," *Analysis*, 68(4), pp. 288-297.
- Almog, J. (2004). "The Proper Form of Semantics," in M. Reimer and A. Bezuidenhout (eds.), *Descriptions and Beyond*, Oxford: Oxford University Press, pp. 390-419.
- . (2012). "Editor's Preface," in J. Almog and P. Leonardi (eds.), *Essays on Reference, Language, and Mind*, Oxford: Oxford University Press, pp. vii-xi.
- . (2014). *Referential Mechanics: Direct Reference and the Foundations of Semantics*, Oxford: Oxford University Press.
- Austin, J. (1962). *How to Do Things with Words*, Oxford: Oxford University Press.
- Bach, K. (1981). "Referential/Attributive," *Synthesis*, 49, pp. 219-244.
- . (2004). "Descriptions: Points of Reference," in M. Reimer and A. Bezuidenhout (eds.), *Descriptions and Beyond*, Oxford: Oxford University Press, pp. 189-229.
- . (2007). "Referentially used Description: A Reply to Devitt," *European Journal of Analytic Philosophy*, 3(2), pp. 33-48.
- Bianchi, A and Bonanini, A. (2014). "Is There Room for reference Borrowing in Donnellan's Historical Explanation Theory?" *Linguistics and Philosophy*, 37, pp. 175-203.
- Bonanini, A. (2016). *An Idea from Donnellan: Deferential and Non-deferential Uses of Proper Names*, Dissertation, Università degli Studi di Parma.
- Bontly, T. (2005). "Conversational Implicature and the Referential Use of Descriptions," *Philosophical Studies*, 125, pp. 1-25.
- Burge, T. (1974). "Demonstrative Constructions, Reference, and Truth," *The Journal of Philosophy*, 71(7), pp. 205-223.
- Boër, E. S and Lycan, G. W. (1986). *Knowing Who*, Massachusetts: MIT Press.
- Clark, H. (1996). *Using Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Devitt M. (1974). "Singular Terms," *Journal of Philosophy*, 71(7), pp. 183-205.
- . (1981). "Donnellan's Distinction," in P. E. French, T. E. Uehling, Jr., and H. K. Wettstein (eds.), *Midwest Studies in Philosophy*, 6(1), pp. 511-526.
- . (1997). "Meanings and Psychology: A Response to Mark Richard," *Nôus*, 31(1), pp. 115-131.
- . (2004). "The Case for Referential Descriptions," in M. Reimer and A. Bezuidenhout (eds.), *Descriptions and Beyond*, Oxford: Oxford University Press, pp. 280-314.
- . (2007a). "Referential Descriptions and Conversational Implicatures," *European Journal of Analytic Philosophy*, 3(2), pp. 7-32.
- . (2007b). "Referential Descriptions: A Note on Bach," *European Journal of Analytic Philosophy*, 3(2), pp. 49-54.
- Donnellan, K. (1966). "Reference and Definite Description," *The Philosophical Review*, 75, pp. 281-304. (2013, 荒磯敏文訳, 「指示と確定記述」, 松阪陽一編訳, 『言語哲学重要論文集』, 春秋社, 91-129 頁)
- . (1968). "Putting Humpty Dumpty Together Again," *The Philosophical Review*, 77(2), pp. 203-215.
- . (1970). "Proper Names and Identifying Descriptions," *Synthesis*, 21(3-4), pp. 335-358.
- . (1974). "Speaking of Nothing," *The Philosophical Review*, 83(1), pp. 3-31.

- . (1977). "The Contingent A Priori and Rigid Designators," in P. E. French, T. E. Uehling, Jr., and H. K. Wettstein (eds.), *Midwest Studies in Philosophy*, 2, pp. 12–27.
- . (1978). "Speaker Reference, Descriptions, and Anaphora," in P. A. French, E. U. Theodore, Jr., and H. K. Wettstein (eds.), *Contemporary Perspective in the Philosophy of Language*, Minneapolis: University of Minnesota Press, pp. 28–44.
- . (2012). *Essays on Reference, Language, and Mind*, Oxford: Oxford University Press.
- Eaker, E. (2012). "Donnellan on the Necessity A Posteriori," in J. Almog and P. Leonardi (eds.), *Having in Mind: The Philosophy of Keith Donnellan*, Oxford: Oxford University Press, pp. 53–78.
- Evans, G. (1973). "Causal Theory of Names," *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volumes*, 47, pp. 187–208.
- Geurts, B. (1997). "Good News about the Description Theory of Names," *Journal of Semantics*, 14, pp. 314–348.
- Grice, P. (1957). "Meaning," *The Philosophical Review*, 66(3), pp. 377–388.
- . (1968). "Utterer's Meaning, Sentence-Meaning, and Word-Meaning," *Foundations of Language*, 4, pp. 225–242.
- . (1969). "Vacuous Names," in D. Davidson and J. Hintikka (eds.), *Words and Objections*, Dordrecht: Reidel, pp. 118–145.
- . (1975). "Logic and Conversation," in P. Cole, and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics, Vol. 3: Speech Act*, New York: Academic Press, pp. 41–58.
- Inan, I. (2006). "Are 'Attributive' Uses of Definite Descriptions Really Attributive?" *KRITERION*, 20, pp. 7–13.
- Kanterian, E. (2011), "Kripke's Metalinguistic Apparatus and the Analysis of Definite Descriptions," *Philosophical Studies*, 156, pp. 363–387.
- Kaplan, D. (1978). "Dthat," in P. Cole (ed.), *Syntax and Semantics*, New York: Academic Press, pp. 221–243.
- . (2012). "An Idea of Donnellan," in J. Almog and P. Leonardi (eds.), *Having in Mind: The Philosophy of Keith Donnellan*, Oxford: Oxford University Press, pp. 122–175.
- Kasher, A. (1982). "Grician Inference Revised," *Philosophica*, 29(1), pp. 25–44.
- Korta, K and Perry, J. (2011). *Critical Pragmatics: An Inquiry into Reference and Communication*, Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2015). "Pragmatics," in Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Winter 2015 Edition, URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2015/entries/pragmatics/>>.
- Kripke, S. (1977). "Speaker's Reference and Semantic Reference," in P. E. French, T. E. Uehling, Jr., and H. K. Wettstein (eds.), *Midwest Studies in Philosophy*, 2, pp. 255–276.
- . (1980). *Naming and Necessity*, Harvard: Harvard University Press.
- . (2009). "Presupposition and Anaphora: Remarks on the Foundation of the Projection Problem," *Linguistic Inquiry*, 40(3), pp. 367–386.
- . (2013). *Reference and Existence: The John Locke Lecture*, Oxford: Oxford University Press.
- Lepore, E and Stone, M. (2014). *Imagination and Convention*, Oxford: Oxford University Press.
- Lesersohn, P. (1991). "Existence Presupposition and Background Knowledge," *Journal of Semantics*, 10, pp. 113–122.

- Lewis, D. (1979). "Scorekeeping in the Language Game," *Journal of Philosophical Logic*, 8, pp. 339-359.
- Linsky, L. (1963). "Reference and Referents," in C. E. Caton (ed.), *Philosophy and Ordinary Language*, Urbana: Illinois University Press, pp. 74-89.
- Mackay, A. F. (1968), "Mr. Donnellan and Humpty Dumpty on Referring," *The Philosophical Review*, 77(2), pp. 197-202.
- Maier, E. (2015). "Reference, Binding, and Presupposition: Three Perspectives on the Semantics of Proper Names," *Erkenntnis*, 80, pp. 313-333.
- Neale, S. (1990). *Descriptions*, Massachusetts: MIT Press.
- Nunberg, G. (2004). "Descriptive Indexicals and Indexical Descriptions," in M. Reimer and A. Bezuidenhout (eds.), *Descriptions and Beyond*, Oxford: Oxford University Press, pp. 261-279.
- Over, D. E. (1985). "Constructivity and the Referential/Attributive Distinction," *Philosophy and Linguistics*, 8, pp. 415-429.
- Persons, T. (1990). *Events in the Semantics of English: A Study in Subatomic Semantics*, Massachusetts: MIT Press.
- Pupa, F. (2008). *Ambiguous Articles: An Essay on the Theory of Descriptions*, Dissertation, CUNY Graduate Center.
- Ramachandran, M. (1996). "The Ambiguity Thesis Versus Kripke's Defence of Russell," *Mind and Language*, 11, pp. 371-87.
- Reimer, M. (1998). "Donnellan's Distinction/Kripke's Test," *Analysis*, 58(2), pp. 89-100.
- Rostworowski, W. (2013). "The Attributive Use and Russell's Paradigm," *Filozofia Nauki*, 21(2), pp. 59-68.
- and Pietrulewicz, N. (2018). "Are Descriptions Really Descriptive? An Experimental Study on Misdescription and Reference," *The Review of Philosophy and Psychology*, 9, DOI: <https://doi.org/10.1007/s13164-018-0418-z>.
- Russell, B. (1905). "On Denoting," *Mind*, 14(56), pp. 479-493.
- Salmon, N. (1982). "Assertions and Incomplete Definite Descriptions," *Philosophical Studies*, 42, pp. 37-45.
- . (1991). "The Pragmatic Fallacy," *Philosophical Studies*, 63, pp. 83-97.
- . (2004). "The Good, the Bad, and the Ugly," in M. Reimer and A. Bezuidenhout (eds.), *Descriptions and Beyond*, Oxford: Oxford University Press, pp. 230-260.
- . (2007). "Two Conceptions of Semantics," reprinted in *Content, Cognition, and Communication: Philosophical Papers II*, Oxford: Clarendon Press, pp. 340-349.
- Schoubye, A. J. (2013). "Against the Argument from Convention," *Linguistics and Philosophy*, 35, pp. 515-532.
- Simons, M. (2001), "On the Conversational Basis of Some Presuppositions," *Semantics and Linguistic Theory*, 11, pp. 431-448.
- Strawson, P. (1950). "On Referring," *Mind*, 59, pp. 320-344.
- . (1954). "Reply to Sellars," *The Philosophical Review*, 63(2), pp. 216-231.
- Thomason, R. (1990). "Accommodation, Meaning, and Implicature," in P. R. Cohen, J. L. Morgan and M. Pollack (eds.), *Intentions in Communication*, Massachusetts: MIT Press, pp. 325-63.
- von Fintel, K. (2004). "Would You Believe It? King of France is Back! (Presuppositions and Truth-Value Intuitions)" in M. Reimer and A. Bezuidenhout (eds.), *Descriptions and Beyond*, Oxford: Oxford University Press, pp. 315-341.

- Wettstein, H. (1981). "Demonstrative Reference and Definite Descriptions," *Philosophical Studies*, 40, pp. 241-257.
- . (1983). "The Semantic Significance of the Referential and Attributive Distinction," *Philosophical Studies*, 44, pp. 187-196.
- . (1984). "How to Bridge the Gap between Meaning and Reference," *Syntheses*, 58, pp. 63-84.
- . (2012). "Having in mind," in J. Almog and P. Leonardi (eds.), *Having in Mind: The Philosophy of Keith Donnellan*, Oxford: Oxford University Press, pp. 93-106.
- Wharton, T. (2002), "Paul Grice, Saying and Meaning," *UCL Working Papers in Linguistics*, 14, pp. 207-48.
- 荒磯敏文 (2005). 「痕跡を通した指示をともなう指示的用法について」, 科学哲学, 38(1), 47-61 頁
- 松阪陽一 (2009). 「指示と意図」, 飯田隆他編, 『岩波哲学講座 第3巻 言語/思考の哲学』 (2009, 岩波書店), 15-42 頁
- 三木那由他 (2015). 「心理的であり公共的である意味について」, 博士論文, 京都大学